

# 読書悠々日記

(2004年～2009年)

久恒啓一

## 目次

2004年	5
村上春樹「アフターダーク」(講談社)	5
下川浩一「グローバル自動車産業経営史」(有斐閣)	5
中村好文「住宅読本」(新潮社)	5
松田忠徳「温泉教授の日本全国温泉ガイド」(光文社)	5
2005年	5
桐野夏生「魂萌え」(新潮文庫)	5
桜井よしこ「何があっても大丈夫」(新潮社)	5
船曳建夫「大学のエスノグラフィティ」(有斐閣)	6
高橋和彦「完全現代語訳 樋口一葉日記」(アドレエー)	6
2006年	8
茂木健一郎「脳と仮想」(新潮社)	8
安保徹「病気は自分で治す 免疫学101の処方箋」(新潮社)	9
浅野史郎「疾走12年 アサノ知事の改革白書」(岩波書店)	9
浦達也「実感の同時代史---戦争からラストモダンまで」(批評社)	10
日下公人「数年後に起きていること」(PHP)	11
芝豪「小説 王陽明」(明德出版社)上下巻	12
ジーン・D・コーエン「いくつになっても脳は若返る」(翻訳本)(ダイヤモンド社)	12
内館牧子「養老院より大学院」(講談社)	13
北康利「白洲次郎 占領を背負った男」(講談社)	14
飯島勲「小泉官邸秘録」(日本経済新聞社)	15
2007年	16
梅田望夫・平野啓一郎「ウェブ人間論」(新潮新書)	16
谷沢永一「執筆論」(東洋経済新報社)	18
渡部昇一「知的生活の方法」(講談社現代新書)	18
谷沢永一・渡部昇一「人生後半に読むべき本」(PHP)	19
竹中平蔵「構造改革の真実 竹中平蔵大臣日誌」(日本経済新聞社)	20
童門冬二「小説 佐藤一斎」(致知出版社)	21
佐藤優「獄中記」(岩波書店)	22
東大総長・小宮山宏「東大のこと、教えます---総長自ら語る!教育、経営、日本の未来...」(課題解決一問一答)」(プレジデント社)	24
小林秀雄「人生の鍛錬---小林秀雄の言葉」(新潮新書)	25
鳥居民「近衛文麿 黙して死す」(草思社)	26
見城徹「編集者という病」(太田出版)	26

林真理子「グラビアの夜」(集英社文庫) .....	27
梅田望夫・茂木健一郎「フューチャリスト宣言」(ちくま新書) .....	27
渡辺淳一「鈍感力」(集英社) .....	29
山本皓一「日本人が行けない「日本領土」」(小学館) .....	31
山本眞一「大学事務職員のための高等教育システム論」(文葉社) .....	32
寺島実郎「20世紀から何を学ぶか(上)--1900年への旅 欧州と出会った若き日本」(新潮選書) .....	33
竹内洋「教養主義の没落--変わりゆくエリート学生文化」(中公新書) .....	35
佐伯彰一「日本人の自伝」(講談社学術文庫) .....	37
松井今朝子「吉原手引草」(幻冬舎) .....	38
東山魁夷「唐招提寺への道」(新潮選書) .....	38
上田紀行「目覚めよ仏教! --ダライ・ラマとの対話」(NHKブックス) .....	40
多田富雄「寡黙なる巨人」(集英社) .....	42
正木晃「マンダラとは何か」(NHK出版) .....	42
和泉育子「できる上司の聞く技術」(中経出版) .....	42
渡辺京二「逝きし世の面影」(平凡社) .....	42
梅田望夫「ウェブ時代をゆく」(筑摩新書) .....	44
谷口正和「時間単位の市場戦略」(講談社) .....	51
玄侑宗久「龍の棲む家」(文芸春秋) .....	52
2008年 .....	53
阿川弘之「大人の見識」(新潮新書) .....	53
勝間和代「効率が10倍アップする 新・知的生産術--自分をグーグル化する方法」 .....	55
浅田次郎「蒼穹の昴」(講談社文庫) .....	56
石川九楊「縦に書け! 横書きが日本人を壊している」(祥伝社) .....	57
波頭亮「就活の法則--適職探しと会社選びの10ヶ条」(講談社) .....	58
梅田望夫「ウェブ時代 5つの定理」(文藝春秋) .....	60
斉藤孝・梅田望夫「私塾のすすめ --ここから創造が生まれる」(ちくま新書) .....	61
桐野夏生「東京島」(新潮社) .....	64
望月実「問題は『数字センス』で8割解決する」(技術評論社) .....	65
浅沼ヒロシ「泣いて笑ってホッとして・・・」(メディア・ポート) .....	66
瀬戸内寂聴「奇縁まんだら」(日本経済新聞出版社) .....	67
北康利「同行二人 松下幸之助と歩む旅」(PHP研究所) .....	69
楊逸・ヤンイー「時が滲む朝」(文藝春秋) .....	70
井上荒野「切羽へ」(新潮社) .....	72
三好徹「文壇ゴルフ覚え書き」(集英社) .....	73
成毛真「本は10冊同時に読め!」(三笠書房) .....	74

内田樹・名越康文「14歳の子を持つ親たちへ」(新潮新書).....	74
橋本治「小林秀雄の恵み」(新潮社).....	74
2009年.....	77
小中陽太郎「市民たちの青春 小田実と歩いた世界」(講談社).....	77
北康利「九鬼と天心」(PHP).....	79
橋本治、内田樹「橋本治と内田樹」(筑摩書房).....	81
市村清「市村清講演集」(三愛新書).....	82
青木新門「納棺夫日記」(文春文庫).....	83
宮本雅史「歪んだ正義——特捜警察の語られざる真相」(情報センター出版局).....	85
村山治「市場検察」(文藝春秋).....	85
村上龍「無趣味のすすめ」(幻冬舎).....	86
森田元「戦略キャンプ」(ダイヤモンド社).....	88
梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る——羽生善治と現代」(中央公論社).....	90
瀬戸内寂聴「奇縁まんだら・続」(日本経済新聞出版社).....	92
西川祐子「日記をつづるとのこと 国民教育装置とその逸脱」(吉川弘文館).....	94
山本冬彦「週末はギャラリーめぐり」(ちくま新書).....	94
語り森繁久彌・文久世光彦「大遺言書」シリーズ(新潮社).....	96
神田敏晶「Twitter 革命」(ソフトバンク新書).....	98
津田大介「Twitter 社会論」(洋泉社).....	98
内田樹「日本辺境論」(新潮新書).....	99
寺島実郎「世界を知る力」(PHP新書).....	100

2004 年

村上春樹 「アフターダーク」 (講談社)

新幹線の中で村上春樹さんの最新作「アフターダーク」を読了。(JAL時代に二人で食事をしたことがある。)

下川浩一 「グローバル自動車産業経営史」 (有斐閣)

栄光！ 苦悩！ そして再生へ！！

現代的・未来志向的な展望の下、新たなパラダイムを追及する心血を注いだ学問的労作。

自動車メーカーのコンサルをしているので、自動車産業についての勉強をすることに。

中村好文 「住宅読本」 (新潮社)

居心地、台所、手ざわり、家具、、、

住宅名人の建築家が考え抜いた12の条件を写真やイラストでわかりやすく解説。「書齋」がないのが少し不満。

松田忠徳 「温泉教授の日本全国温泉ガイド」 (光文社)

肌で選んだ 227 湯378軒。温泉、湯宿選びの新基準！

米沢で講演があるので、宿を探すために購入。

2005 年

桐野夏生 「魂萌え」 (新潮文庫)

直木賞をとった「柔らかな頬」、「OUT」「グロテスク」などが代表作の桐野夏生が書いた今までのホラー小説とは一味違う作品を読んだ。

主人公は 59 歳で夫を突如亡くした主婦。

葬儀の混乱、夫の長年の浮気の発覚、息子との確執によるカプセルホテルへの家出、息子や娘との財産分けのトラブル、本人の一夜の情事、友人たちとの交流と微妙な心理、嫁の悩み、老いの実態、夫の愛人との対決など現実に起こるであろう事件が次々と起こっていく。その都度、世間を知っていきながら、一人で生きていくことを決意し、強くなっていく主人公の姿をユーモアたっぷりで描いていく。

桜井よしこ 「何があっても大丈夫」 (新潮社)

「エイズ犯罪・血友病患者の悲劇」(大宅壮一ノンフィクション賞)、「日本の危機」(菊池寛賞)など硬派の女性論客・桜井よしこさんの「何があっても大丈夫」(新潮社)を読

んでいる。桜井さんはテレビなどでも男性の中で冷静かつ論理的に議論を進める姿をよく見かける。

1945 年生まれで、敗戦の混乱の中ベトナムの野戦病院で生まれ、引き上げ後は両親の故郷である大分県と新潟県で少女時代を過ごす。この大分県というのは、中津市である。同郷であるとわかり、興味を抱き読み始めた。永添、大幡、耶馬溪線、八幡前、日豊本線、という懐かしい言葉がみえる。この中津で 13 歳まで暮らしている。

この本は、明治、大正、昭和、平成と続く母上の、日本の運命と重なり合う形での大きな劇的変化を体験してきた人生を描く物語だ。第 1 章は、「しっかり物をみなさい」――母がくれた宝物、第 2 章は、「私たちは 2 番目なんだ」――父からの自立、第 3 章は、「一体、何になりたいのか」――ジャーナリストへの道。「女性は男性の 2 倍働き、優雅であれ」というテーマを綴った部分があるが、桜井さんの目指してきた姿だろう。

#### 船曳建夫「大学のエスノグラフィティ」(有斐閣)

東大の教養学部の先生たちが書いた「知の技法」(基礎ゼミの副読本として編集)という本が随分前にベストセラーになって話題になったことがある。その著者の一人がこの船曳先生だ。「良くも悪くも日本の大学の典型である東大」を内部から眺めた文化人類学的考察となっている。

300 人の教師がいる教養学部に属するこの先生は、自身を「無名ではない、かといって大変有名ではない、というくらいです」と評価している。

#### 高橋和彦「完全現代語訳 樋口一葉日記」(アドレエー)

完全現代語訳の「樋口一葉日記」(高橋和彦)を読み終える。16 歳(明治 20 年)から亡くなる 25 歳(明治 29 年)までの 9 年間の日常や想いを綴った作品である。2 段印刷で 450 頁ほどある。「恋と文学と借金」に彩られた作品で、一葉の人となりや考え方、姿勢などがよくわかる。一葉は可愛そうなくらい心のきれいな女性だと思った。

一家の責任を果たそうという気概、文学への取り組み、世間というものへの醒めた眼差し、親孝行のための借金、萩の舎という歌塾での稽古の様子、鷗外・緑雨・禿木・露伴などとの交遊、桃水との恋の葛藤、一日 10 冊を読んだこともある読書の習慣、上野や本郷・竜泉寺を中心とする東京の様子、雑誌への小説の寄稿などの経緯、人々との会話の詳細な内容、地震や雨の多い東京の様子、お金の話、、、、。

- ・ 私のは古着ではあっても親からの贈り物だと思えば、ほのぼのと嬉しい思いがする。
- ・ 思いの溢れることを書き記すことにします。
- ・ 例によって、小説気違いなので、夜十時まで読み耽って、十冊ほど読む。
- ・ 図書館は、いつ来ても男子は非常に多いが、女子の閲覧者が殆ど一人もいない

のは不思議な気がする。

- ・ 人間として忍耐ということは、どんな宝よりも立派なものだと思う。
- ・ 命ある限りはどんな苦しみにも耐え、頑張って学問をしたいと思う。
- ・ 田中みの子さんが私に「遠慮の姫」と仇名をつけて笑ったりなさる。
- ・ 思いのままに書き続けて行くと、人のかげ口ばかりのようになって、自分でも何だか情けない思いです。
- ・ 世間にはどうして、大金持ちで暇をもてあます人が、こんなにもものどかに暮らしているのだろうか。
- ・ 古今の有名な物語や小説を見る度に、自分の文章のまずさが我ながら悲しくなり、、
- ・ 今日から小説を一日に一回分ずつ書くのを勤めとする。一回分書かない日は黒点をつけようと定める。
- ・ 一度読んだらすぐに屑籠に捨てられるような、そんな作品は書かないと思っているのです。
- ・ 千年の後にまで残そうとする大切な名声を、ただ一時的な奢りや栄達でどうして汚してしまうことができようか。
- ・ 私は言いにくかったのですが、思い切って借金のことを申し出たのです。恥ずかしさに顔が燃えるようでした。
- ・ 一番大切なことは親兄弟の為や家の為にすることです。
- ・ 「韓非子」の「説難」の篇は胸に突き刺さる程の感銘を受けた。
- ・ 母上に安らかな生活を与え、妹に良縁を与えることが出来るなら、私は路傍にも寝ようし乞食にもなろう。
- ・ 入るお金は四百字一枚が僅か三十銭になるにすぎない。
- ・ 恋は尊くもあり、また浅ましく惨めでもある。
- ・ 夜、家族みなで相談して商売を始めることに決定する。
- ・ この世を生きて行くために、そろばんを持ち汗を流して商売というものを始めようと思う。
- ・ そして暇ができれば月もみよう花もみよう、興が湧いたら歌も詠もう文章も書こう、また小説も作ろう。
- ・ このまま落ちぶれ果ててしまって、一生涯あのお方にお会いすることも出来ず、忘れられてしまって、私の恋は流れる雲のように空しく消えてしまうのだろうか。
- ・ すっかり忘れてしまったこの日記よ。
- ・ このような時代に生れ合わせた者として、何もしないで一生を終えてよいのでしょうか。何をなすべきかを考え、その道をひたすら歩んで行くだけです。
- ・ 昔の賢人たちは心の誠を第一として現実の人の世に生きる務めを励んできたのです。務めとは行いであり、行いは徳です。徳が積もって人に感動を与え、この感動

が一生を貫き、さらには百代にわたり、風雨霜雪も打ち砕くことも出来ず、その一語一句が世のため人のためになるものです。

- ・それが滾々として流れ広まり、濁を清に変え、人生の価値判断の基準となるのです。
- ・力もない女が何を思い立ったところでどうにもならないとは分かってはいるが、私は今日一日だけの安楽にふけて百年後の憂えを考えないものではない。
- ・邦子が私のことを「なま物知りのえせ者」と非難するのを聞くと、本当にそう見えるのだろうと恥ずかしい思いです。
- ・何といっても安心できるのは、独り静かに昔の書物などを読むときです。
- ・あの源氏物語は立派な作品ですが、書いた人は私と同じ女性です。彼女が私の生まれ代わりだとしても、やはり人間である以上、私と何の違いがありましょう。あの作品の後に、それに匹敵する作品が出てこないのは、書こうと思う人が出てこないからです。今の時代には今の時代のことを書き写す力のある人が出て、今の時代の事を後世に書き伝えるべきであるのに、そんな気持ちを持った人が全くいないのです。
- ・才能は生まれつき備わっているもので、徳は努力して養うものです。
- ・紫式部は天地のいとし子で、清少納言は霜降る野辺の捨て子の身の上と言えるでしょう。
- ・世間の毀誉褒貶を超越して、静かに心をこめて筆墨を採る人が果たして幾人いるでしょうか。
- ・何と馬鹿げたことよ、私を世のすね者と言う。あるいは明治の清少納言とか女西鶴とか言う。
- ・世の中はいつも変わるものなのに、変わらないのは私の貧乏と彼の裕福だけ。
- ・まして一時の情に走り酔い、恋の炎の中に身を投げ入れている人々は、やがて相手の心変わりにつらい思いをすることでしょう。
- ・今の私はすべての欲望を棄て去っているので、
- ・虚名あしばらくの間のことであってやがては消えてしまおうでしょう。しかし、一度人の心に抱かれた恨みは、果たして行く水のように流れ去るでしょうか。
- ・身を棄ててしまったら、世の中の事は何が恐ろしかろうか。
- ・私を訪ねて来る人は十人中九人までは、私が女性であるということを喜んで、もの珍しさで集まって来るのです。
- ・しかし、どうして今さら世間の評判など。

2006年

茂木健一郎「脳と仮想」（新潮社）

第4回小林秀雄賞受賞作「脳と仮想」（茂木健一郎）を読んだ。茂木は1962年生れ

の脳科学者で、ソニーコンピューターサイエンス研究所につとめている気鋭の科学者で、マスコミの寵児でもある。読後の最初の感想は、深い教養と最先端科学の知研がかみ合った本ということだ。小林秀雄、夏目漱石、樋口一葉、ワグナー、柳田国男、三木成夫、小津安二郎、、、、など先人の軌跡を辿りながら、自身の経験を踏まえながら、近代科学が置き捨ててきた「心」の解明へと迫っていく。

- ・ 人間の経験のうち、計算できないものを、現代の脳科学では「クオリア」(感覚質)と呼ぶ
- ・ 熊本より東京は広く、東京より日本は広く、そして日本より頭の中のほうが広い(「三四郎」)
- ・ 毒矢を抜くことよりも、毒矢はどのように出来ているかの解明に専念してきたのが科学である
- ・ この世界に陳腐なものが存在しているのではない。陳腐なものを見方があるだけである
- ・ なぜ単なる物質を、いくら複雑とはいえ、脳というシステムにくみ上げると、そこに「魂」が生じてしまうのか、とんと見当がつかない。見当がつかないということは、きっと、近代科学のやり方に、どこな根本的な勘違いがあるということを意味するのだろう。重大な錯誤があることを意味するのだろう。
- ・ 物質である脳に、意識が宿る。この不可思議な事実の中に、人間の喜びと哀しみの、全ての源泉があるのである。

安保徹「病気は自分で治す 免疫学 101 の処方箋」(新潮社)

安保は免疫学の大家で、一般向けの本を多量に書いたりしている実践家でもある。

- ・ 55 歳までは研究成果を上げるために切迫感を持ちながらやってきた。
- ・ 船井幸雄氏は、夜は 9 時半に寝て朝 3 時半に起床する。忙しい毎日で健康を維持するには、生活のリズムが大切です。

浅野史郎「疾走12年 アサノ知事の改革白書」(岩波書店)

浅野史郎前宮城県知事の新著「疾走12年 アサノ知事の改革白書」を読んだ。

浅野知事とは97年の秋から始まった行政改革推進委員会での議論、5年間続いた県民サービス向上委員会委員長としての知事室での毎回の提言、県政をめぐる勉強会、入学式などの公的会合、私的な懇親会などさまざまな場面でご一緒したことがある。一度、お誘いがあつて議会答弁を傍聴したこともある。終わったあと会ったら「知事って大変でしょう？」と言われてうなずいたことも思い出す。

寺島実郎さんが「浅野史郎知事ほど爽やかに筋を通す人物を知らない」と推薦の言葉をオビに書いているが、節目節目に筋を通すという意味ではその評はあたっているように思う。

この書では、四選不出馬、組織スキャンダル、選挙、プロ野球楽天球団誕生秘話、障害者施設解体宣言、全国知事会、県警犯罪捜査報償費凍結などの経緯が本人の言葉で率直に語られているが、私はこの書を県政報告というより、立候補、3回の選挙、退任といった人生の節目に浅野史郎という人物がどういう気持ちで決断をしてきたかという観点から読んでみたい。

45歳の厚生省課長時代に故郷の宮城県で起こったゼネコン汚職事件で、迷いに迷いながら職を辞して知事選に立候補する。妻、母などの家族の影響も大きいことがわかる。決断の過程で何度も「路頭に迷う」という言葉が頭にかすめるが、流れの中で勝ち目の薄いといわれた選挙に立候補する。次の職が未決定のまま、23年以上勤めた役所を辞めるという決断の大きさには頭を下げるほかはない。だから、「悩み、苦しみを経験しない人に選挙のことを語って欲しくないという気にすらなってしまう」という言葉が出てくるのだろう。

57歳で四選をやめて不出馬をするときの心の動きを以下に記してみる。

- ・ 辞め時を自分で選ぶ。
- ・ アカデミズム、言論活動、マスコミ出演というやりたいことと転身のタイミング。
- ・ 若くして知事を退任した人の新しいビジネス・モデルへの挑戦。
- ・ この年齢で辞めなければ知事しかできない体になってしまう。

こうやって並べてみると、節目節目で明らかにライフデザインを強く意識しているようにみえる。

また選挙に強かった知事の本当の心のうちと、選挙のやり方など3回の知事選の語りも興味深い。

マッチを擦って枯野に投げ込めば燃え広がるだろうという最初の選挙。選挙における風の存在。

新進党小沢一郎党首との会談の様子。選挙のありようが知事のありようを決める。選挙を通じて知事になっていく。

100円カンパ方式は集まった金額よりもその過程で必ず自分に投票するようになる、そのことが大事なことだと言っている。これなどは選挙に強かった知事の秘密かも知れない。

浦達也「実感の同時代史---戦争からラストモダンまで」(批評社)

NHKのディレクターでニューアカデミズムの仕掛け人だった浦達也さんが、新著を出した。1932年生れの著者は、振幅が極端に大きく特異な実体験と独自の立ち位置、そして複数の活動拠点(ジャーナリズムとアカデミズム)を持って活動してきた人物である。レトロ・フューチャーというキーワードを縦横に駆使しながら文明や時代を語ってきた。

本書は敗戦から現在に至るまでの自分史を語りながら、同時代史を紡ごうという挑戦的な試みである。著者渾身の書。

敗戦直後のヒロシマを舞台とした国策「特別科学学級」の経緯と実態、闇市を浮浪する不良少年、田舎と下町、NHKの悲劇、百花斉放の知の地殻変動、ニューアカ旋風と新人類ブーム、アカデミズムでの実験と卒倒、、、。

この本に出てくる同時代を生きた登場人物の名前を挙げてみよう。

永井柳太郎、湯川秀樹、永井道雄、香月泰男、三島由紀夫、小林信彦、生田萬、中沢新一、寺山修司、太宰治、角川春樹、野村秋介、坪野哲久、木村哲人、西舘好子、小津安二郎、立花隆、樺美智子、浅沼稻次郎、島成郎、司馬遼太郎、福間健二、大島渚、蜷川幸夫、上田哲、島桂次、海老沢勝二、梅原猛、斉藤俊彦、河村雄次、増田通二、水野誠一、磯崎新、中井久夫、風間杜夫、糸井重里、南伸坊、栗本慎一郎、田中康夫、宮台真司、吉本隆明、埴輪雄高、浅田彰、佐橋滋、松田義幸、三浦雅士、川本三郎、山口昌男、小沢昭一、上野千鶴子、清水博、小田晋、岸田秀、公文俊平、中森明夫、井上リサ、伊藤俊治、内藤千佳、西本直人、、、。

本書の内容を簡単にまとめるよりも、人物の名前を連ねる方がメッセージ性が高いかもしれない。

日下公人 「数年後に起きていること」(PHP)

統計を見て話す専門家の意見は遅れる。

エコノミストに聞いて報道するマスコミはさらに遅れる

政経冷熱は聖徳太子以来千四百年間、不動の日中関係である。

日本経済は、美の経済、質の経済。

日本は高級マーケットで生きていく、中国とアメリカは中級マーケット。

美・風流・品格・道義・徳性

ニュービジネスのヒントは、健康・社交・学校・信仰・格好(五コー)と風流

インディペンデントとは給料で生きていない人。上がりで暮らせる人。

もともと中国には外務省はなかった。

衛生戦争と汚職革命が世界に広がる。

死活的問題は、日本精神と子どもの教育、そして日本語である。

日本精神の特徴

日本語一つで世界がわかる

千四百年の歴史でセンスになっている

被侵略がないので全員共有

共同体の論理も、弱肉強食のグローバルスタンダードもわかる

以上を、生活はもちろん、芸術や産業にも応用して磨きがかかっている

芝豪「小説 王陽明」(明德出版社)上下巻

王陽明という人物とはいずれ向かい合わなくてはならないとずっと考えてきた。

陽明の書いた書物もいくつか買って眺めてみたことも何度かある。しかし、なかなかその思想の本質まで迫った感じはなかった。

芝豪という人の「小説 王陽明」(明德出版社)上下巻を手に入れて読み終わった。思想の発展の様子が本人の心境、環境、遭遇する事件、ライバルとの問答、弟子とのやり取りなどの中で、エキスとして現われてくる。思想は本人の成長とともに変化、回転、成熟していくものだろうから、書き表した書物からだけではなかなかわからない。人物を身近に感じながらその発展の経過を知ることができるので、この小説・評伝という形式は優れた表現方法であると感じた。

後に「知行合一」で知られる陽明学と呼ばれるこの聖人の学は、すべての人に初めから備わっている良知を磨き続けること(「至良知」)が大切であるとする。そのために「事上練磨」を強調した。この考えは、朱子学(朱子自身が恐れたように訓詁学に墮した)と対立する一大思潮に育っていく。日本でも、大塩平八郎、佐藤一斎、河井継之助、安岡正篤などの流れになっていく。

こういう文脈の中で王陽明のことを理解していたのだが、陽明は軍事にも抜群の能力を発揮している。それは諸葛孔明の働きを髣髴とさせる見事なものだった。

王陽明は波瀾万丈の生涯を57歳で閉じている。

この書はもういちど読み直したい。

小説の中から少し。

- ・ 格物は物に格(いた)るではなく、物を格(ただ)すとすべきだ
- ・ 職務に即して学を進めるべきだ。それこそが真の格物、つまり物を格す(ただす)ことだ
- ・ 人間の活動はすべてが事上練磨の対象。功夫を重ねることによって良知が磨かれる
- ・ 平天下、治国、齊家、修身、正心、誠意、到知、格物
- ・ 山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し
- ・ 狂者(よいと思うことを行き過ぎを懼れずに行う者)
- ・ 兵は惟れ凶器、已むを得ずしてしかる後に用う

ジーン・D・コーエン「いくつになっても脳は若返る」(翻訳本)(ダイヤモンド社)

野田一夫(監修)、村田裕之(翻訳)、

ダイヤモンド社から出た「いくつになっても脳は若返る」(ジーン・D・コーエン著)の翻訳書を読んだら、そのことが書いてあった。この本では結晶性知能とは「学校生活や日常生活から学んで蓄えられた情報や語彙を指しています。また問題解決に応用さ

れる技能や知識も含まれます」と説明してある。脳については次のように記している。

- ・ 経験や学習に応じて、脳は自ら変化を続ける
- ・ 新しい神経細胞が、生涯にわたって生成され続ける
- ・ 感情を司る脳回路は、年齢とともに成熟し、バランスがよくなる
- ・ 年長者は、若年者よりも脳の多くの場所を同時に使う

この本はリタイヤした高齢者に 1000 時間以上の対面インタビューを行ってきた著者の報告であるから、事例が豊富でリアリティがある。リタイヤメントした人たちの大半は新たな峠を登ろうとする人たちだったそうだ。その年長者に対して次のようなアドバイスをしている。

- ・ お金のプランに加えて、時間のプランを用意する。
- ・ バランスのよい社会的ポートフォリオをつくる。
- ・ 長くやると、はまっていく。
- ・ 定期的に、長く活動を続ける。
- ・ 親友づくり。
- ・ 恩返し。
- ・ 学習活動は健康と自立を強化する。
- ・ 回想録、自伝、家族史を執筆する。

また、いくつか目についた言葉を拾ってみた。

- ・ 年齢を重ねるほど、奇抜な問題を解決する能力や創造性が身につく。
- ・ 創造性が健康をつくる。
- ・ 芸術活動が病気を予防する。
- ・ コントロール感が免疫システムを強化する。

最先端の脳科学の研究成果と精神科医としての 35 年の臨床経験が結びついた、後半生の創造的なライフスタイルを提案する書物であるが、高齢者だけでなく働き盛りの人にも勇気を与える内容だ。

内館牧子 「養老院より大学院」 (講談社)

脚本家の内館牧子さんは、相撲の世界を描いた「ひらり」などのテレビドラマなどを書いた売れっ子である。2000 年から横綱審議会委員を務めたし、マスコミにもよく登場する。その内館さんが 2003 年から大相撲研究のため東北大学大学院に入学し 2006 年に卒業するまでを描いたエッセーのタイトルが「養老院より大学院」(講談社)である。実に魅力的なタイトルで、思わず買って一気に読んでしまった。

仙台が生んだ大横綱・谷風梶之助の銅像と腕を組む白いスーツ姿、毎日通った広

瀬川にかかる大橋でポーズをとったストライプのシャツ姿、緑の美しい定禅寺通りでいたずらっぽい流し目で黒いTシャツに赤い花模様で飾った上着を羽織る姿、学食でクラスメートと定食を食べながら相談している姿、図書館でステップ台を椅子代わりにしながら資料を読んでいる姿、川内キャンパスで受験日に座ったベンチで当時を懐かしむ姿、キャンパスに棲む野良猫に餌をやるコート姿、入試を受けた階段教室で手を頬に当てながら感慨にふける姿、雪の片平キャンパスでを手にしながら厚いコートを着て立っている姿、などが冒頭に写真で掲載されている。写真のどの顔も笑っているのがこの人らしいし、また仙台での大学院生生活を十分に堪能した様子が伝わってくる。

「人生、出たところ勝負」が座右の銘の内館牧子さんは、54歳で東北大学の大学院生になった。文学研究科人間科学専攻宗教学専攻分野に所属し、研究テーマは大相撲である。女人禁制の伝統のある大相撲の土俵上で優勝者に大阪府知事杯を授与したいという太田房江知事の主張に、きちんと反論する根拠を得るために勉強したいというのが本当の目的だった。仙台に住みながら東京にもでかける生活は3年に及ぶ。仕事なくなる恐怖に耐えて、この間、仕事はほとんど断った。そして3年間の成績は、宗教人類学関係の科目、など全てがA(優)であるのも素晴らしい。単位をとればいいということでなく、真面目に勉強に打ち込んだ証拠である。

大学院での講義の面白さや研究指導の教授たちの人間的な味わい、マスコミで知る大学生とは異なる若者像への驚きとその仲間たちとの屈折した交流、四季折々に豊かな表情をみせる仙台の魅力の数々、そして思いがけず相撲部監督に就任する前後の熱い物語など、社会人大大学院生としてキャンパスに存在する異物感をベースにしたユーモアと50代半ばの成熟した女性としての鋭い観察眼で書いた文章はさわやかで、読者を楽しませてくれる。

3年間の大学院生生活で失ったものは、結局は何もなかったというのが内館さんの総括だ。

では得たものは何か。それは「相撲史と大相撲の面白さ、魅力を一人でも多くの人に伝えたい」というライフワークが決まったことだ。そしていつか博士課程でも学ぼうという未来へ向けての展望。これが修士論文を書き終えて57歳になって到達した地点である。

内館牧子さんは、長期にわたる目標を心に描きながら、「でたところ勝負」で毎回勝負をしていくことだろう。そしてどのような足跡を後に残すのだろうか、楽しみである。

北康利「白洲次郎 占領を背負った男」(講談社)

「マッカーサーを叱り飛ばした日本人」白洲次郎の名前をよく聞くようになった。次郎は1985年に83歳で亡くなっているからもう20年以上の歳月が経っているのに、その人気は衰えない。

明治35年(1902年)兵庫県生まれ。神戸一中卒業後、英国ケンブリッジ大学に留

学。戦前、近衛文麿、吉田茂の知遇を得る。戦後は吉田の側近として終戦連絡事務局次長、経済安定本部次長、貿易庁長官を歴任、日本国憲法制定の現場に立ち会った。いち早く貿易立国を標榜し、通商産業省を創設。GHQと激しく対峙しながら、日本の早期独立と経済復興に、「歴史の黒子」として多大な功績を挙げた。昭和 60 年没(享年 83)。紳士の哲学「プリンシプル」を尊ぶイギリス仕込みのダンディズムは終生変わらなかった。妻はエッセイストの白洲正子。

以上がこの本の袖に記されている白洲次郎の一生の記述であるが、第 14 回山本七平賞を受賞したこの本を読むと、とてもこれだけで次郎を表すことはできないと痛感する。圧巻はGHQとの日本国憲法制定時の迫真の描写である。アメリカ側の意図、日本の抵抗、時間との戦いの中での決着の様子が生々しく描かれている。この描写は今後の憲法論議に影響を与えるだろう。

著者の北康利さんは昭和 35 年生まれで現在は銀行系証券会社勤務。資産証券化などのファイナンス理論を専門とする一方で、兵庫県三田市の郷土史家としての一面も持っている。この本もその郷土史への関心から生れたものである。このように二本足で立つ生活も素晴らしい。

「評伝」という分野がある。人物論をテーマにした本をそう呼ぶのだが、この本は評伝という形式をとった歴史書でもある。優れた評伝とはそういうものだろう。

著者は白洲次郎といういいテーマを発見して厳しい仕事の合間に膨大な資料を読み込み、現地を訪ね歩いていることが行間からうかがえる。そして時折もらず個人としての感想も親しみを感じさせる。先日訪ねた鶴川の武相荘の描写も多い。この本の執筆は楽しい仕事だっただろう。

#### 飯島勲 「小泉官邸秘録」(日本経済新聞社)

5 年 5 ヶ月という歴史的な長期政権だった小泉政権の首席総理秘書官の回顧録である。

常に総理の近くにいて一心同体で政権運営にあたっていた姿と自負が垣間見える。

「政権の形を作る」の章では基本哲学、経済諮問会議、特命担当大臣、官僚人事の掌握、官邸スタッフの強化、メディア戦略、官邸外交などの項目が並んでおり、小泉政権の形作りが内部から語られる。政権の骨格はチーム小泉の形成から始まった。「総論でタガをはめ、大臣を押さえ、官僚組織のトップを押さえることで各論での「骨抜き」「逃げ」を許さない」やり方で政策を推進していく。

ハンセン病訴訟問題、骨太の方針 2001、予算編成の歳時記の変更、最初の試金石・道路公団改革民営化、三方一両損の医療制度改革、BSE事件、田中真紀子外相更迭、9・11 同時多発テロ、有事法制、北朝鮮訪問、年金改革、郵政民営化シフト、民営化法案を巡る攻防、参院秘訣と衆院解散と大勝利、三位一体改革、市町村合併、行政改革推進法、歳出入一体改革、8 月 15 日靖国神社参拝。

この間の小泉総理の決断と判断、それを示す言葉が紹介されている。取り組むべきテーマと目標を決めたら迷わずに真っすぐに進み、決してぶれない人物として描かれている。直近の5年間だからそのときどきの状況や関係する人々の言葉や行動も読者は覚えているので、説得力がある。議論の主導権は総理が常に握っていたことがわかる。

「一度決めたら決してぶれない。最後までやり抜く。決断は大胆に、行動は細心に。まさにそれが小泉流なのである。」

「総理は一貫して「国民にとって分りやすくなければならない」と主張していた。」

「年明けから寒波・雪害対策を始めたいという役人を一喝して御用納めの12月28日に政府・与党の対策をスタートさせた。」

首席総理秘書官という立場の筆者は、抑制的な語り口で私情を挟むことなく政権の姿を淡々と描いている。この間の敵であった自民党や野党の政治家などについての論評も控え自制して書いている。1972年の小泉初当選以来秘書をつとめた筆者については在任中悪意に満ちた報道もあったが、この本での肉声を聞くとやはり憂国の士であるという印象を受けた。

やはり現場からの報告は掛け値なしに面白い。

いずれ「小泉純一郎回顧録」という本人の口から語る政権運営とその折々の心情を記した本を読みたいものだが、当面はこの本や竹中大臣などの回顧録を読みながら、この政権の総括をしたいと思う。

#### 小泉語録

- ・ 痛みを恐れず、既得権の壁にひるまず、過去の経験にとらわれない
- ・ 切られるところは反発するぞ。でもその方がいいんだ、反発がある方がわかりやすい。
- ・ 総論をしっかりしてくれ。総論がきちんと決まってくれば各論は押さえられる。
- ・ 各省には「対案を出せ」と言え。反対ではなく対案だ。
- ・ 特殊法人改革は言ってみれば政府の不良債権なんだ。
- ・ 自分はトップダウンではない。国民の支持のボトムアップだ。
- ・ 自民党と公明党が国民の審判によって過半数の議席を獲得することができなかつたら、私は退陣します。

2007年

梅田望夫・平野啓一郎「ウェブ人間論」（新潮新書）

昨年読んだ本の中で一番面白かったのは梅田望夫「ウェブ進化論」だった。

この本は話題となってウェブ 2.0 という言葉が飛び交う契機となった。

今日はその続編である「ウェブ人間論」という平野啓一郎と梅田の対談本を手にした。

対談という手法はそれぞれの特徴や主張を際立たせるため、双方が本音で対峙する必要に迫られる。このため主張や思想がくつきりと浮かび上がるという方法論である。

そういう意味で年齢が 15 歳下の作家・平野の切込みに対する梅田の丁寧な説明や反論によって、読者は新しい世界に対する理解がすすんでくる。

この対談を読んで、内容以前に人間の気質というものを強く感じた。

京大在学中に芥川賞を受賞した鬼才・平野の人間の暗部に対する拭いがたい不信感と、ウェブ 2.0 という革命の最前線の優れたウオッチャーである梅田の楽観論という対照は、取り組んでいるテーマというより、それぞれの気質に影響を受けているように感じる。むしろそういった気質がそれぞれの関心と呼び込んでいるといった方が正確かもしれない。

1975 年生れの平野の立場はウェブ世界を当然のこととしている世代であるにもかかわらず、人間に対する問題意識が先行するが、この平野が読者に代わって突っ込み、最終的には人間総体をトータルでは信頼する梅田がそれに答えていく。私は気質的に梅田の方に近いようなので、読みながら梅田の議論を中心に追うことになった。

梅田望夫の日常のスタイルを追ってみた。

ブログはネット上に置いてある自分の分身である。少しまとまった時間があればいつもチェックしている 300-400 人の日常や考えていることをシャワーのように浴びるため英語と日本語のブログを覗く。毎日 2 時間くらいかけて読んだ最先端の情報蒐集の成果を 1 時間かけてブログに書き、そのエッジの情報を無料で公開する。書いた内容が検索エンジンに拾われて新しい出会いがある。旧来のメディアである本を書くネット上の書き込みが多くなり、その内容もすべて自分で読んで考える材料となる。そういった様々なそしてレベルの高い反応をもらうことによって、謙虚になると同時に深く考える術を獲得する。

ネット空間に自分の書いたブログの反応の量が増えてくると、ネット空間をある程度支配できるようになってリアルな自分を防衛してくれるという面も出てくる。悪意や中傷はもちろんあるが、やり過ぎしたりする中でネット空間で生きる術も自動的に身につけてくる。実名でリアル世界との連続性の中で活動することによってネット世界とリアル世界は自身の中で統合されていく。

こういったスタイルを持つ人々はネットという能力の増幅器を使いこなしながら、成長し変容を遂げていく。

1995 年が日本のインターネット元年で、1997-8 年時点ではホームページの永続性は前提とはされていなかったと梅田は言っている。そうすると梅田より 10 年ほど年長の私が必死になってホームページ(図解Web)を開設したのが 1999 年 2 月だから、その先端の動きに何とかくらくらいついていたということもいえるかもしれない。その後、メルマ

が、ブログ、SNSといった新しい波にも何とか乗りこえてきたのだが、梅田の日常の動きに近い形で自分も進化を遂げてきたような気もしている。

「本、iPod、グーグル、そしてユーチューブ」という章では、本の未来も語られている。ネット情報はフローとして最先端を切り拓き、本は構造化された知識をパッケージという形で提供され続ける、そしてアマゾンやグーグルというネット企業と既存の出版社とはリーズナブルなゾーンに入る、というのが梅田の予測である。

梅田がいう「構造化」もキーワードである。世界を構造化するのが書物であるというのだが、それは構造と関係を用いて世界を解釈するということだろう。私の取り組んでいる図解コミュニケーションもそういうことを強く意識した方法論である。

私自身もホームページ、メルマガ、ブログという一連の流れの中に何とか振り落とされないように棹さしているが、もうこの流れから遠ざかることはできなくなっている。それは自己の増殖という感覚、自己成長の確認、世界の中で生きているという実感などが織り交ざった世界に生きているからだと思う。「ウェブ人間」という言葉は若い新しい世代のことをいうのだろうが、自分自身も間違いなくウェブ人間であると思う。

外的世界の拡大は内的世界を深化させる。この言葉は大学生時代の探検部のときに大事にしていた言葉であるが、ここでいう外的世界とは、ネットも含んでいると考えるのが自然だろう。

私たちは外的世界の拡大のための乗り物を手に入れた。今後、人間は一気に豊かな内的世界の旅に出ることになるだろう。

谷沢永一「執筆論」(東洋経済新報社)

鋭い舌鋒で文芸評論を書く関西大学の谷沢永一は、私は司馬遼太郎の解説者として親しんでいる。この谷沢永一が書いた「執筆論」(東洋経済新報社)を読んだ。200冊を超える著作活動の秘密を垣間見るように読んだ。抽象的な叙述ではなく、具体的な著述に即して書いた本である。一冊一冊が勝負というか、それぞれ力を入れて書いている様子がわかって頭がさがる。

渡部昇一「知的生活の方法」(講談社現代新書)

上智大学の渡部昇一の本は1976年のベストセラー「知的生活の方法」(講談社現代新書)以来、翻訳もの、歴史もの、時事ものなど、ずっと読み続けている。この本は久しぶりに改めて買って読んでみたが、新しい発見も多い。「本書に書いてあることは、すべてはすべて実感や体験か願望かである」というから説得力がある。自分をごまかさない精神、自分の古典をつくれ、身銭を切って本を買え、能動的知的生活者は書齋とマイ・ライブラリーを持つ努力が必要、時間の考え方、交際・食事・酒・散歩と知的生活など30年前の著作だが、反省を迫る指摘も多い。

谷沢永一・渡部昇一 「人生後半に読むべき本」(PHP)

昭和4年生れの谷沢永一と昭和5年生れの渡部昇一の対談本も読んだ。「人生後半に読むべき本」(PHP)というタイトルで、2人の稀代の読書家による読書論である。後書きを読むと私の本の担当でもあるPHPの若い編集者の企画だと書いてある。この2人の対談を実際に聞くには楽しいだろうなあ。

谷沢は司馬遼太郎の研究者としても著名であるが、「自分の後を追跡されたくないの、全部(本や資料)を処分してしまって、足跡をくらましてしまう(笑)」と言っている。「戦国物が済んだら、その資料はポイ」らしい。そうか、だから小説を書くたびにトラック一杯の古本類が届くといわれた資料が記念館にも見当たらないのだろう。

渡部は若い頃読んでよかった本も今読むと全く面白くないという経験をあげている。漱石は49歳で亡くなっているから、そういう若い人の人生観察はどうということはない、と述べていて笑わせる。年をとると目が肥えてくるということらしい。

2人とも70代後半なので、こういう人が勧める本はいいに違いない。彼らが勧める本をあげてみる。折にふれて手にしてみたい。

渡部昇一

- ・ ハマトン「知的生活」「知的人間関係」
- ・ 伊藤整「氾濫」
- ・ 藤沢周平「三屋清衛門残日録」
- ・ 松本清張「短編全集」
- ・ 清水正光「評釈伝記小倉百人一首」
- ・ 高浜虚子「俳句はかく解しかく味わう」
- ・ 立花隆「日本共産党の研究」
- ・ 松下幸之助「21世紀の日本」
- ・ 本多静六「私の財産告白」
- ・ アレキシス・カレル「人間--この未知なるもの」
- ・ 幸田露伴「努力論」
- ・ 吉川英治「三国誌」「新書太閤記」「新・平家物語」
- ・ 池波正太郎「仕掛人藤枝梅安」
- ・ 岡本綺堂「半七捕物帳」
- ・ 「唐詩選」
- ・ ヒルティ「幸福論」
- ・ 伊藤正徳「軍閥興亡誌」

谷沢永一

- ・ 薄田泣菫「茶話」

- ・ 河盛好蔵「人とつき合う法」
- ・ 久世光彦「マイ・ラスト・ソング」
- ・ 和田誠「お楽しみはこれからだ」
- ・ 野口久光「思い出の名画」
- ・ 安東次男「完本 風狂始末」
- ・ ゾンバルト「恋愛と贅沢と資本主義」
- ・ ブローデル「地中海」
- ・ 大仏次郎「赤穂浪士」
- ・ 平岩弓枝「御宿かわせみ」
- ・ 徳田秋声「あらくれ」
- ・ リップマン「世論」
- ・ シュンペーター「経済発展の理論」
- ・ 高橋亀吉「日本近代経済形成史」
- ・ 山手樹一郎「短編時代小説全集」

竹中平蔵「構造改革の真実 竹中平蔵大臣日誌」（日本経済新聞社）

小泉内閣の経済司令塔の役割を5年5ヶ月にわたって果たしてきた竹中平蔵大臣は、毎日短い日誌をつけ始めた。歴史的瞬間に立ち会うという意識で始めたところがあるが、使命感を持って歴史づくりにあたる様子を記しておきたいと願ったためだろう。その日誌はA4で3000ページ近くになったという。竹中はこの日誌をみながら、小泉改革を実践する現場の司令官としての仕事の総括を試みた。

この本のタイトルは大臣日誌であって大臣日記ではない。日誌とは日々の出来事を記すものであり、日記は日誌を踏まえて自らの心の動きを記すものである。タイトルを日記とせず日誌とした真意はそこにあると思う。全体の記述のトーンをみても敵や味方に対する具体的な人物評や心情は省かれている。一貫して乾いたトーンで書き綴っている。

第1章は小泉内閣の発進。第2章は不良債権処理に立ち向かう金融改革の様子、第3章は改革の本丸・郵政民営化をめぐる攻防、第4章は政策プロセスを変えた経済財政諮問会議のあり方、そして終章は今後の日本経済の進路についての論考である。

小泉改革は不可能と思われていた不良債権問題を解決し(8%台だった不良債権比率が半減以下)、誰も手をつけなかった郵政民営化を実現した(2007年10月から)。いずれ歴史の中で評価が定まるだろうが、傑出した歴史的な政権だったと思う。

この本は構造改革の過程を経済財政担当大臣、金融担当大臣、総務大臣という立場で一貫して携わった竹中平蔵がみた改革と政策実現のプロセスに焦点をあてた内容である。ほぼ与党・自民党とのやり取りであり、野党民主党の記述はほとんどないことが示すように、仕事の大半は自民党対策だった。抵抗勢力といわれた議員、官僚と

の熾烈な戦いの様子がわかる。

また、この改革は時間との戦いであつたいうことができる。改革の成果が出るまでの間につぶされないかという戦い、設定されたスケジュールた総理や同僚に対する根回しの時間の確保との戦い。私的なブレーンと手を携えながら、常に先手、先手をとりながら布石を打っていく仕事振りがわかる。一瞬たりとも気を抜けない仕事だったのである。

与党、野党、マスコミ、利害関係者などから常に批判にさらされながら、その都度考え方を整理し、打つて出る。こういうことが可能だつたのは、小泉総理の節目、節目のぶれない決断と的確な指示、そして信頼があつたからだろう。

歳出削減と景気回復による自然増収によって過去4年間にプライマリーバランスの赤字幅は28兆円から14兆円へと半減した、今後3%成長となれば歳出削減または増税による収支改善努力は毎年2-5兆円で、2011年のプライマリーバランスをプラスに転換するという目標が実現できる。2%成長なら消費税5%、4%なら消費税増税は必要なくなる。これが現在の政府の立ち位置である。ここ数年の舵取りが大切である。

これが竹中の最後のメッセージであるが、自分は政策専門家の育成と政策ウオッチャーとしての活動を開始するという宣言を行つて本書を閉めている。

今回は日誌を公開したのだが、日記にあたる部分には個々の役者の言動が記されていることになるだろう。本書では個々の政治家の言動の一部は記されてはいるが、実名と感想が入つたものも読みたくなる。没後50年たつて公開された原敬日記では人物評なども辛らつに書かれているが、そういう部分はいずれ明らかになるだろうか。

年末に読んだ飯島首席秘書官の「小泉官邸秘録」もそうだったが、この本も強い意志で抑制的に書かれていると感じた。

政権の中枢にいる人たちの観察は、首席秘書官と大臣では違った景色が見えているのは興味深い。今後、こういった回想録がいくつか出てくるだろうが、そういう証言を積み重ねながら政権の実態に迫りたいものだ。

だいたい前に読んだ「サッチャー回顧録」は圧巻だった。主人公が自ら語る政権運営は実に魅力的であつた。いずれ「小泉純一郎回顧録」を読みたいものである。

童門冬二「小説 佐藤一斎」（致知出版社）

小説家の童門冬二が「小説 佐藤一斎」という本をものしている。77歳になる著者は88歳まで生きた佐藤一斎に学ぶという姿勢で書いた。童門は現代では90歳を超えてベストセラーを連発した日野原重明先生も励みにしながら小説の執筆を続けているそう。

門弟三千人といわれ、幕末・維新の英傑たちを育てた人間通である佐藤一斎は、西郷隆盛（西郷は弟子ではないが一斎の書物を繰り返し読んでいた）、渡辺崋山、川路聖あきら、佐久間象山、山田方谷、横井小楠などに大きな影響を与えた儒学者である。

朱子学と陽明学の大家だ。一斎の主著である「言志四録」は、「言志録」「言志後録」「言志晩録」「言志てつ録」の四書である。この中にある言葉には励まされる言葉が多い。

この本でもいくつか紹介されている。

- ・ 無文の武は真武ではなく、無武の文は真文ではない
- ・ 人の言はすべからく居れて之を択ぶべし。はばむべからず。又惑うべからず。
- ・ 学、問、思、弁はこれ知の事。篤行はこれ行いの事、程朱既に定説あり。ただ拘執すべからざるのみ」(「揭示問」)

美濃岩村藩藩主の三男の松平乗衡が大学頭である林家の養子に入り、松平定信の寛政の改革の大きな柱であった「文教改革」を担当することとなった。この林術斎は林家所管の湯島の聖堂(昌平坂学問所)を幕府官立の大学に昇格させた。林家には別に私塾があって兄貴分の術斎から頼まれて塾長になったのはこの私塾であり、昌平坂学問所ではなかった。その後、術斎が74歳で亡くなった1841年に70歳だった一斎が昌平坂学問所(後の東大)の実質的な総長に任命された。「陽朱陰王」といわれた教授法、表向きは正式な朱子学を教え、陰では陽明学を教えたというこのやり方が実行できたのは、私塾においては陽明学も教えたということになる。これが童門冬二の仮説である。

朱子学は賢愚それぞれ順序を追って進むことができる。陽明学は心を主体にしているので愚か者が学ぶと危険、賢い者が学ぶと人間性の本質に迫ることができる。こういう説明をこの本ではしている。

童門冬二は都政の大立者だった。東京都庁の広報室長や企画調整局長などを歴任して52歳で退職し、以後本格的な作家活動に入った。この本を書いた時点で77歳だから四半世紀にわたって小説を書いた。歴史に題材を求めて「組織と人間」をテーマにすえた作品を多く書いている。この人も役人として個人と組織の葛藤に関心が深かったのだろうと思う。

童門は「生涯の師」の存在が重要だと考えている。童門の心の師は、太宰治と山本周五郎で、二人の書いた作品は単発のものでも全集でもすべて購入し手元に置いているという。

確たるテーマと、仰ぎ見る師匠の存在も本物になるための条件である。

佐藤優 「獄中記」(岩波書店)

著者の外交官・佐藤優は鈴木宗男衆議院議員の断罪の一連の流れの中で、対ロシア外交にあたって行った仕事の中で、背任・偽計業務妨害という容疑で逮捕された人物である。担当局長、課長の決裁をもらった業務で背任の罪に問われたという奇妙な逮捕である。

現在裁判中であるが、一審、二審とも有罪判決(執行猶予付き懲役 2 年 6 月)を受けているが、控訴中だ。田中真紀子と鈴木宗男の抗争、鈴木逮捕、小泉首相による田中外相更迭と続くドラマの中で、外務省のラスプーチンと呼ばれて、マスコミからも断罪された外交官である。

この佐藤が 512 日間にわたり東京拘置所の拘留されたが、その間に記したノートは 62 冊、全体で 400 字詰原稿用紙 5200 枚となった。その内容を五分の一に圧縮したのがこの書である。500 ページを超える厚い本だが、昨日から読み始めあまりに興味深いのでやめられず、今読み終えたところだ。

優れた知性と高い倫理観と強い克己心を持つこのような人物が、外務省でロシア外交の第一線で活躍していたことに頼もしさと同時にそれを活かさないことに無念さを覚える。

鈴木宗男議員は外務省に強い影響力を持って外交を進めており、佐藤も含めた外務省職員とともに橋本首相とエリツィン大統領のクラノスヤルスク合意(2000 年までに平和条約を締結する)を実現するために努力を続けていた。

一方、小泉首相は国内経済の建てなおしを優先し、対ロシア外交は休眠状態にするという方向で政権運営にあたった。この国際協調主義と国内優先主義との路線闘争の中で、鈴木議員事件が起こった。そして外務省自体の保身のために生け贄として組織的な裏切りにあった。

これが佐藤の説明である。

「国策捜査」というテーマで自らの逮捕を位置づけている。政権の交代による国策の転換時に、前の時代の政策を推進していた勢力を排除するため、犠牲者を選び国家権力のもとで断罪する。この国策による断罪を国策捜査と呼んだ。そのやり方が克明に描かれており、敵も味方も実名で登場するから迫力がある。

昨年読んだ「大地の咆哮」(PHP)の著者・杉本信行も同じ外務省職員だったが、中国と向きあいながら上海総領事として事件に巻き込まれ、その後不治の病に冒され、遺書として 2006 年 5 月に原稿を書き上げるが、その後没している。この本も現代中国の実態と日本が持つべきスタンスを憂国の志を持って説いており感動して読んだ記憶がある。

外交という分野で仕事をしている現場の外交官の仕事振りに共感を覚えるのだが、佐藤は同省では勉強を続ける人材がごく少なくなっていると警告を発している。佐藤によれば、自分は大義に基づいて役所の決済をもらいながら仕事をしていたのであって、背任で訴えられるいわれはない。後になって政治の風向きが変わる中で、訴えられるということがあれば、外務省の役人はリスクを抱えてまともな仕事に取り組みなくなる。しばらくは外交は外務省の外で政治家と他の勢力との間で行われ、外務省は淡々と実務処理を行う機関に成り下がる。それは長期的には日本の国力の低下をもたらすだろう。

これが佐藤の憂いである。

獄中の佐藤は、キリスト者として、誠実な公務員として、国策捜査に立ち向かうが、その日常は意外に静かである。独房の中で受動的知性を使って語学の修得に取り組んだり、今まで読めなかった学術書を 200 冊読み耽る。その記録が書かれているが、哲学、神学、経済、政治に関する書物など実に多彩であり、その本の神髄やそれに関する自らの考え、感想、評価などを読むと生半可な知識人ではないことがわかる。社会や歴史に対する洞察力は冴えている。驚くべき知性の持ち主である。面白いところ、興味深いところ、大切などこなどに黄色のマーカーで線を引きながら読んだのだが、ほとんどのページに印がついてしまった。

国際情報局分析一課の主任分析官であった著者はインテリジェンス(諜報)を担当しているだけに、冷静沈着に自分の身に起こった事件を見つめながら、国家と戦う戦術を緻密に組み立てる。状況の中で社会や後々の時代に向けて言うべきこと、残しておくべきことを整理していく。忍耐強く使命を果たそうとする。

独房生活は望んでも得られない高度の知的生活を実践できる環境にあるようだ。佐藤は何度もその環境に感謝をしている。規則正しい生活、自由時間の多さ、書物を一字一句吟味しながら読むことができる、人に邪魔されない内面の自由、、、、。

一度そういう環境に自分を置きたくなる。

マスコミによる断罪には何びとも立ち向かえないが、「思考する世論」に訴えるべく佐藤が選んだ雑誌は、「世界」と「論座」だった。また「思想」も評価をしている。こういった雑誌にも目を通す必要があると感じた。

この著者は獄を出てから「国家の罨」「国家の自縛」「国家の崩壊」「自壊する帝国」など活発に著作を発表しているが、2006 年に出した「国家の罨」は毎日出版文化賞、「自壊する帝国」は新潮ドキュメント賞を受けていることからわかるように著述のレベルが高い。

昨年末にこの書を出版した時点で、佐藤優は私生活を大事にしながら、よきキリスト教徒であることを主要テーマに、またよき日本人であることも重要なテーマにしなが、活動の舞台も広げていきたいと述べている。

1960 年生まれだから今年 47 歳の佐藤はまだ若い。今後、目を離せない書き手となることは間違いない。

東大総長・小宮山宏 「東大のこと、教えます—総長自ら語る!教育、経営、日本の未来…「課題解決一問一答」」(プレジデント社)

東大の小宮山総長の本は、「ウェブ進化論」の梅田望夫さんが推薦していたので読んでみた。この二人はプレジデント 1 月号で対談していて読んだことがある。小宮山総長が、東大の教授にならないかと梅田に提案したら、「先生からそういわれたら、1000 人のうち 999 人は、「ありがとうございます」って受けるわけですよ。でも僕は残りの一

人になりたい。組織に属さないでこれだけ大きなことができるっていうのを、身をもって示したいんです」と断っていて痛快に感じた。

小宮山総長は、「東大生の学力は落ちたと思いますか」「お金持ちでないと入れないのでしょうか」「東大の時価総額は」「もっと給料をもらうべきだと思っていますか」など55の質問に対して率直に語っている。こういう本の編集は、本音が出るので面白いと思った。

小宮山総長が語る中で「知の構造化」「学術俯瞰講義」という言葉が頻繁に出てくる。構造化や俯瞰は「図解コミュニケーション」の中心概念である。あらゆる分野に蔓延する個別化、細分化、矮小化という流れを、構造や俯瞰という考え方で再構築できる。個々の優れた部品を全体像として体系化し一つのいのちとして動かそうということだと思ふ。トップになるとそういう思いを抱くはずだ。合意を得るためには、それをどういう形で見せるかが重要である。それには全体と部分、部分同士の関係をあらわす図解コミュニケーションの方法を用いるのがいいと思ふ。

この本の最後の部分は小宮山総長と梅田望夫の対談を収めたものだ。組織の変革を目指すトップと在野の個人との対話だが、新しい時代の流れからみる梅田の指摘は改革者・小宮山宏の意表を衝いているようで興味深い。

#### 小林秀雄 「人生の鍛錬--小林秀雄の言葉」(新潮新書)

日本の近代批評の創始者である小林秀雄(1902年--1983年)は膨大で緻密な作品群を残して圧倒的な存在感をもって時代の中に生き続けている。作家論、日本古典論、美術論、学問論と活動領域は広範であり実に多彩で、しかもいずれの分野も水準が実に高い。それは厳しい自己鍛錬の賜物であることが、新潮新書「人生の鍛錬--小林秀雄」を読むとわかる。

「無常といふ事」「モオツアルト」「近代絵画」「本居宣長」「考えるヒント」「様々なる意匠」「志賀直哉」「私小説論」などが代表作だが、私の記憶に残っている作品も多い。

小林秀雄は、舌鋒の鋭さと逆説的な警句と論理的で格調の高い文章で有名であり、同時代以降の誰もが畏敬の念を持って小林の人物と作品を語る姿を多く見ている。

以下、この本の中で共感を持って読んだ「仕事論」に関する言葉をあげる。

小林秀雄の仕事の流儀である。

- ・ 心掛け次第で明日からでも実行が出来、実行した以上必ず実益がある、そういう言葉を、ほんとうの助言というのである。
- ・ 実行をはなれて助言はない。そこで実行となれば、人間にとって元来洒落た実行もひねくれた実行もない、ことごとく実行とは平凡なものだ。平凡こそ実行の持つ最大の性格なのだ。だからこそ名助言はすべて平凡に見えるのだ。
- ・ 成る程、己の世界は狭いものだ。貧しく弱く不完全なものであるが、その不完全なものからひと筋に工夫を凝らすというのが、ものを本当に考える道なのである、生

活に即して物を考える唯一の道なのであります。

- ・ 私は、自分の職業の命ずる特殊な具体的技術のなかに、そのなかにだけに、私の考え方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得している。かような意識が職業に対する愛着であります。
- ・ 天職という言葉がある。若し天という言葉をも、自分の職業に対していよいよ深まってく行く意識的な愛着の極限概念と解するならば、これは正しい立派な言葉であります。

鳥居民「近衛文麿 黙して死す」（草思社）

「近衛文麿 黙して死す」（鳥居民・草思社）は、日本が戦争を始めた責任は「木戸幸一内大臣にあり、首相だった近衛にはない」という史観で書かれた本である。木戸内大臣とマッカーサー司令部の対敵情報局のノーマン課長が仕組んだ陰謀で、開戦の責任と終戦の不手際の責任を近衛にとらせ、逮捕直前に近衛を自殺に追いやったという史観で書かれている。

この鳥居民という著者は、「シリーズ昭和 20 年」という大型シリーズを刊行中で、第一部は 14 巻中、11 巻まで出していて、昭和 20 年の一日一日を丹念に綴っている。たしか全体では 34 巻ほどになると聞いたことがある。完成したら貴重な資料となるだろう。

著者は 1929 年生まれで、太平洋戦争の真実をことこまかく追っている。膨大な資料を読み込んだうえで、自らの信じるストーリーを語る。その部分は「思っている」「はずである」「のではないか」などの表現が多い。日本と中国近代史の研究者なので、はしょっている部分が多く、いきなり事実関係が出てくるので知識が少ないと読みづらい面もあるが、興味深い事実をたくさん知った。

見城徹「編集者という病」（太田出版）

「編集者という病」（見城徹・太田出版）は、幻冬舎という新興出版社を立ち上げ、10 年間で 9 本のミリオンセラーを出し、ジャスダックに上場した風雲児の自伝的な作品である。

尾崎豊、山際淳二、中上健次、石原慎太郎、松任谷由美、村上龍、坂本龍一、五木寛之、重松清などの作家との交遊を紹介しながら、編集者であることを語っている。見城は私と同年であるが、随分と濃い人生を生きていると感じた。作家との付き合いは半端ではなく、編集者としての気概や戦略眼に感銘を受ける内容だった。この出版社は見城という魅力的なリーダーが率いている限り今後も世間の耳目を集め続けるだろう。

- ・ 表現者にとっては一番書きたくないものが、編集者には一番書かせたいことであり、それこそが黄金のコンテンツになる、
- ・ 売れるコンテンツを満たすものは必ずヒットする

- ・ オリジナリティ・明快・極端・癒着
- ・ 大家の三人とこれはすごくなると思う新人を押しえれば、真ん中はむこうから入ってくる
- ・ 売れなければ読者にとって必要な商品なのである

林真理子 「グラビアの夜」 (集英社文庫)

編集者・スタイリスト・ヘアメイク・カメラマン・マネージャー・モデルら現代の若者の心情と生活、生態を林真理子が達者な軽い筆致で描いた作品。現代の気分を上手に表現しているので、共感を呼ぶだろうと思う。林真理子が若い人に人気があるのも当然という気がする。

梅田望夫・茂木健一郎 「フューチャリスト宣言」 (ちくま新書)

梅田望夫と茂木健一郎の共著「フューチャリスト宣言」(ちくま新書)を一気に読んでみて明るい未来を創りだそうとしている革命家をフューチャリストと呼んでいるように感じた。

「ウェブ人間論」で対談した若い作家・平野啓一郎とは違った個性が際立っている脳研究を本籍とする茂木健一郎(1962 年生まれ)との相性もいいようで、梅田望夫(1960 年)の発言はいつも以上に知的刺激に満ちている。

今回はどのような未来が視野に入ってくるのかという観点もあったが、フューチャリストたらんとする同世代の二人の日々の生活のライフスタイルに興味を持って読み進んだ。

仕事上ではネット世界にどっぷりとつかりながらリアル世界ではクオリア(質感)の高い生活をしようとしているシリコンバレー在住の梅田望夫の日常には、これからの生き方の一つの方向が鮮明に見てとれる。若い人だけにとどまらず現在世界を生きている知的生活を志そうとする人が関心を持つべき生き方である。

リアル世界で一流の人に会い続け既存メディアでも発言し影響を与えていながら、ネット世界でも毎日 1 万人以上が訪問するブログを書き続けているタフな茂木健一郎という生き方も興味深い。茂木はリアル世界にやや重点を置きながら、らせん状に成長しようとする戦略をとっているように見える。この人物の本をいくつか眺めてみたことがあり、高い知性の持ち主であることはわかったが何を主張しているのかはよくわからなかった。今回、梅田との対談を読んで彼の考えていること、やろうとしていることがよくわかった。

リアル世界とネット世界の双方を視界に置きながら、右足と左足のどちらかにあるいは両方に等分に体重をかけるかが、今後の生き方のありようだということが見えてくる本である。

万国の労働者に革命を呼びかけたマルクスとエンゲルスの「共産党宣言」にならっ

て、タイトルを「フューチャリスト宣言」にしたのだろうか。

世界の進む方向を示し、若い世代の人生と生き方に大きな影響を与える思想を明快に語ったこの本は、新時代の革命へ向けての檄文である。

(「回天」とは明治維新で志半ばに倒れた志士・清河八郎の革命思想をあらわした言葉)

以下はフューチャリストたちの日常のライフスタイルに関する部分のピックアップである。参考にしたい。

梅田望夫

- ・ 1994年にインターネットの時代が到来
- ・ メールよりブログのコメントやトラックバックのほうが気になります
- ・ アンリカではほとんどネットの脳内空間だけで暮らしている。2002年からアメリカの国内線の飛行機には一度も乗っていない。どこまでネットで代替できるかという人体実験を5年くらい続けている。
- ・ 家かオフィスにいて、ネットに一日8-10時間費やしている。あとは考え事をしたり本を読んでいる。
- ・ 「この人たちは大事だな」という人をネット上で発見してブログやサイトを巡回する。日本語と絵意義でネット上に500人くらいの友だちや仲間(アメリカ人が多い)がいるような感じ。そして意味あるものを選び出して分類する
- ・ 「はてなグループ」という共有空間を10個くらい持っている。500人のブログの中で関連があると思ったら、URLを特定のグループに放り込む。ブログとグループが同時並行的に進む。
- ・ 朝は4時か5時におきる。8時までには昔だったら丸一日かけてしていた仕事が終わっていると感じることが多い。
- ・ 自分のリアルライフはクオリア(茂木のいう心のなかで感じるさまざまな質感)の世界。ネット側でものすごく効率のいい生き方をして早く切り上げて、リアルで過ごす時間が長くなる。
- ・ ネットの付き合い方がその人の個性
- ・ ネット時代のリテラシーというのは感情の技術です
- ・ リアルタイムに、ブログとユーチューブとこれからの新サービスを組み垂悪と一日で教材ができる。大学で講義するエネルギーがもったいない。
- ・ リアルとネットという二つの世界での生計の立て方、知的満足のしかたを組み合わせる戦略的に考えていく
- ・ 世の中雄を俯瞰して理解したい。たくさんの方々に興味があつて、関係性に興味がある。俯瞰してもものを見て全体の構造をはっきりさせたいという志向がある人はこ

れからの時代は有利になる。総合する視点。

- ・ ネットへの興味とリアル世界での満足度は反比例する
- ・ 自分の著書についての感想は2万近く読んで1万くらい記録してある
- ・ サンプルでなく全数でいくことにすごい時間的投資をしている
- ・ ブログを書くのは修行
- ・ ネットベンチャーなど採用するときその人のブログを重視する
- ・ 会議でもネット上で議論をやりつくして、それでもできないことおwリアルの会議でやると、とんでもなく生産性の高い会議になる

茂木健一郎

- ・ ホームページを立ち上げたのが1997年
- ・ ウィキペディアのヘビーユーザーです
- ・ いろんな人と会って刺激を受けて朝から晩までずっと仕事をしている。
- ・ 出張の気晴らしは、ユーチューブ
- ・ SNSの中途半端な感じには拒否感がある。
- ・ 自分のブログのコメントには返事を出さない
- ・ 7対3の3がウェブ世界の人格ということはある。ヒット数はグーグル上に現れる時価総額だ。
- ・ 「クオリア日記」は一日1万2千から3千のアクセス
- ・ 英語のブログを11月から始めた。小林秀雄や本居宣長などについて書きながら英語世界の偶有性に身をさらす
- ・ インターネット時代には、古典的な教養というものが復活するんじゃないか
- ・ 警戒心を解くというのが、ネットで生きるための大切な知恵だ
- ・ 自己紹介は「僕の名前をグーグルで検索してください」といえばいい
- ・ ブログ上に音声ファイルをアップしている
- ・ 日本の競争原理は、論文を点数化して何点以上だと教授昇進といった内規。アメリカのテニユア(終身教授資格)は「それまで誰も手をつけていない分野を切り拓いたかどうか」だ

渡辺淳一「鈍感力」(集英社)

渡辺淳一の「鈍感力」(集英社)が売れているようだ。

この小説家は男女の機微を描いた作品が多くファンも多いが、今回のタイトルはいつもの小説のニュアンスとは違うので、不思議に思っていた。妻がこの本を買ってきて読んだあと、「どんな本なんだ？」という私の問いかけに「そうねえ。女性の鈍感力以外のところは、お父さん(最近はその呼ばれている)のことを書いているようです」との答えだったので、早速読むことになった。

渡辺淳一の主張は「いい意味での鈍感力」を持つということである。それを裏付ける例を挙げながら主張を展開していき、最後は女性は子どもを産むために鈍感に生まれついていて、その鈍感力の最大のもは母性愛であると締めくくる。

渡辺淳一は、叱られ続けてもへこたれない、強くて鈍い体、鈍い腸、雑然とした部屋、環境適応力といった要素と事例を挙げながら鈍感力を説明していく。

確かに妻の言うように、新入社員時代から 20 代までの若い頃はよくミスを連発したが上司からみると怒りやすいタイプだったようで、よく叱られていた記憶がある。

大学時代に探検部で鍛えたせいだろうか、仕事量が多いのも平気だったが、30 代の半ばの頃に人使いの荒いことで有名な上司があるとき「おまえ、丈夫だなあ」とあきれたように声をかけられたことがある。そのときは「わたし、丈夫なんです」と笑いながら答えたことがある。

独身時代、大食いだったこともあり昼の定食を一度に 2 回食べていたりしたが、「腹をこわしたことがない」ことが自慢で、同僚の女性社員からは「アイアンストマック(鉄の胃袋)」とあだ名されていた。

部屋の汚さも有名だったが、特に社会人となったら時間の無さにショックを受けて、自分を磨くこと以外の生活のための掃除、洗濯、入浴などは最小限で済ますという方針を立てたので、それもしかたのないことだった。ある人から「汚な好き」といわれたことがあったが、「わたしはきれい好きなんです。でも掃除がきれいなので、汚くなっているのです」と返事をしたこともある。

サラリーマン時代には 10 回ほど転勤や仕事の変更があったし、大学への転身という大きな変化も何とか乗り切ってきたから、環境への適応力はまあまああるほうだろう。

ここまで鈍感力を考察してきたが、渡辺淳一はもう一つ条件を挙げていた。それは「図にのる才能」である。人から褒められたら、「その本人がその褒め言葉に簡単にのる、この図にのる、調子のよさは、いわゆる、はしたないことではなく、その人を大きく、未来に向かって羽ばたかせる原動力となるのです。」とある。

そういえば、これもあたっている気がする。

よく考えてみると「図にのる才能」という言葉も味わい深い。図の本を書き、図を使ってプロジェクトを遂行している今のわたしは確かに「図」という武器の上に乗っている。この章の扉には図という文字を斜めにしたイラストがあり、その角の上に人物がバランスをとりながら手を振っている姿が描いてある。まさにこの鈍感な人は「図」に乗っているのだ。

さて、わたしはもちろん鈍感で過ごしてきたが、よく考えると周りが敏感、過敏であったならば、トラブルの連続だったろうという気はする。そう考えるともっとも鈍感力が備わっていたのは、家族や同僚などの周りの人々だったのかも知れない。

山本皓一 「日本人が行けない「日本領土」」 (小学館)

報道写真家・山本皓一さんが6月に出版した「日本人が行けない「日本領土」」(小学館)を読んだ。私たちは、日本を取り巻く国境の現実についての知識に乏しいことがよくわかる迫真のレポートである。

北方領土。

中立条約を破って宣戦したソ連が侵攻し、占領され、日本人島民が追い出された。竹島。

朝鮮戦争中に韓国大統領が一方的に領有宣言を行い、武力占拠が続いている。尖閣諸島。

石油資源埋蔵の可能性が出ると突如領有権を主張した台湾と中国による講義活動が続く。

沖の鳥島。

満潮時に海面から16cmしか頭を出していないが、全島沈没が時間の問題となっている。

南鳥島。

米国から平和裏に返還された日本最南端の島だが、民間人の上陸は厳しく制限されている。

こういった国境に位置する島々を、1990年5月の択捉島から始まって、実に16年間にわたり取材した文字通りの労作である。

報道写真家らしくカラーと白黒の写真が随所に散りばめられているが、ほとんどはこれら国境の島々への上陸まつわるエピソードが文章で綴られている。

また、それぞれの島と関係の深い各氏と著者との対談も興味深い。現総理の安倍晋三、北方領土問題では新党大地の鈴木宗男、また若手の政治家や日本財団の職員などとのやりとりが、国境の島の抱える問題点、つまり日本という国の問題を浮き彫りにしている。

「日本の国境地図」という地図を眺めえてみると、領海としての接続水域は小さいが、1996年に設定された排他的経済水域(EEZ)は実に広い。EEZを含むと日本は世界第6位の広さになる。この排他的経済水域は、ロシア、韓国、中国、台湾と距離が近く、この水域で様々な形のトラブルが起こっていることが実感としてわかる。

領土問題は、領有権を主張する根拠となる歴史的事実(日本人が住み経済活動を営んでいる)と現在の姿にいたった経緯、そして実効的支配の有無がポイントとなる。こういった点を著者は上陸に向けての煩雑な手続きや直面する壁を乗り越える中で説明してくれる。

国家を構成する領土・国民・主権を守るのが政府の役割であるが、日本政府は領土

問題に対して主張すべきことをせずに無為に過ごしてきた、また問題解決の可能性のある時期を見過ごしてきた。この姿勢を早急に改めるべきだ。これが著者の主張である。

また、その前提として国境問題に関する情報を国民に開示してこなかったことが、この問題に国民の関心が向かわない原因であるとして、情報の積極的な開示を要求している。

領土問題は予想を超えた形で突如現れ、それが紛争の勃発につながることもある。

また、島か岩かと議論のある沖ノ鳥島の存在は、軍事的・経済的にも大きな意味があり、これが海中に沈むことによって、日本は大きな打撃を受けることになる。

この本によって、テレビ等で時折報じられる国境問題の全貌が明らかになった。報道写真家である著者は、文章という表現手段で立派な報道活動を行った。この仕事も報道写真家の領土の範囲なのだろう。

山本眞一「大学事務職員のための高等教育システム論」(文葉社)

山本眞一先生(広島大学大学研究センター長)の本を読んだ。この数年間に何回か、前任地大学の筑波大学大学研究センターに呼ばれたことがある。その折、いただいたのが「大学職員のための高等教育システム論—より良い大学経営専門職となるために」(文葉社)だ。大学に勤務する事務職員を対象とする本で、高等教育の基礎知識と事務職員の心構えを述べている。私のような他の分野からの転職組は基礎知識が役にたつし、事務職員の心構えの方は管理職として大学運営にあたる私のような者にもいい情報が書いてある。

1章: 職場としての大学

2章: 高等教育システムとは何か

3章: 大学の歴史として知っておくべきこと

4章: 変化する時代の中の大学教育

5章: 職員のプロフィール

6章: すぐれた大学職員となるために

1章と4章と6章を興味を持って読んだ。

現在は広島大学の大学研究センター長をつとめる山本先生は、二つの研究会を前任の筑波大学大学研究センターで行っていた。

一つは2000年から始めた「大学経営人材養成のための短期集中公開研究会」で、大学職員の能力開発とくにそのための意欲を刺激する目的の研究会だった。受講者は延べ5000人を超え、修了証書も1000枚以上を発行している。

この研究会には確か二度ほど講師としてお招きいただき、講義とその後の受講者との懇親会にも参加した。主として私立大学の事務職員が中心だったが、大学の現状

や事務職員の課題や悩みなどを聞いて随分と参考になった。

もう一つは、大学院レベルの授業を想定した「試行プログラム」でこれは平成 14 年度から実施している。大学経営に特化した大学院を想定した授業の試行プログラムで私も一度講義に出たことがある。このときは「考える大学職員になるために」というテーマで講義した記憶がある。

山本先生とはお互い 30 代の頃からの知り合いである。

知的生産の技術研究会のスタッフとして活動していた頃、東京駅のレストランで当時文部省の役人だった山本さんと会ったことがある。山本さんも知研の会員だった。

略歴をみると、山本さんは 40 歳のときに埼玉大学大学院政策科学研究科の助教授に転出し、43 歳で筑波大学に移り、47 歳のときに教授となっている。大学研究センター長となった山本さんからこの二つの講座に呼ばれて旧交が復活した形である。

この本の 6 章には「サラリーマンの知的生産技術」という言葉があり、「今や古典の部類に属すると思われる梅棹忠夫著「知的生産の技術」(岩波新書)」を薦めている。

山本先生は「問題解決能力の向上」をあげている。志と能力を有する大学職員に、幅広い大学問題の理解を前提に、問題怪傑能力を教える教員は、残念ながら現時点では明らかに不足していると語っている。

そして「職員」に望まれることとして三つあげている。

1. 大学として解決すべき課題が何かを正しく捉えられる能力。
2. 教育の工夫改善を始めとする学生サービスの向上策を正しく捉えられる能力
3. 常に新しい事務分野に興味を持ちつづけること。

事務職員と頻繁に接触し仕事をしている私にはよくわかる議論で、産業界や行政、教育分野などで私が講演している問題意識とほぼ同じである。大学界も経営や仕事という観点からみると他の業界とあまり変わらないように思う。

8 月の宮城大学の教員研修会 (FD) で山本先生の名前が出たので、連絡役を買ってでて久しぶりに連絡をとった。研修会で当大学の大学教員に刺激を与えてもらうのが楽しみだ。

寺島実郎「20 世紀から何を学ぶか(上)--1900 年への旅 欧州と出会った若き日本」(新潮選書)

2000 年に新潮社から刊行された「1900 年への旅--あるい道に迷えば年輪を見よ」に 2007 年現在の時点で加筆・修正を行ったものが選書として出版された。この本が寺島実郎著「20 世紀から何を学ぶか(上)--1900 年への旅 欧州と出会った若き日本」である。

21 世紀を前にして百年前の 1900 年に視座をおいて、再考すべきテーマをその歴史の現場に足を運び、一つ一つ積木細工のように思考を積み上げ、総体としての時

代認識を構築しようとしたと著者は述べているが、今になって思えば壮大なスケールの構想と実行であった。「着眼大局、着手小局」という囲碁の言葉があるが、この連載が始まった今から 10 年ほど前の「フォーサイト」を読んでいた頃は著者の頭の中は見えなかったが、2000 年に一冊の本に凝縮された時、感銘を受けたことを思い出した。

「アメリカを理解しようというのなら、欧州を訪れて欧州からアメリカを観察しなければだめだよ」という示唆を受けた著者は、この体験を踏まえて「知的三角測量」、「知的遠近法」という言葉を発明している。知的三角測量とは地理軸でものごとを立体的にとらえようとする試みであり、知的遠近法とは知的三角測量を踏まえて歴史認識の射程を長くとり、かつ地理的空間軸を広くとる方法論である。著者が常に言っている「歴史と地理」という視点を具体化する豊かな方法論である。

「1900 年 パリ」から始まったこの本は、ロンドン、ウィーン、ローマ、マドリッド、ハーグ、サンクト・ペテルブルク、ベルリン、そしてバルセロナにて「旅の終わりに」を迎える。それぞれの章では、日英同盟(1902 年)から日露戦争(1904 年)直前の世界という背景の中で、欧州各国の当時の政治状況を包括的に的確に示し、その中で各国と関係を持った日本人の事跡を訪ね、20 世紀の幕を開いた人々を注視し、思索を深めていく。

読者は膨大な資料を読み込んだ上で著者が語る欧州各国をめぐる近代史の講義を受け、その中で鎖国を解いて間もない若き日本人の格闘を真近に感じることが出来る。それは著者自らが歴史の現場に目的意識を抱いて足を運んで得た感慨を伝えてくれるからである。著者の構想力と行動力には驚きを禁じえない。

日本海海戦の天才参謀・秋山真之、文豪・夏目漱石、横須賀造船所をつくった小栗上野介、日本近代化の啓蒙者・福沢諭吉、三井物産初代社長・益田孝、最後の元老・西園寺公望、日本通信の父・寺島宗則、日本のイメージをつくった川上音二郎、在野の大博物学者・南方熊楠、黒い瞳の伯爵夫人・クーデンホーフ光子(青山光子)、ロシア革命を誘発した明石元二郎、軍神・広瀬武夫、日本外交の立役者・小村寿太郎、軍人と文人の葛藤を生きた・森おう外などが登場し、100 年前後に欧州に関与した日本人の生身の姿を彷彿させる。

また、これらの日本人と関与し、あるいは影響を与えた欧州各国の偉人も多数登場する。ピカソ、マルクス、ケインズ、クーデンホーフ・リヒャルト、ヒットラー、フロイト、ヨハネパウロ二世、ムッソリーニ、フランコ、オルテガ、ウイッテ、ビスマルク、ガウディ、、、。

私たちは事実の羅列と後講釈で埋められた歴史書と、ある時代に生きた人物に傾斜した小説の中で歴史をみてきた。また、国ごとの直線的な歴史の寄せ集めとしての歴史を学んできたように思う。司馬遼太郎の歴史小説が多くの日本人の心をつかんだのは、時代と個人の関わりあいのバランスに共感を覚えたからだろう。

著者は、1900 年という歴史の転回点で欧州に視点を定め輪切りにしながら当時の日本人を描き、時代と個人との関係の集積である歴史をつかまえようとし、そして見事

に成功させている。

機会あるごとに世界各地のアンティーク市場を訪ね、万国博覧会関連の歴史的資料やグッズを集めている。幕府のフランス使節らが泊まったグランドホテルに数回宿泊してみる。ミュージカル「レ・ミゼラブル」を何度も観ている。ロンドンの漱石の下宿跡への訪問。ダイアナ妃の葬列をみる。川上一座の復刻CDを取り寄せじっくりと聞く。この本を書くための欧州各国への頻繁な取材旅行。繰り返し堪能した「ラマンチャの男」。当時のメディアの検索と解読、、など若い頃からの志と日々の蓄積が今日の著者をつくったという事実になんて納得する。

この本は、キーワードの連鎖でできあがっている。カッコ書きのキーワードは誰でも断片的に知っている言葉や概念が多いが、それらが深く結びつきながら新たな像が結んでくる。それは、膨大な書物の読破と結論の抽出という気の遠くなるような忍耐力と継続力の賜物である。

またこの本の特色の一つは、現代の課題との関係で 1900 年をみているということだ。著者の現在と未来を考えるという問題意識は一貫しており、コソボ、、クリントン、ブレア、NATO、ロシア、社会民主主義、インターネット、超大国アメリカの動向などに関する考察が導き出されており、思考の軸はぶれていない。

「1900 年への旅」という原題の本は、このたび「20 世紀から何を学ぶか」というタイトルになって登場したが、このことによって読者は著者の目線の先にある像をより強く意識できるようになった。読者は読み終えて同時代を生きる寺島という巨大な知性とともに歴史の旅を重ねた思いがするだろう。

歴史書であり、人物論であり、警世の書であるこの本は、寺島実郎という人物が渾身の力を込めて書いた書物であるということが出来る。日々の精進とこういった仕事の丹念な積み重ねが今日の寺島をかたちづくっていると改めて感じるようになった。

竹内洋 「教養主義の没落---変わりゆくエリート学生文化」(中公新書)

1970 年前後まで、教養主義は大学生の規範文化であり、常識であった。人格主義による人格形成とマルクス主義による社会改良を中核とする教養主義は、大正時代の旧制高校から始まり(大正教養主義)、マルクス主義による教養主義への敵対で滅ぶかにみえたが権力による弾圧でマルクス主義が退去した。その空白地帯に教養主義が復活する(昭和教養主義)。教養主義は半世紀にわたって日本の大学に君臨したのである。本書は教養主義の形成と没落を解明した書である。

私が大学に入学したのは 1969 年である。全学連による学生運動の激しい時期で、安田講堂占拠とその攻防戦によって東大の入試が中止に追い込まれて全国の受験生に多大な影響を与えた年の入学生だ。私の入った九州大学は入学してすぐの 5 月から学生による無期限ストライキに入り、1 年間ほとんど授業はなかった。大学では様々なマルクス主義者が闊歩していたが、一方で阿部次郎の「三太郎の日記」や倉田

百三の「愛と認識との出発」などの必読書や、「中央公論」や「世界」などの総合雑誌を、そして漱石や岩波文庫を媒介とした教養主義の流れも根強くあった。この二つの流れに乗らないのは恥ずかしいと言う雰囲気があった。今にして思えば、学生運動の高揚と退潮、そして教養主義の没落の最後の世代だったということになる。

教養主義は西欧文化の崇拜を核としていたが、日本の伝統である修養主義と双生児でもあった。修養とは、修身養心、つまり身を修め心を養うことであろう。克己や勤勉、鍛錬による人格の形成を道徳の中核とする精神主義・身体主義的な人格主義である。

大学進学率は15%未満がエリート段階と呼ばれるが、1970年には23.6%になり、高等教育のマス化が進んだ。そして大卒者のただのサラリーマン化が新興する。大学紛争の解釈として筆者は、「学問とは何か」「学者や知識人の責任とは何か」と問うた原因は、大学生である自分たちが「ただの人やただのサラリーマン予備軍になってしまった憤怒」であるとしている。団塊の世代の親の高等教育進学率(短大を含む)は6%、団塊の世代は22%だから、親が寄せる期待と自分たちの置かれた境遇の差にとまどった結果が暴力的な運動へと発展していったということなら置かれた状況がよく理解できる。この運動のなかで教養エリートを過酷に相対化した吉本隆明に対する共感が生まれていく。確かに吉本はあの時代のヒーローだった。そして教養主義を駆逐した大学はレジャーランドになっていった。ポスト全共闘世代は卒業資格をとることを目的として静かなキャンパスで生きていく。そしてレジャーランドの大学の住民はビートたけしによる知識人殺しを歓迎する。

高度成長を担うビジネスマンとなった大学卒業生は、教養知ではなく、技術知としての経営学ブームの中で成長していく。専門知を身につけたテクノクラート型ビジネスマンの誕生である。階級社会の消滅によって階層的に構造化されない膨大な大衆が登場してくる。これが新中間大衆社会である。先日読んだオルテガの「大衆の反逆」にある凡俗に居直る大衆が支配する社会である。この大衆社会の進行の結果が現在の新中間大衆社会だ。

筆者は、最後に教養主義が終焉した今こそ、教養とは何かを初めから考えるチャンスだと述べている。

現実の仕事を相対化し反省するまなざしとしての教養を身につけた財界や政界の実務型の知識人は、あるべき像を提供してくれる。ここ数年取り組んでいる「人物記念館の旅」の中で、経済界や官僚組織の中で、本を読み自省を重ねながら、目の前の現実に立ち向かっている教養豊かな人物も多くみてきた。そしてそういう人物像に大きな共感を覚える自分を見つめてきた。

教養人とは常に自分の立ち位置を確認し、いかに生きるかを問い続けている人である。そして人間としての生き方を磨くために修養していく。とすれば、歴史や地理、そして科学や芸術の人類の英知に学ぶ必要があるということになる。実世界の中で生きる術(すべ)としての教養という観点からの教養の再興が必要であると思う。

佐伯彰一「日本人の自伝」(講談社学術文庫)

伝記と自伝は違う。

人がある人物について評伝したものを伝記といい、その人物が自ら自分の人生を語ったものを自伝という。子供時代からリンカーンやワシントン、野口英世などの伝記はずいぶんと読んだ記憶がある。最近になって優れた伝記もいいが、本人自身の言葉で語る自伝に関心を持つようになった。伝記には賛美型のものや書き手の解釈が入り込むので何冊読んでもしっくりこないことがある。一方、偉人の自伝には自己主張、自己弁護、隠蔽、などがつきものではあるのだが、何よりも本人が語る内容に魅力がある。

「作家の自伝」というシリーズが日本図書センターから出ている。第1期から第3期まで各20巻が出ており、その中の10冊ほどを手に入れて折に触れて私も読んでいる。このシリーズの監修者は、佐伯彰一と松本健一である。この佐伯彰一が書いた「日本人の自伝」(講談社学術文庫)を読んだ。佐伯彰一は1922年生まれの東大教授で、アメリカ文学、比較文学が専門。

自伝という分野は思想論と文学論の合間にあり、きちんとしたジャンルとして今まで誰も研究してこなかった分野で、この佐伯彰一が開拓した分野である。この本のもととなった単行本は1974年に出版されているのだが、そこにいたるまで20年の歳月が費やされていた。この名著の後も、この分野は大きく発展しているとはいえないようである。

詳しく読んだ部分は、以下の4人の自伝に関する評論だが、実に深い人間観察の連続である。

私が実際に読んでいるのは福翁自伝だけで、後の人物の著した自伝は名前しか知らないが、内容が手に取るようにわかる。いずれこれらの自伝は読まざるをえないだろう。

内村鑑三の「余は如何にして基督信徒となりし乎」---聖なる自伝

福沢諭吉の「福翁自伝」---「俗」なる自我の魅力

新井白石の「折たく柴の記」---武士的自我のかたち

松平定信の「宇下人言」(うげのひとこと)---大ディレクターの自我構造

それぞれの自伝の内容とその評価をここで詳細に語ることはできないが、書き手の人生の中核部分、心の奥底を覗き込み、本質をつかみ出す著者の腕は冴えている。勝小吉と鈴木牧之から始まって、内村鑑三、福沢諭吉、フランクリン、新井白石、山鹿素行、松平定信、そして江間細香(頼山陽の恋人)、只野真葛(滝沢馬琴の恋人)などの女性の運命と残した歌などを材料に女流の自伝についての論を進めてゆく。

佐伯の主題は、人はなぜ自伝を書くのか、である。

松井今朝子「吉原手引草」(幻冬舎)

直近の直木賞をとった「吉原手引草」を読んだ。作者は松井今朝子、1953年生まれで早稲田大学で演劇学を専攻し、松竹で歌舞伎の企画制作を担当した後、フリーで歌舞伎評論など手がけ、小説家としてデビュー。出版社はヒット作品を生み続ける幻冬舎である。

吉原一の花魁の葛城が起こした事件を若者が聞きまわって真実に迫ろうとする物語として進んでいく。この間、吉原に生きる様々の人々が登場し、この事件に関することを弁じていく。最後は二度目の弁をはる人もいるが、都合16回にわたる。

引手茶屋桔梗屋内儀、舞鶴屋見世番、同番頭、同抱え番頭新造、伊丹屋、信濃屋、舞鶴屋遣手、仙禽楼舞鶴屋庄右門、同床廻し、幫間、女芸者、柳橋船宿鶴清抱え船頭、指切り屋、女衞、小千谷縮問屋、蔵前札差など、花街特有の珍しい職業の実態が当人の口から話言葉で語られる。

読者は主題もわからないまま読み始め、吉原という街の成り立ち、しくみ、しきたり、そこで働く人たちの渡世観、などに引き込まれていく。絢爛たる花魁という仕事の中身、哀歓などの知識を得ながら物語りは一幕、一幕、進んでいくが、話言葉の巧みさと新しい知識に目を奪われていくうちに最後の「詭弁 弄弁 嘘も方便」へと流れていく。まことに達者な筆遣いである。

題名の「吉原手引草」は、独特の文化を持った吉原の格好の手引きを目指して物語をつくったということがわかる。吉原については落語や他の小説などで触れることがあるが、この世界をかたちづくっている花魁以下の女の身分の違い、それにくらいついて生きている男女の仕事の数々などを読者は楽しみながら知ることができる。

最後のどんでん返していろいろな疑問が一举に解けるという構想、全ての物語を葛城本人を巡る人々の口から語らせる手法、くどいと思わせない達者な筆法など、佳品である。この作品は直木賞をバネにして多くの読者を獲得すると思う。

また、松井今朝子は経歴からわかるように、歌舞伎、演劇などの分野に詳しいこともあり、長く作品を生み出すことができる作家とみえる。この女性作家の今後の作品が楽しみである。

東山魁夷「唐招堤寺への道」(新潮選書)

8月28日の朝刊を読む前の早朝、先の「信州の旅」で訪れた日本最高峰の風景画家・東山魁夷館で購入した「唐招堤寺への道」(新潮選書)を読み終えた。心を描く文章家としても一級であると感じた。

東山魁夷の描く絵が世の人々に感銘を与えるのは、豊かな人格と深い教養に裏打ちされた作品に接するからだと思つて改めた。

第一章「鑑真和上」によると、唐の高僧鑑真が日本への渡航を決心したのは55歳で、その後、5度の挫折の末、盲目となった姿で到着したのは67歳であった。そして

77歳で他界するまで日本文化に大きな影響を与え続けた。功成り名を遂げた鑑真にとって日本への渡航は、それまでの自分を夷て生まれ変わって第二の生を生きようとしたことを意味する。自身よりも遥かに大きなものに身を任せたと東山は考える。生き方を考える上でこの鑑真の行為は深い含蓄を持っている。芭蕉の名句「若葉して御めの零ぬぐはばや」にも感銘を覚える。

第二章「唐招提寺」では、読者は東山魁夷の絶妙な筆致で綴られる文章の力で、広い境内を静かに一緒に歩いているような感覚にひたされる。建物や小道、周りの風景など実に細やかな描法で静かに語る文章を堪能すると、この画家の描く風景に納得する。

画家は建築を音楽にたとえて説明する。南大門の基壇に田って雄大な金堂を眺める心象を、壮大なシンフォニーの第一楽章の冒頭の決然とした第一主題を聴く思いがすと表現する。そして松林を歩き静かな戒壇院の静かな散策は第二楽章アンダンテ、金堂の右側は生彩のあるスケルツォというように読者を導いていく。画家は伽藍の配置や曼荼羅図に音楽的な構成を強く感じている。画家によれば、日本的な美の特質は、外来の文化を大胆に移し入れ、それを日本の民族的な美意識に同化させていく点にある。唐風のエキゾチックな大伽藍は千年のときを経て、落ち着いた風雅な建物に変えていった。

第三章「奈良にて」、第四章「大和路」では、日本の奈良と京都の名刹を遊ぶ。

そして第四章から、唐招提寺御影堂障壁画の揮毫の物語が始まる。

昭和45年、日経新聞社の円城寺社長から唐招提寺の森本長老が障壁画に絵を描くことを望まれていることを知る。自分の歩みの上からは自然の成り行きの出発点と感じ、長い時間の後に承諾の返事をする。

現地をみて最初に浮かんだのは、上段の間に山、寝殿の間に海というテーマだった。

この後、画家は昭和48年から一切の仕事をやめて、日本の海と山の写生に没頭する。太平洋側、日本海の岬、四国、信州、九州と旅を続ける。いつもは相手の風景から描いてくれとささやきかけてくる場合に描くのだが、高野聖の舞台となった天生峠で「この風景を描け」と何者かに命じられているのを感じている。いくつもの不思議な体験をして、障壁画の題材を豊富に得ている。

年表によれば日本の旅を終えた画家は鑑真の故郷の中国を旅して鑑真の心象を表す風景を写生する旅に出ている。

この画家が畢竟の大作を描ききっかけや、そのための気の遠くなるような旅と作業にも興味を覚えるが、絵を描くにあたっての構想に関心を惹かれる。鑑真和上にゆかりの寺の障壁を描くために、鑑真の心象を思いながら日本と中国を巡り、ようやく取り掛かるという行為に驚く。そして山と海を二つの大きな軸として全体図を描こうとする。桜の間、松の間、梅の間については名称を生かした絵を描こうとする。全体の色彩のトーン、それぞれの間の色合いなど全体を統一的に観る目がいる。絵を描くということは豊

かな構想力が必要ということがわかる。このことは横山大観を訪ねたときにも強く感じたことである。

このような長く残る大きな仕事は、小下図、中下図、大下図、本製作と進むのだが、画家は大規模な場合は基礎的な仕事に精力と時間をそそぎ、綿密に一步一步と積み重ねる以外にないと断言している。三分の二を準備のためにかけてもよいとのことだ。

第七章「道遥か」の冒頭に印象に残る言葉が記されている。

時が過ぎ去って行くのでは無く、私達が過ぎ去っていくのである。

画家の追想によれば、本人の意向とは違い、評価され無い時代も長く、途中で兵隊にとられたりして画家として世に出るのはずいぶんと遅かったとのことだ。長い準備期間を経て、本製作に入ったようなものと述懐しているが、人生という大きな舞台で大ぶりの絵を描くには、準備期間が大切ということを暗示している。

この本を読んでいる間、この日本を代表する風景画家の内面の深さと豊かさを感じながら、静かで充実した時間を過ごした。

上田紀行 「目覚めよ仏教！ --ダライ・ラマとの対話」 (NHKブックス)

対談という形式の書物の魅力は、互いが相手の言葉に触発されて思想が発展し、深みを増すことがビビッドに見えることである。分野が重なる対談も面白いし、分野が異なる対談も興味をそそられる。対談本は話言葉で分かりやすい平易な言葉を使って述べ合うため、私たちは碩学の思想の中核を把握できることがある。

ダライ・ラマという存在は不思議な魅力に満ちている。いうまでもなくダライ・ラマはチベット仏教界の法王的存在であるが、ダライ・ラマは現在はインドに住んでいる。1959年、ダライ・ラマが23歳の時に中国人民解放軍がチベットに侵攻し、政治亡命する。これまで百数十万人のチベット人の命が奪われている。ダライ・ラマは戦う法王である。

このダライ・ラマに「がんばれ仏教！」などの著作があり、日本の仏教諸派との対話を繰り返しながら、仏教の教えをもって日本の精神的な混迷を打ち破ろうという運動を起こしている文化人類学者・上田紀行が対談に挑んだ書が「目覚めよ仏教！ --ダライ・ラマとの対話」(NHKブックス)である。「癒し」という言葉を日本で最初に提案して話題になった上田紀行の案内で私たちは、仏教の本質と現代の仏教の意義を垣間見ることができる。ダライ・ラマとい仏教界の法王の考えに着目しながらこの書を読んだ。

意外なことにダライ・ラマは社会主義的なものの考え方に自分の思想は似ているという感慨から対談は始まる。ヨーロッパの社会民主主義を正しい方向としてみていることに驚きを感じたが、この対談ではダライ・ラマは率直な語り口で仏教と世界を論じてく。

人間にとって「愛と思いやり」が基本的価値であり、社会を統合しているのは法律ではなくてこの愛と思いやりである。このような深いレベルの価値を教えるのは学校教育ではなく、宗教の仕事である。

基本的にすべての宗教は同じようなことを説いているが、二つのグループがある。す

すべてのものを創った神の存在を信じる宗教のグループは、信仰と論理が共存しなければならずと説く。もう一つのグループである仏教では、信仰と論理は始めから両立している。すべてのものはその原因があり、それによって結果が生じているという論理的な認識から仏教は出発している。

現代の仏教徒は仏教を宗教としてではなく、「心の科学」という観点から見ていくことが大切である。小乗仏教では自分を救うことが大切であり他の命あるものは害さないということを行うが、大乘仏教では他者を助けて世界を幸せにしようとするから社会性があった。

社会問題の解決が宗教の課題であるから、慈悲のころから生じている「怒り」はもつべき怒りだ。憤怒の姿の不動明王は衆生に怒っているのではなく、衆生の間違いを諭すという思いやりを表現している。

仏教の教義を学び知識を得る段階と、それを実践修行につなげるという段階がある。知識と実践を結びあわせることが非常に重要である。

創造主がすべてを創ったのではなく、仏教は果関係で捉えていく。物事はそれ自体で存在しているのではなく、相互依存関係にある。「空」とは、すべてもものはその因と条件に依存しているだけである」という捉え方だ。原因を滅すればその結果としての問題は解決する。

仏教の教えを科学的な知見と関連づける努力が必要だ。怒りは免疫機能を低下させる。逆に慈悲の心や思いやりは心の平和をもたらすから免疫機能を維持し高めることになる。科学的な知見に基づきながら、仏教の教えを完璧に説明しきることが必要で、それが現代における正しい方向である。仏教のシステムは現代においても機能し、活かせる。

まず自分自身に思いやりを持ち、それを多くの人たちに向けて広げていくことが大切だ。

神の存在を受け入れている宗教は、個人の自信やプライド、創造力を失わせてしまう。修行を積んでブッダになるということは、自らが世界を創り出すという考えであり、個人の主体性を強く問う教えである。

世界は因果関係でできている、知識と実践の結合、愛と思いやりの教え、社会の変革への主体的な関与、仏教の教えを科学的に説明する努力を仏教界はすべきである、キリスト教と仏教の本質的な違い、など違和感はなく、共感や納得できる部分が多かった。

この本では上田紀行による墮落した日本仏教界の現状批判と問題意識が根底にあって、それを乗り越えていくための処方箋を得ようとする努力が通底している。実践に向けての改革のための書であるとの印象を強くした。

上田紀行さんとは一度会ったことがある。もう 7-8 年前になるだろうか、奥さんの竹内陶子(NHKアナウンサー)さんが野田一夫ファンクラブの仙台での集まりに参加し

たときに一緒に来られた。松島で食事をしたり、翌日は平泉を案内した。陶子さんは感性がみずみずしい魅力的な女性であったし、上田さんはゆったりした雰囲気の良い人物だった。その後の活躍を横目にみていたが、今回この書を読んで行こうとする方向を知ることができた。思索と実践の相互作用の中で、今後多くの実りがでてくるだろうと期待される。

多田富雄 「寡黙なる巨人」(集英社)

世界的な免疫学者による平成版「病状六尺」。

脳梗塞による半身不随と失語症との戦いの中で、自らの再起ではなく、自らの中で生まれつつある巨人の再生を感じる著者。

以前にまさる活発な著作活動と介護制度改悪に抗議する社会運動を行いながら生き続ける意欲と姿に感動する。

父が右半身不随と失語症に長い間悩まされたので、多田先生の記述によって父の感覚や絶望やリハビリの効果、生きる意欲などを垣間見ているような気になって読み進んだ。

正木晃 「マンダラとは何か」(NHK出版)

インド大乘仏教の最終ランナーであった密教が開発した真理を象徴した図像がマンダラである。心と宇宙の構造図である。仏心を幾何学的パターンに配置することで、仏教の世界観をあらわしたものである。

個人の悟りを重視する小乗に対し社会変革と救済を重視するのが大乘で、初心者向けの教えである顕教に対し特別に選ばれた者にしか明らかにされない教えがある密教である。つまり大乘密教は究極の教えである。日本では中期密教を輸入した空海によるマンダラを目にするが、チベットでは後期密教を土台にしており多彩なマンダラが見られるという。

和泉育子 「できる上司の聞く技術」(中経出版)

「聞く」ことのプロである筆者が、職場のコミュニケーションの欠如を「聞く」という行為を通じて解決する具体的な技術を豊富な実例をあげながらやさしく解説。部下を指導しなければならない上司の立場からのアドバイスが役に立つ。聞く技術はいい上司になるための必須科目である。

渡辺京二 「逝きし世の面影」(平凡社)

渡辺京二という名前には記憶がある。私の属しているNPOがまだ産声を上げた頃、講師として出講していただいていた在野の日本近代史家として知っている。私自身はこの勉強会を四半世紀以上続けているが、名前だけで実際に会ったことはない。1930

年生まれだから、勉強会に来ていただいていた時代は、まだ40代だったのだろう。この人は当時からずっと熊本市在住である。

この渡辺京二氏が書いた「逝きし世の面影」(平凡社)という文庫版600ページの大部の書物を読み終わった。この本の記述の美しさにひかれて一気に読み終えるのが惜しくなり、毎日少しずつ読み進めるという読み方をしてみた。この一ヶ月ほどは朝の短い時間、心が洗われる様なすがすがしい気分を味わった。

江戸時代から明治中期までの期間に確かにあった美しい一つの文明の姿を描き出すために、著者はこの時代に日本を訪れたあらゆる人たちの紀行文、報告書、エッセイなどを実に丹念に読み込み、その観察を細かく紹介していく。長崎に来たシーボルトや黒船で来航したペリー提督、ゴローニン事件の当事者、外交官サトー、医師ポンペ、女性紀行家・イザベラ・バードといった著名な人物などの書物や、無名の男女の書き残した日記・観察記など、その渉獵した資料の膨大さと引用の的確さに驚く。長い年月と細かな作業の伴う労作とあってよい。

一つの滅んだ文明の面影を、文明の当事者たちではなく、外から見た目で浮き彫りにしていこうとする試みであるが、読者はその記述の正確さとその言葉が織り成す世界の美しさに心を奪われる。明治維新以降に行われた急速な近代化・西洋化によって死んだ、奇跡ともいべき一つの文明の姿を私たちは脳裏に焼き付けることができる。著者の織り成すこの世界の残滓は、子供の頃の風景にいくつか見ることができた。たとえばこまかく分かれた職人の世界の記述は、近所に竹細工職人がいたことを思い出させる。この本を読んでいると何か懐かしい感慨がうかんでくる。

「ある文明の幻影」「陽気な人々」「簡素と豊かさ」「親和と礼節」「雑多と充溢」「労働と身体」「自由と身分」「裸体と性」「女の位相」「子どもの樂園」「風景とコスモス」「生類とコスモス」「信仰と祭」「心の垣根」という14の章で著者が繰り返し浮き上がらせているのは、美しい風景とやさしい心根と見事な礼儀作法をわきまえた日本という文明の美しさである。ここには確かに「美しい日本」が存在している。

笑い上戸、愉快な人種、生活に満足した満ち足りた態度、こっけいなほどの礼儀正しさ、無駄な家具のない簡素でシンプルな家屋、好奇心旺盛な男女、それなりに豊かな生活、絵のようにつくられた農村の景色、建前とはまるで違った自由な生活、性に対するあつけらかんとした態度、通説とは異なる女性の高い地位と発言権、世界のどこよりもこどもを大事にする態度、動物を家族と考える心根、災害や不幸という運命を享受する諦観、宗教行事をイベント化する才能、民芸品が示す文化度の高さ、草木と花々の豊かさとそれを愛でる心の豊かさ、清潔さと勤勉さに彩られた生活、どこあでも続く見事な田園の風景、、、。

ここには私たちが学んだ封建時代という固定概念を覆す事実と観察が無数にちりばめられている。この文明の末裔である私たちは、その美しい文明の残滓を時折この世で見かけることがあるが、ここにはその文明の総体が面影として淡く存在している。

この文明が形づくった人々の精神は、明治時代に生きた人たちに中に確かに息づいていた。「明治の人は偉かった」という述懐を年配者から聞くことが多いが、それはこの失われた文明が育んだ精神だったのだろう。価値観という言葉がある。それは人生でもっとも大切にすべきものという意味だが、今の世に生きる私たちは恥ずかしくない価値観というべきものを持っているだろうかと自問せざるをえない。文明は独特の精神がつくりだすものだということを強く感じる。今日の日本人が読むべき名著であると総括しておこう。

こういった文明の面影はどういう形で残すことができるだろうか。まず書物や映画という形が思い浮かぶが、仮想空間上につくるといいと思った。セカンドライフなどの3Dのバーチャル空間に「逝きし世の面影」を再現するプロジェクトもいいと思う。

梅田望夫「ウェブ時代をゆく」(筑摩新書)

梅田望夫の最新著「ウェブ時代をゆく」(筑摩新書)を読んだ。

梅田の「ウェブ進化論」「フューチャリスト宣言」はそれぞれ刺激的だったが、この本はIT技術革命の時代にあって若者は「いかに働き、いかに学ぶか」をテーマに書き下ろしたものである。話題となった「ウェブ進化論」に関する書評や感想を2万近く読み、ノートをつくり、フレーズを抽出するという営為に1000時間以上の時間と労力をかけた上で、出来上がったのが本書である。ウェブ時代ならではの本の書き方である。

「ウェブ時代をゆく」は重要な書であるので、何回かに分けて私の考え方とシンクロする部分を中心に自由に書いていきたい。

梅田は本書の冒頭で「1975年から2025年までの半世紀」は、百年後に「情報技術(IT)が世界を大きく変えた時代」と総括されるに違いない、と喝破している。この書はそういった時代に生まれた新しい世代に向けた激変期のサバイバルの書という性格を持っている。

私は1950年生まれだから、この歴史的な転換期である半世紀は、ちょうど25歳から75歳までの期間にあたる。前半は大企業の中で仕事をし、47歳ときに転身し今は大学で教鞭をとって10年たった時点にいる。大人になってからの50年間はIT革命の夜明けから成熟までの期間ということになり、実に得がたい経験をしていることになる。

この書は若者にまずレベルの高いウェブリテラシーを身につけよとアドバイスしているが、私自身の働き方、生き方を考えさせるものを持っている。私たちの世代もIT革命の世界をつくりあげる側に立つことはかなわないが、その新しい世界の黎明期、発展期の成果を使う側として楽しみながら伴走することはできそうに思う。

さて、梅田は「Vantage Point」(シリコンバレーの投資家ロジャー・マクナミー)というキーワードを「見晴らしのいい場所」と説明している。分野の最先端で何が起きているかを一望できる場所に立てとのメッセージである。

私も「見晴らし」をテーマとした本を書いていることもあり(「見晴らしを良くすれば仕事は絶対うまくいく」(実業の日本社)、同感する。

日本海軍の艦長はその艦で最も高性能の双眼鏡を持っていた。それは戦況の確認や決断を迫られたときに、リーダーという重責にあるものは、最も「見晴らし」がよくなるてはならないという考え方の反映であった。

優れたカメラマンと一緒に旅行をしたことがある。同じ行程を歩んでいるのに、彼の撮った写真は皆より抜きん出ている。バスに乗るときはドライバーの真後ろに陣取る、史跡を訪ねるときは、ちょっと小高くなった場所でシャッターを押している。面白い構図が生まれるし、シャッターチャンスも逃さない、したがって、優れた写真が出来上がるといのがその秘密だった。

職場の風景を見てみよう。係長は平社員より、課長は係長より、部長は課長より、見晴らしのいい場所に机を置いている企業が多いはずだ。

上司は山の7合目にいる、部下は3合目を登っている。状況認識が異なることがよくあるのは、見ている景色が違うということである。見晴らしの悪いブッシュの中を悪戦苦闘しながら一歩ずつ歩を進めている部下が見る景色と、7合目から見える景色はまったく異なっている。

見晴らしがいいポジションにいると状況が人よりよく見えるから、判断が正しくなる可能性が高くなる。つまり位置取りが大切なのだ。

同じ能力なら、位置取りしだいでより高い見晴らし台を手に入れることができる。その経験がさらに高い場所へと人を誘導するのだ。

優れたリーダーと接していると「見ている景色が違うなあ」と感心させられることを経験している人も多いただろう。彼は高いところから問題を眺めている。こういう視点を持った人は、役職に関係なく、ごく自然にリーダーに押されるはずだ。リーダーとその他のフォロワーの違いは何か。それは、見晴らしである。見晴らしのいい場所に立つ、これがリーダーになるための心構えである。

日本には鳥瞰図絵師という名前の画家がいて、日本各地の風景をまるで鳥が空から見たように描くことができた。見晴らしがいいとは、その鳥瞰図絵師たちの視点を持つことだ。

また、梅田は「構造化」というキーワードに関心を寄せている。

ルポライター沢木耕太郎の「見知らぬ土地にでかけてたくさんの見知らぬ人に話を聞き続ける行為」と「その結果を構造化しようと苦吟する過程で発揮する創造性のようなもの」という言葉や、今北純一のバツテル研究所での仕事が「見知らぬ人の話を聞き続ける」ことから始まり、「思考の構造化」に終わる」という言葉に惹かれている。

最近「構造化」という言葉を色々な場面で聞くようになった。地域活性化の専門家は「現状を構造化して理解していくべきだ」と言っているし、学校の教員は「知識を構造化して教える必要がある」と語っている。また知の総本山を自認する東大は「知の構造

化」という旗を立てて改革に邁進中である。

確かに箇条書きで知識の断片を平面的に並べてきたのが、私たちの社会のやり方であったから、その断片同士が織りなす構造はどのようになっているかという観点から吟味をする習慣を持つことは意味があると思う。構造化とは部分同士の適切な並び方を考え、大小を吟味し、立体的な形に転換し、ある世界を筋道のたった解釈で説明することだといえるだろう。

そういう意味では、日常目にする契約書は条文が箇条書きで平面的に整理されているともいえるし、社会の基本的なあり方を示しているとされる法律も、現実の社会が立体的であるほどには構造化されてはいないのである。

知識は構造化の努力によって一段と高いレベルに達するであろうことは間違いない。しかし、この構造化という作業によって完成された知識の体系は、それなりの硬度を持って存在することになる。組織の構造、契約の構造、改革の構造、政策の構造、、、。こういった構造化された世界はその段階で固まって環境の変化に応じて柔軟に変化することが難しくなる。

実は構造化の先には時間軸での変化や深化という世界が待っている。ここで役に立つのは「関係」という視点である。関係は常に変化する。あらゆるものは変化の途上にある。関係の整理、関係の再構築、関係の是正、関係の修復、関係の創出、という言葉と並べてみるとわかるが、構造という言葉には静的な響きがあるのに対し、関係は動的な概念である。一瞬手にしたと見えた構造はその時点から現実から揺さぶられる。ある瞬間の関係の束としての現実には、環境の変化しだいでいかようにも変容する。例えば、細分化された分野のある時点での全体構造は示すことができるが、分野同士の関係は常に変化、深化していくから、全体図としての鳥瞰図は進化し続けていかざるをえない。

構造化という静的な知識の体系の構築を土台に、関係という動的でダイナミックな視点を持ちたい。そもそも関係という概念には構造を含んでいるのだ。関係は大きくしかも柔らかい概念なのである。私たちは「関係」という視点を持ち続けていくことでビジネスでも豊かな実りを手にすることができるだろう。

梅田望夫は20年近いコンサルタント業の中で、大企業で働くビジネスマンを観察し続けてきた。この本では「高速道路」の延長線上の高く険しい道と歩く人の少ない「けものみち」という比喻で組織と個人を語っている。梅田自身は大組織で働く適性がないと判断し、けものみちを歩んできて今日の高みに立っているが、「日本株式会社」のメイプレイヤーを見つめる目は冴えている。

大企業では「30歳から45歳」の15年のすごし方が大切であると語っているが、そのとおりだ。

大きな組織では20代はまだ何者でもない修行の身であるからさほど深刻ではない

が、30歳を迎える頃には何かをこの組織で為したいと希望している「志」ある若者は、自らの適性と専門性の構築についての悩みに襲われるケースが多い。だが自ら就きたい部署に配属されることは希でその時点での毎日の仕事と自分の意識とのずれに苦悩しながらハードワークを重ねるという人が多数である。

30歳から45歳という「魔の15年」をいかに過ごすかによって自らの将来が大きく左右される。この時点で遠い未来を考えずに目の前に与えられた小さな問題を心を込めて一つ一つ解いていくという心構えを持って、仕事に精を出し続ける。そうするともう少し大きな問題が与えられる。それを解くとさらに大きな問題を提示される。大きな組織においてはこの連続の中で人は育っていくのである。そして40歳を迎える頃になると重要な部署で仕事をしている自分を発見することになる。

梅田のいうように大企業は巨大な社会であり、舞台が大きい。この大舞台という大空間の持つ利点は大きな人物に育つ可能性があるということでもある。大組織はどのような分野であれある分野の最先端を走っているものだ。先頭ランナーは時代と並走しているから「見晴らし」がいいのである。大きい魚になる近道は大きな川に住むことである。

大組織においては魔の15年を息せききって登りきって40代半ばを迎えた人は、見晴らしが一気によくなる。その人は眼前の細く厳しいルートを登っていくことができる資格を持つことになる。一息ついた後そのまま頂上に向けてアタックしていくこともいいだろうし、それまでに蓄えた力を携えたまま他の山に登る道に逸れていくことも可能になる。

さて、梅田は「大組織で成功できる要素」として7項目を挙げている。

1. 自分の生活や時間の使い方を「未知との遭遇」として楽しむ
2. 与えられた問題・課題を解決することに情熱を傾けることができる
3. 何を為すべきかへのこだわりがあまり細かくなく一緒に働く人への好き嫌いが少ない。
4. ルールを与えられるとすぐに習得してその世界で勝つことに邁進する
5. 多くの人と力を合わせて大きな仕事をしようとするチームプレイヤーである
6. 長時間長期の「組織へのコミットメント」をいとわず、それを支える持久的体力がある
7. 組織や仕事への使命感のほうが、個の志向性よりも価値が高いと考える

いくぶん大組織の中で活躍する人々の姿を戯画化している面もあるが、この観察にはほとんど同意する。こういう人であれば間違いなく重要なポジションにたどり着けるだろう。確かにそのとおりののだが、外面的にはそうでも「使命感」と「個の志向性」の相克にフラストレーションを感じたり、人に対する苦手意識に毎日悩んだり、長時間労働と家庭の調和に苦しんだりしていることは指摘しておきたい。そういったことに何とか折り合いをつけて仕事に励んでいるのである。

梅田の目線は大組織適応性の不足する自分と同じ志向性を持つ若者に注がれている。

ウェブ進化は大組織というリアルな大空間に生きる人にも恩恵を与えるが、それ以上に日本の息苦しい風土の中で生きにくい若者に大きな空間を与えるから、今までより大きな可能性が開けている。だから若者は当面は新時代の情報技術を武器を携えてサバイバルを目標とし、生涯を通じて好きを貫けとアドバイスする。

今まではけものみちを歩くには勇気と諦念と努力が必要であった。しかしいまや高速道路を走る力も手に入れているし、けものみちを歩む道もあることがみえてきた。可能性が大きく広がったということだろう。こういった時代にあっては人生の経営資源の最上位に「時間」がくる。自分の関心を持つテーマに没頭できる時間を多く持ち、脇目をふらず労力を注ぎ込むことによって、個人にとって新たな地平が出現するという可能性が開けてきた。

大組織適応性の高い人もそうでない人も、そういった資質の多くは「性格」によっている。「心構え」と「心がけ」に重心があった働き方、生き方論にも、「性格」という要素をもっと加味して考える必要がある。この点も深堀りしたい点である。

梅田望夫は、「構造化」に関して次のようにも言っている。

「特に「けものみち」においては、自分が興味を持って考えているもやもやとしたことを、相手に合わせてわかりやすい形に構造化してコミュニケーションする能力が重要になる。」「そんな構造化能力、コミュニケーション能力は、このオープンな知的生産プロセスで磨くことができると思う。」(161-162 ページ)

「構造化能力」「コミュニケーション能力」に関して、少し深堀りして私の考えを少し述べてみたい。

・文章の最大の特徴はごまかしがきくことだ

新聞や雑誌、書類、社内文書、電子メールなど、多くのコミュニケーションの場では、現在、文章が主体になっている。学校教育で身につけたのは、こうした文章によって表現、伝達する方法だが、果たして文章はそれほど完璧な表現や伝達の手段なのだろうか。

通常、文章を読むとき、書かれた文脈に沿って読み進めていく。これは書き手の思考の流れをなぞっていくことだ。ものの考え方は人それぞれ違うから、他人の思考様式に従うと、自分の思考を自由に働かせることができなくなる。何か納得できない、釈然としない感じがすることも多い

また、さらに、新しい言葉の定義や関連した事柄の説明が入ると、話が脇道に逸れてしまい、文章自体の見通しが悪くなる。実際の物事は立体的だから、文章ではそれらをすべて文脈という一本の線の中で表現しなければならない。

書き手はさまざまな接続詞やレトリック、「てにをは」の使い方などに十分に気を配りながら、何とか物事の構造や因果関係、時間的な流れを表現しようと努力する。しかし、それを一目瞭然、一瞬にして全体像を掴めるようには、文章ではできないのだ。

文章は、例えば地図のように物事の位置関係を表すことが苦手である。言葉で伝えようとすると大変なのに、ちょっと見取り図を描くと簡単にわかってしまうというような経験は誰にでもあるはずだ。確かに文章でしか表現できないこともあるのだが、不得手な分野もある。

また、文章は複雑で見通しが利きにくいいため、矛盾があったり、曖昧なままでも、書いた本人が気付かない、あるいは、ごまかしてしまうことがある。つまり文章によるコミュニケーションでは、書き手もよくわからないまま文章を書き、当然、読み手はなおさらわからない、ということが起こってくる。

ワープロやパソコン、電子メールやインターネットの発達で、文章情報の量は飛躍的に増えているが、その反面、誰もが手軽に発信できるだけに、内容がよく吟味されていない文章もたくさん出回っている。意味が曖昧だったり矛盾した文章が出回り、それが誤解され、未消化のままどんどん伝えられてしまう。

#### ・箇条書きは思考を停止させる

文章は長くなるから、この問題について1,2,3と大事なところを箇条書きにしなさいと小学生の頃からそう言われてきた。会社に入るとなおさらだ。長い文章なんて忙しくて読めない。箇条書きにして出せという。上司は文句を言って、これでは足りない、あと2つあるとか言ってつけ加える。問題をしばらくしぼって3つ箇条書きにしたのに勝手に2つ加えてしまう。そうしたら体系が変わってしまうのだ、そんなことには誰も頓着しない。

箇条書きは考えなくてすむ仕掛けである。箇条書きというのはキーワードを並べただけだ。世の中には箇条書きのまま成立しているものなどありはしない。どんな問題でも立体的にできている。そういうものは箇条書きで表せない。全ては構造と関係で成り立っている。部分と部分とはつながり相互に関係しあっている。ゼロサムであったり、相乗であったり、連関であったり、二律背反であったりする。

だが、そこまでは考えない。とにかく箇条書きの企画書なり報告なりを受け取って満足している。それでわかったような気持ちになっている。日本人が特に構想力やディベートに弱いのは箇条書きが原因である。私たちは箇条書きには慣れている。箇条書きは善ということに刷りこまれてしまっている。箇条書きにすると言われても必ず箇条書きになってしまう。だから自分で書いた箇条書きの1項目と5項目との関係は何かと聞かれても説明できない。

箇条書きというのは、まず大きさがわからない。たとえばABC三つあると、どれがいちばん大きいかわからない。AとBは重なっているかもしれない。3番目のCがAに影響を与えている可能性もある。つまり物事の構造や関係を表すには箇条書きは不適なの

だ。箇条書きはそういうキーワードがたまたま出てきただけで、それを並べただけにすぎない。大事なことはキーワード同士の関係がどうなっているかということだ。したがって文章を箇条書きで書いた本社の通達文などは、現場はよくわからない。

なぜなら、書いた本人が深くわかっていない可能性が高いからだ。そういう人が書いたものがどうして現場でわかるだろうか。

しかしこの箇条書き思考はなかなか直らない。千年以上の伝統があるからだ。私たちの頭の中には何でも同じように並べる癖がある。そういうDNAになっているのだ。

#### ・図解コミュニケーション

コミュニケーション活動の活性化のためには、コミュニケーションスタイルについての吟味が必要である。ものごとの全体像と部分同士の関係をつかむことができる「図解コミュニケーション」(私の 25 年以上前の造語)という思考法、コミュニケーションスタイルをもっと活用すべきだと思う。文章至上主義ではあちこちに出現する信号機や不意の落石によってスピードが大幅に減速される。文章コミュニケーションが時速 30 キロなら、図解コミュニケーションは 100 キロ以上の猛スピードで情報を運ぶことができる。

全体の構造が見える、部分同士の関係がわかることを特徴とする図解は、合意形成の武器として有効だ。鳥の目で空から問題を見る、つまり鳥瞰することが大切だ。正確である必要は必ずしもない。個々の情報が入っていて、位置関係も大まかにつかめることが重要だ。地図という言葉は、地の中に図が浮かび上がってくるという意味を持っている。人間は頭がよくないから、直接、地を見てもわからない。だから浮かび上がってくる図を見て考えたり、議論することが必要になる。

全体は部分に影響を与えながら全体として存在し、部分は全体に影響を与えながら部分として存在している。全体と部分が相互に交流をはかりながら全体としてバランスをとっている様子を表現したものが図である。

図はまず大きい輪郭を描いて、そのなかを部分で埋める。またその中の部分をまた小さい部分で埋めていく作業をする。この作業を始めると考えることが延々と続く。そして図にできあがったとき、不思議なことに人に説明ができ自分に気づく。図に描いて説明するということになると、自分の知識を加えながら、自前で説明することになる。

近年の「総表現社会」ではエリート 1 万人、大衆 1 億人という構図ではなく、この間に「多様で質の高い」中間層がいて、その数は 1 千万人と想定している。この層は国民の 10% 前後で構成されていて、日本の持つ厚みは世界一優れたものだろう。今まで大衆の中に埋没していた中間層にとっての新しい可能性の出現が本当のありがたみだとういある女性の感想は、自分の問題意識に合致する。

この梅田の観察は、この中間層は中学高校時代には五十人のクラスの中に 5 人か

ら 10 人のたいした人物がいたというクラスの構成が根拠になっている。その人たちがネットという新たな武器を持って発言し始めたというわけだ。

私は九州の 6-7 万人の市で高校時代までを過ごした。都市化が進む前だから当時の日本の平均的モデルと考えてもいいのだろうか。中学校では人数が多く教室は満杯だった。確か 55 人クラスで 1 学年 7 クラスあったと記憶しているから同級生は 385 人ということになる。当時は「成績」が常に話題の中心だった。今では考えられないが擬試験の順位を 1 番からビリまで全員廊下に貼り出したりしていた。こういう状況だったからすぐに成績でグルーピングする癖がついてしまったようだが、「たいした人物」を成績であらわすことを許してもらいたい。

エリート 1 万人は少なすぎるから、ここではエリートを 1% とすると全校で 5 番以内、10% は 50 番以内だからクラスで 5 番から 10 番ということになる。

中学時代の友人の顔を思い浮かべると、全校 5 番以内のエリート(つまりクラスの 1 番)は尊敬を集める秀才であったし、クラスの上位一桁も確かにひとかどの人物であった。

自分の狭い経験から考えると、成績でいうと全校 1 番(1%)、クラス 1 番(3%)、クラス上位一桁(9%)、普通(81%)、それ以外(6%)という構図がイメージしやすい。この割合を示す数字はマーケティング活動の中で手にした数字を援用している。

時代の変化の兆候にいち早く気づき果敢に発言してきたのは全校 1 番レベルのひとであった。この人々はリアル世界や活躍している人々だ。

次のクラスで 1 番というグループは比較的早い時点でその兆候に反応でき、発言する機会もたまにあるという層だ。クラス一桁の人は時代の変化の流れを具体的な場面でつくりだす役割を担ってきた。

ウェブ時代でいち早く頭角を現したのはこのクラス 1 番の層(3%)であり、それに続いてクラス上位一桁の層(9%)が発言を始めたということかも知れない。そう考えるとこの中間層にも二つのグループがあり、前者が引っ張り、多数の後者のグループの参加によってネットの世界が豊かになってきつつあるということになるかもしれない。

この二つの層を「知的中間層」と呼んでみたい。知的中間層についてはまだ分析が必要だろうが、知的中間層の厚みがウェブ時代を切り開く鍵になるということは間違いない。

谷口正和「時間単位の市場戦略」(講談社)

マーケティングコンサルタントの谷口正和さんから本を送ってもらったので読んでみた。

ある問題意識を持ちながら読んでみて、引っかかったフレーズを並べてみる。

それ以外にも脳を刺激するキーワードが満載である。

・ 発表の場は、ギャラリーであり、ミュージアムであり、ショップであり、ステージであり、

お祭りであり、コンベンションである。コンテストとアワードの時代。

- ・ 募集と発表を内包したカーニバルのしかけ
- ・ クラブメンバーに対してテーマとカレンダーを提示し、それに共感した人に参加してもらう仲間募集型、仲間参加型マーケティング。先行メニューの提示による予約。
- ・ 町人文化は江戸の文化文政時代(1804-1829年)に爛熟した。
- ・ 時間資本主義(タイム・キャピタリズム)の時代。
- ・ きっかけと仲間
- ・ モチベーションによって時間の質が変わる
- ・ 素敵な舞台に立てば、だれでもおのずとモチベーションが上がる

体験、学習、二十四節気、ご当時、時間のショートカットとリダンダンシー、シーズン、継続性の価値、時間の濃淡・緩急・粗密、大事なことは時間をもっと短くすること、経験時間を買う、時間革命、生涯時間割、生活文化カレンダー、センチュリアン3万人時代、テーマ・イン・テーマ、方法論としての健康法、クリエイターとコレクター、体験学習が最大の学習市場、伝承に値する存在、限定に値する独自性、地球時間、命の旅人、旧暦時間の持つ生命とのリンク、ライフスタイル発想、ビジュアル・コミュニケーションの時代、、、。

玄侑宗久「龍の棲む家」(文芸春秋)

「龍の棲む家」(文芸春秋)は、妻に先立たれた呆け老人の次男・幹夫の介護の日々を描いた小説である。

出てくるのは、父と自分と兄、そして介護士の佳代子だけ。幹夫の母、兄嫁などは思い出という形で登場する。「呆ける」ということを悲しみと共感を持って眺め、それに付き合っていくながら、父を深く理解していく幹夫の心理を著者は淡々と描いていく。

呆けた父は龍となって天候を自在に変化させる。この龍との付き合いの中で、幹夫には同志、というより導き手である佳代子の存在が重みを増してくる。二人はやがて自然に結ばれるが、不安定の安定を感じた幹夫はそのあたりから社会と断絶した生活に気がつき、数人の飲み友だちへに手紙を書きたくなる。

人気の芥川賞作家・玄侑宗久の小説は、受賞作「中陰の花」を手にとったことはあるが、最後まで読みきらなかった。僧侶が仏教の教えに疑問を抱いていくという物語だったと記憶している。

「龍の棲む家」は、新聞の書評で取り上げられていたので読んでみた。「呆け」という主題を扱った小説であるが、それを巡る心理描写に感心したが、心理面の介護について教えられること多かった。

いつも本を読むときは黄色のマーカーで線を引きながら読んでいたが、この小説も同じやり方で読んでみた。以下がそのしるしをつけた部分である。

介護の思想のようなものに興味を覚えたが、一方で人間の記憶のあいまいさ、記憶のおもちゃ箱、心の葛藤と表に出る言動との関係、幸せのかたち、家族の絆のしなやかさなどについて、静かに考える時間をもらった感じがする。

- ・ 徘徊と散歩は紙一重だ。
- ・ とにかくさからわず、怒らせず、ひたすら寄り添う、、、。
- ・ 寄り添うことの第一歩は心をこめて聴くことだ
- ・ 過去はそれほどばらばらなものなのか、、。また「今」というのは、箱の縁ほど危ういものなのか、、、、。
- ・ 近づいて「つらいね、悲しいね」と声をかけ、父の背中を手でさすった。
- ・ 症状ではなく、表現と見ることが大切なのだ。
- ・ 徘徊はやはり不安なのだをつくづく思い知った。
- ・ 手と脳は繋がっているし、いい訓練なんですよ
- ・ 人間は直立歩行して、手を使う余裕ができたから、頭が発達したんでしょ。
- ・ 老人にとって一番怖いのは便秘と微熱と脱水症状だ
- ・ 問題を深刻にしないあめには、会話の技術、というより、自在な思考と会話が両方そろわなくてはいけないのだ。
- ・ 無意識の負担感を、無意識に逆転させたいのだ、「負担をかけている人を、加害者だと考えると、わかりやすいかもしれません」
- ・ 介護の思想
- ・ 泥棒呼ばわりされるのはいつだって真面目に仕事をする介護士や寮母さんばかりなのだという。
- ・ 「どうして人は、呆けるんでしょうね」「今の自分が、自分らしいと思えないからでしょう」
- ・ 「いろんな人が父の中では死んだり生き返ったりするんですね。」
- ・ 今やその顔は、よく平家の公達の亡霊などに使われる「中将」の面のようだった
- ・ 父の無意識には敗北感ともいえるほどの圧迫を与えつづけていたのではないか、、。
- ・ 幹夫は父のなかに龍が棲んでいるのだと思った。あらゆる天候を支配し、台風や雷も自在に起こす龍、、、、。
- ・ 子どものころにも叶わなかった自分、生きられなかった生が、ここに現れているということか、、。

2008 年

阿川弘之「大人の見識」(新潮新書)

阿川弘之「大人の見識」(新潮新書)は、オビによると「軽躁なる日本人へ 急ぎの用

はゆっくりと 理詰めで人を責めるな 静かに過ごすことを習え、、「作家生活六十年の見聞を温め、人生の叡智を知る。信玄の遺訓と和魂・国家の品位・幸福であるための条件・ユーモアとは何か・大人の文学・われ愚人を愛す・ノブレス・オビリージュ・精神のフレキシビリティ・ポリュビオスの言葉・自由と規律・温故知新」となっている。

1920年(大正7年)9生まれの阿川弘之は東大国文科を繰り上げ卒業し、海軍に入り中国で終戦を迎える。戦後、志賀直哉に師事し海軍をテーマとした名作を数多く発表し、99年には文化勲章を受章している。

最近では、文藝春秋の比較的長い随筆のコラムを書き続けており、文春を開く時にはコラムを読むことが多い。

今回の「語りおろし」の本は、大人の見識を持った人々のエピソードで、テーマを洒脱に語っていて共感する部分も多い。

まだビジネスマンだった40歳頃のこと、この阿川先生にお目にかかったことがある。広報の責任者をしていたときに、頼んだ原稿の件で、部下の対応に問題があつて謝りにご自宅に伺った。ご本人も自ら「瞬間湯沸かし器という綽名をもらっている」とこの本の冒頭の「老人の不見識---序に代えて」で述べているように、怒りっぽいことは知られていた。

電話でアポイントをとろうとしたら、体調を崩されて入院から戻ってこられたばかりだったことがわかったので、まずお見舞いの花束を贈っておいた。そして数日後、約束の時間の5分前にご自宅の呼び鈴を押した。阿川先生の本では海軍の習慣である「五分前の精神」のことを書いておられたので、私もこれにならった。応接間でお詫びを申し上げて、先生の本の話題をする中で、五分前の精神のことを話題にしながら、日本海軍について話していたら、「あなた海軍ですか？」と嬉しそうに言われて驚いた。「いえ、私はそんな年ではありません」と答えて大笑いになった。前の職場で人事関係の仕事をしていたので、海軍の人事制度の勉強をしていたのが役に立った。

その後、会社の創立記念の論文募集の審査委員長をお願いしたが、このときは、担当課長である私の意見と社長の意見が食い違っておかしな雰囲気になったが、阿川先生にうまくおさめてもらった記憶がある。

その後、アメリカに居た長男の阿川尚之さんから電話をもらって何かを頼まれたことがある。尚之さんは1951年生まれで、ジョージタウン大学ロースクールを卒業した弁護士だった。「アメリカが嫌いですか」という本を書いて話題になり、慶応義塾大学の教授、その後は日本政府のアメリカ公使を引き受け、「憲法で読むアメリカ史」で2005年度の読売・吉野作造賞を受賞している。今は慶応の総合政策学部長。

長女の佐和子さんはエッセイストとして大活躍していて、同世代の独身の壇ふみとのやり取りの本も面白い。

仙台で阿川先生の末っ子(三男)に出会ったことがある。この本では高校一年生になったときに「五分間論語」を強制されている。晩飯の前の五分間、親子差し向いで論

語の素読をするという趣向だったが、お互いに忙しくなって途中で終わっていて、阿川先生は「惜しかった」と悔やんでいる。この末っ子は私の勤務していた会社に入って一時仙台支店にいた。まだ20代半ばの青年だったが、阿川先生のご自宅を訪問した時のことを話題にして一緒に飲んだことがある。阿川家は文才があることは明らかなので、そろそろ世の中に出てくるかもしれない。

「大人の見識」を読みながら、そういう懐かしい思い出がよみがえってきた。新書の和服を着た著者近影を見るとまだまだお元気の様子だ。味わいのあるエッセイやこの本のような語りおろしというスタイルを使って、私たち若い者を論じていただきたいものである。

勝間和代「効率が10倍アップする 新・知的生産術--自分をグーグル化する方法」

著者の勝間和代さん(38歳)は、物心がついた時からIT機器を使ってきた第一世代の旗手である。

中学1年生だった26年前にパソコンを買ってもらった。1980年を少し過ぎたあたりで中学生になったということは、1975年頃から始まるIT時代の黎明期から今日まで四半世紀をパソコンとともに過ごした世代である。だから旧タイプの本の世界を前提にしながらもIT機器を空気のように使いこなすことができる。その仕事術(最近ハックスというらしい)を公開したのがこの本である。

仕事というものは、具体的な問題を解決するために情報を収集し、整理・加工し、新たな情報として解決策を生み出し、実行するというサイクルで回っているのは、今も昔も変わらない。IT時代以前は、著名な学者や売れっ子評論家、切れ味の鋭い新聞記者などの知的生産者が本というメディアで情報の問題を扱った。その後、情報機器を使いこなす知的生産者が登場してきたが、一段と高いIT技術力で登場しつつある最初の世代がこの世代である。

一流の経営コンサルタント会社で働いた経験を持ち、「世界の最も注目すべき女性50人」、「エイボン女性大賞」を受賞するなど社会的に優れた仕事をしつつ、子ども3人を育てている最中であることが、著者の主張に強い説得力を与えている。

空中戦や地上という現代の情報戦を戦うための武器が凄い。巻頭と巻末に情報武装した著者の姿があり、性能の高い武器の数々が紹介されている。

スポーツ自転車、GPSつき携帯ナビ、SPD専用ペダル。これで都内を毎日走り回っているようだ。こういうプロ用の自転車は、調べてみると男性用では30万から90万円する。

小型パソコン、デジカメ、ICレコーダー、オーディオプレイヤー、ウォークマン、ドキュメントスキャナ、快眠プログラムマット、カラダスキャン、万歩計、心拍数を管理できる腕時計、ストレッチ用CD、、、。

GPSつき携帯は46,800円、ドキュメントスキャナは42,290円、快眠マットは262,500

円、、と調べていると、武器を揃えるにはお金がかかることを痛感する。しかしこういう武器で戦う成果は大きいから投資効率は高い。

こういうハードの形をした武器は、無限の広がりと深さを持つ使い勝手のいいソフトにつながっていて、仕事の効率は総合的に高まっていく。

Gメール、Firefox、SNS、マピオン、名刺 OCR ソフト、Paperport、アマゾンプライム、オーディオブック、iPod、フォトリディング、親指シフトキー、マインドマップ、、、。

現在使っているものがあるが、今回初めて知ったハードやソフトも多い。

著者は本のサブタイトルに「自分をグーグル化する方法」とあるように、徹底した情報戦の優れたサイバー兵士であるという印象を持った。

今日よりは明日をよりよく生き、貴重な人生の経営資源をである時間を大切に、目の前の仕事を高いレベルで大量にこなしながら、自分を高めていく姿はさわやかだ。

この本で紹介されている機器やソフトは実践で使えることが証明されているので、使ってみよう。今後は著者に代表されるフロントランナーたちの思考、行動、ライフスタイルなども学び、吸収して自分なりの独自のスタイルを築いていきたいものだ。

浅田次郎 「蒼穹の昴」 (講談社文庫)

人気作家・浅田次郎の本は今まで読んでいなかった。

中国史関係の本にはずっと興味はあったのだが、正月の読み物として講談社文庫「蒼穹の昴」全4冊を本日読み終わった。1996年の作品を文庫化したものだ。

清朝末期の中国を描いた壮大な作品で、時代は九代文宗帝の側室であった、傑物・西太后の絶頂期にあたる。

李春雲。河北省静海県の貧農の子から宦官としての最高位にまで出世する。

梁文秀。同じく静海県の地主の次男。遊び人だが科挙を受験し、挙人、進人と進み、状元という第一等の成績をおさめ文人官僚として活躍する。最後は志敗れて日本に亡命する。

西太后。三代にわたり政(まつりごと)を行う晩清の女傑。この小説では国を閉ざすという宿命を背負った人物として描かれている。

李鴻章。科挙出身の優れた漢人将軍。日清戦争時の下関講和条約の立役者。

李蓮英。高位の宦官。西太后の寵臣。

白太太。タルタンの占星術師。李春雲と梁文秀の二人の数奇な運命を予言する。

以上が主要な登場人物だが、六代高宗乾隆帝、十一代光緒帝、曹国藩、袁世凱、楊喜チェン、康有為、毛沢東などの中国史を飾る人物や、宣教師で絵師のカスチョリ一ネ(郎世寧)、そして伊藤博文、黒岩涙香、柴五郎、などの日本人も登場する。

中国の歴史は複雑怪奇でなかなか頭に入らないが、浅田次郎が小説で描く中国史は抵抗感なく読めるのがいい。満州族の建てた清国の末期の様子が、庶民の暮らしから紫禁城での権力闘争までよく描かれている。「珍妃の井戸」「日輪の遺産」など一

連の中国ものも引き続き読んでいきたい。

石川九楊 「縦に書け！ 横書きが日本人を壊している」(祥伝社)

書家としての石川九楊(昭和 20 年生まれ)の名は知っている。独特の考え方をする異才である。

佐賀で見た明治の元勳・副島種臣の抽象画のような書や、函館を訪ねたときの鷗亭という書家の記念室などで書を見て、「書」という分野に関心を持ったことがある。

石川九楊は、インターネット時代の今日に、横書きが主流となりつつある潮流に敢然と立ち向かう議論を展開している。奔流となって席卷する IT 時代への日本人、日本文明からの反論の書である。

古来、「天」から「地」へ向かう重力と格闘しつつ、縦に文字を書き、言葉を紡ぐことによって日本人の精神は醸成されてきた。日本語を横書きにすることは、英語を縦に綴るのと同じ「愚」である。だが、その愚行が世を席卷したいま、日本人の精神は荒み、崩れつつある。その最大の犠牲者は、言葉習得途上の子どもたちである。ネット社会に狙い撃ちにされる彼らは、日々見えない血を流している。

文化的な意味では人間は言葉であるから、日本とは日本語を指す。この日本語が乱れているのが日本人が。特に子どもたちが崩れている真の原因である。

縦書きでは紙に文字を書く場合、天から地に向けて書くから、全体の中の個を意識しながら書くから、常に適正な自己の位置を確認することができるようになる。

「書く」と「打つ」では脳の使い方に大きな違いがある。「打つ」のは分裂的、否定的に働き、「書く」のは統合的、肯定的に作用する。「秋」と書く場合は春や紅葉を思い浮かべながら書くが、akiとローマ字入力すると分裂し、「空き」がでると否定的に働く。

日本語は、漢字、片仮名、平仮名という三種類の文字を使い分けながら、外来語を取り入れてきた。日本語は書き言葉(文)を中心とする言語であり、アルファベットを使う言葉は、話し言葉(言)を中心とする言葉であり成り立ちが違う。

日本語、特にひらがなは横に書くようにつくられてはいない。

縦書きは、歴史や社会とともにある自分という形の文体が多く、横書きでは「私」を中心とした文体になる傾向がある。横書きは、です・ます調になる傾向があり、縦書きは、だった・と思う調の文体になる傾向がある。

縦書きは理論的で、筋道立てて考えるようになり、横書きは経験的、具体的な題材が多く、身辺雑記的な文章になる。

人間は手である。

石川九楊は、この本の中で「私自身は、インターネットはもちろんのこと、パソコンを手にしな」と述べているが、書という独自の視点からの主張にはうなづける点も多い。

今後、「日本人とは何か」というテーマが強く意識される時代になっていくと思うが、「書」の観点からの石川九楊の発言も重みを持つようになるのではないか。

波頭亮 「就活の法則―適職探しと会社選びの10ヶ条」(講談社)

日本には200万の会社がある。

この中から自分にもっともあった一社を選ぶことはできるのだろうか？

3割以上の新入社員が3年以内で辞めてしまうのは、企業も学生も失敗したということだ。

辞めたいと迷っている者もいるから、新卒者の過半は就職活動に失敗したことになる。

著者は、それは市場の失敗と断定する。

1千億円以上のコストをかけた企業側と、3年生の後半からという大事な時期を就活に費やす学生と、そして就職関連企業と、三者の失敗である。

正しい情報の提供がなく、相互の信頼関係もなく、フェアな仲介機能も存在しないのが、現在の就職活動市場である。

経営コンサルタントの著者は、問題点も解決提案も歯切れよく箇条書きと数字で明示するのが特徴である。

適職選びの条件

1. 自分がやりたいこと
2. 自分ができること
3. 社会で求められていること

この3つが重なった仕事(会社)が適職である。

どのような会社でも優秀な社員は、能力と処遇がどんどん向上していく好循環になっているから、3割の相対エリートのパポジションを狙え。

起業の将来性を見る3つの観点

1. インテリジェンス:テクノロジーやノウハウで秀でた強さを有しているか
2. 規制:現在、規制の恩恵を受けている分野や企業は外せ
3. グローバル:小国化時代は世界市場で勝ち抜くしか道はない

ワーキングスタイルで選べ

- ・人気ランキングより業種と業界で選べ

面接官は3つの話題でウンザリしている。

- ・アルバイト・クラブ活動、ボランティア

## 合格者像

1. 明るく、謙虚で、落ち着いている
2. 野心があり、負けず嫌いなこと
3. 賢い上に、努力家であること

そして、入社してからの心構えにも言及する。

- ・ 社内で一目かれる存在になるために、一切文句を言わず、全力を挙げて、仕事をこなせ
- ・ 「努力する能力」が貴重
- ・ 5年間は転職しな決意で働け

就職活動は、真面目に、そして賢くやれ。

最後に、就活の法則10ヶ条。

1. 「タテ軸指向」からの脱却すること
2. 「相対エリート」のポジションを狙う
3. 現在の人気ランキングは逆に読む
4. 「ランキングよりも業種」「業種よりも職種」で選ぶ
5. HPもOBも本当のことは語らない
6. 受けるのは5社で十分
7. 「当たり前のこと」は言わない
8. 人の評価は、10人中8人は同じである
9. 「入社後の就活」はハードワーキングである
10. 入社後5年間は転職しない

著者の主張には同感と共感する点が多く、学生の必読書とであると推薦したいが、いくつか疑問点もある。

就職活動はあらゆる業界の実態を知る願ってもない機会であるから、できるだけ受けてみることを私は勧めている。また面接も練習が必要であり、いくつもりがなくても実地の面接ほど教訓やヒントが得られる場はない。だから、どんどん落ちよ。たくさん経験をすると自然に「受かるようになる。これが私の指導法だ。

また、論理的にもっともあった企業に入社する方法などは本当はないのではないかと。ある程度の考え方と方法を身につけたら、後は「運と縁」に身を任せることも必要だ。

著者の主張で特に共感するのは、入社後の2回目の配属を希望に沿うようにするための秘訣はハードワークであること、そして5年間は転職をすべきではない、ということ

ろだ。

3年といたいところだが、5年という方が心構えがしっかりできていい。  
仕事を甘くみてはいけない。

梅田望夫「ウェブ時代 5つの定理」(文藝春秋)

「ウェブ時代 5つの定理」(梅田望夫)を入手しざっと読んだ。

シリコンバレーでビジョナリーと呼ばれている影響力の強い天才たちの発する切れ味のよい言葉に接し、その意味を考える。これが梅田望夫が渡米以来16年間続けてきた勉強法だった。

このビジョナリーたちは、アップル、グーグルなどIT産業の旗手やそれを育てる目利きの投資家、天才的技術者たちである。本を読み、人と会い、インターネット上の情報を丹念に読む中で、梅田は新しい世界を築きつつある人々の世界観をあらゆる言葉を膨大に収集した。

人が感銘を受ける言葉はその人を表している。

この本の中で、私自身が感銘を受けたり共感した言葉をいくつかあげてみたい。

- ・ パラノイア(病的なまでの心配性)だけが生き残る、---アンディ・グローブ
- ・ 世界がどう発展するかを観察できる職につきなさい。---ロジャー・マクナミー
- ・ 好きな人と働かなければならない。---ロジャー・マクナミー
- ・ Aクラスの人、Aクラスの人と一緒に仕事をしたが、  
Bクラスの人、Cクラスの人を採用したが、-----シリコンバレーの格言
- ・ 政治的になるな、データを使え。---マリッサ・メイヤー(グーグルの女性副社長)
- ・ グーグルでの採用のポイント  
地頭がいいこと、実績があること、コミュニケーション能力、ゲーグリネスがあること
- ・ 「ニューノーマル」時代における成功とは、タイムマネジメントに尽きる。
- ・ この時代における通貨は、時間なのである。---ロジャー・マクナミー
- ・ 君たちの時間は限られている。
- ・ その時間を、他の誰かの人生を生きることで無駄遣いしてはいけない。
- ・ ドグマにとらわれてはいけない。
- ・ それでは他人の思考の結果とともに生きることになる。
- ・ 他人の意見の雑音で、自分の内なる声を掻き消してはいけない。
- ・ 最も重要なことは、君たちの心や直感に従う勇気を持つことだ。
- ・ 心や直感、君たちが本当になりたいものが何かを、  
もうどうの昔に知っているものだ。
- ・ だからそれ以外のことは全て二の次でいい。---スティーブ・ジョブズ

- ・ 自分がやらない限り世に起こらないことを私はやる。----ビル・ジョイ
- ・ 私自身もこれからは本書を座右に置き、歳を重ねるごとに押し寄せてくる「守りに入る誘惑」に抗していきたいと思っています。----梅田望夫

以上が私の心の琴線に触れた言葉だ。

ホームページをつくった 1999 年あたりから、心に沁みる格言を少しづつ集めてきた。いずれ365まで収集し、「今日の格言」として自分自身を励まそうという意図だった。

現在では 400 を越えるまでになったが、この格言集を眺めると自分がどんな人間かがよく見えてくる。私の場合は、本で刺激を受けた言葉、過去の日本の偉人の残した言葉などが中心となっている。こういった作業は、本物の日本人の魂に迫っているという感覚がある。

梅田望夫の場合は、世界の最先端に立つシリコンバレーで、新大陸を切り拓いている革命家たちの頭と心の中を覗く言葉をさがしてきたから、私たちはこの最先端で格闘する人たちのエネルギーや獲得した地平を垣間見ることができる。

毎日の勉強は、IT世界という新大陸の建国の精神を理解しようとする作業なのだった。

斉藤孝・梅田望夫 「私塾のすすめ ―ここから創造が生まれる」 (ちくま新書)

梅田望夫の対談本の第3冊目は、同じ1960年生まれの斉藤孝との対談である。このブログで何回かに分けて、感想をしるしていきたい。

私は3年以上にわたって「人物記念館の旅」を続けている。対象となる偉人は明治・大正・昭和という近代から現代の時代をメインと定めているのだが、結果として圧倒的に明治時代の偉人が多いことに気づく。

斉藤孝も梅田望夫も明治時代に関心が高い。イギリス社会の成り立ちを知ろうとすればビクトリア時代を調べると実りが多いように、どのような国であれその国の最盛期にいたる過程で社会の骨格がつけられるから、近代日本の場合は明治に着目するのは自然なことなのだろう。

偉人伝の読み方として斉藤孝は「その人が、どういうふうに通じたのか」をポイントとしている。梅田望夫も「学び続けることの大切さ」に行き着いている。学び方が人の将来を決めるということなのだろう。長くビジネスマンの勉強会である知的生産の技術研究会という装置を持って各界で一流の実績を挙げた人の話を随分と聞き続けてきたが、その人物が到達した世界そのものよりも、どのように通じたのかという姿勢や方法に着目してきた。どのように彼らは通じたのか、その方法や技術に関心があった。

私淑、縁、志、、、。こういったやや古い言葉が対談で出てくるが、私の「人物記念館の旅」においても修養、鍛錬、研鑽という時代遅れと思われる言葉が浮かび上がってくることを経験している。

明治を創った人々を育んだ私塾という世界は、学びの中で人物を磨いていくという側面を持っている。世界的人格ができて初めて世界的絵が描けるといった横山大観などにみられるように絵画、音楽、実業などあらゆる世界でそういう人格主義の空気が日本にはある。吉田松陰の松下村塾(萩)、広瀬淡窓の咸宜園(日田)、亀井南暎・昭陽父子の甘とう館(福岡)といった塾を訪ねてみると、私淑、縁、志、修養、鍛錬、研鑽という一連の言葉に深く納得する。

過去の偉人伝に加えて情報技術の爆発の時代に生きる私たちはウェブという武器を手に行っている。ここには同時代を疾走する優れた人たちの事跡やそこから産み出される珠玉の言葉が無造作に置かれている。ほんの少しの努力で時代のフロントランナーたちからオーラをもらうことができる時代になった。

斉藤孝は、ポレオン、嘉納治五郎、ゲーテという歴史上の人物をロールモデルとしてあげているが、梅田は同時代を生きている人の名前を挙げている。そのうち二人は、生き方という意味でのライフモデルとして今北純一、生活という意味でのライフモデルとして村上春樹である。私は今北さんとはあるグループの仲間であるし、村上さんともある仕事で一緒したことがあるが、本やウェブから醸し出される梅田望夫の人柄と通じるものがあるように感じている。ロールモデルとして選ぶということは、その人のライフスタイルやワークスタイルに共鳴しているということだろう。

ワークライフバランスという言葉がある。ワークとライフのバランスの回復を図ろうという趣旨だが、この二つは対立的な概念ではない。ライフの中にある重みを持ってワークが存在してるはずだ。

斉藤孝は教育という現場と書物から学び、それを講義と執筆に生かす。梅田望夫はコンサルタントという現場とウェブから学び、それをウェブによる情報発信と執筆に生かす。どちらも自らの信じる現場を大切にしながら書物とウェブという異なる武器を駆使しながら大きくなっていくという学びと成長のサイクルの中にある。

「オープンにしながら、雰囲気をよくしていくということに、新しいリーダーシップの要諦がある」と梅田はウェブ時代のリーダー像を語っている。情報をわかりやすく提示し、関係者の持つ情報を吸収し、全員で合意を形成していくやり方が今後のリーダーのあり方だと思う。ウェブに限らず、現実の仕事の場面においてもそういう空気を醸し出せるやわらかなリーダーシップが求められている。

斉藤孝は、訴えかける対象はゼロから百歳までと言い、日本人全員を相手にしている。みんな必ず伸びるという信念のもと、学校教育と著作を通じて日本人全体の底上げに使命感を持って取り組んでいる。これに対し梅田は、上を伸ばすことに興味があるから、発信する対象は比較的狭い。「打てば響く子」「目を輝かせている子」を世界レベルにまで引き上げることに関心を寄せている。日本の学校教育に期待はまったくない。大学というビジネスモデルはすでに終わっていると確信しており、世界を切り拓くリーディングエッジを育てることが大事だと考えている。

齊藤孝は1997年から2007年の11年間で263冊の著書を刊行しており、ピーク時の2005年には67冊を世に問うている。対象読者年代別、分野別にしたりして、バリエーションを増やし全世代に伝え切ろうとしている齊藤の使命感を感じる仕事量である。発散という回転に入ったからこの流れはしばらく続くだろう。対して梅田望夫は共著も含めて6冊という寡作のスタイルを貫いている。じっくりと納得のいく仕事を積み上げていく。

同い年であるが、不思議なことに齊藤孝はネット世界に住んでいない。舌禍事件を起こすのではないかと、ネットで炎上が起きるのではないかと恐れており、念のいったことに読者からのはがきは批判的なものは事前に編集部にカットしておいてもらうなど、自分に対する批判を聞きたくないところがある。梅田は「ブログに書いたものを一回ミキサーにかけて、完全にどろどろになったものを、本の素材とする。発展途上の思考をブログで出し、膨大なフィードバックを受けて、自分の思考を練っていく。最後に本の形にする」という梅田は、賛否両論のあるネット上の感想は忍耐強く全て読んでいる。ここに新しさと独自性を感じる。

今回の対談においても性格、気質というものが考え方に大きく影響を与えていると感じた。やや懐疑的な体質を持つ小説家・平野啓一郎、エネルギッシュな行動家・茂木健一郎、そして膨大な仕事を情熱を込めてこなし続ける学者・齊藤孝。こういった人たちとの対談で梅田望夫の考え方、情報や世界との付き合い方が滲み出てくる。成功、喝采、業績という言葉に強く反応する齊藤孝に対し、梅田望夫は、考え深く慎み深くそして丁寧な議論に参加している。こういう態度も若い人たちから支持を得ている要因の一つだろう。

村上春樹の出現によって村上龍は短編よりも長編を書くことに存在価値があると感じて仕事の方向を定めていったように、こうした対談を通じて相手との比較の中で特質が際立ってくるから、互いの仕事の方向にも微妙に影響を与えるだろう。

この対談でもわかることだが、独特の生活からしか独創は生まれないと思う。

齊藤孝と梅田望夫という同年の現代のカリスマは、それぞれ世の中に大量の信奉者があり、集まってくる情報の量と質が高くなっているから、すでに見晴らしのよい峰の頂にいる。そしてその高みから見える風景のあり様を発信しているが、二人が見ている景色は微妙に違う。見えている世界が違うから「志」の中身も違ってくることになる。

齊藤孝は「深海魚」である。深海魚と出会えるくらいに深くもぐらなくては、物事は身につかない、もぐるまでの期間の手前で浮かび上がっている人が多いと指摘する。深いところに生息しているから誰にも見えないものが見える視力を持っているのだろう。深海魚は水圧に耐える力が必要だ。新渡戸稲造が「井を掘りて今一尺で出る水をほらずに出ぬといふ人ぞう(憂)き」という言葉とダブる。

一方の梅田望夫は炭鉱の「カナリア」であると自分の役割を認識している。いちばん

先頭に行って何かを感じ、察知する役目だ。カナリアは先頭にいるので常に危険と背中合わせだが、その声には誰もが耳を傾ける。特に未来の暗闇を覗こうとしている人には響く。

二人の特徴をやや戯画化しながら以下に挙げてみる。

役割: 教える人(斉藤)と育てる人(梅田)

志: 現在を変えるという志(斉藤)と未来を創るという志(梅田)

住んでいる世界: リアル(斉藤)とネット(梅田)

武器: 三色ボールペン(斉藤)とウェブ技術(梅田)

照射する対象: 過去(斉藤)と現在(梅田)

大衆と群衆: 大衆を指導する(斉藤)と群衆とともに歩む(梅田)

人物判定: 履歴書(斉藤)とブログ(梅田)

生活スタイル: 柔軟路線(斉藤)と原則主義(梅田)

桐野夏生 「東京島」 (新潮社)

桐野夏生の「東京島」を読んだ。

「夫を決める籤引きは、コウキョで行われることになっていた。清子はいつもより早起きしてオバイダへ下りた。黒い小石に覆われた入り江は南洋とは思えず、いつ見ても陰鬱だ。」という書き出しで一気に引き込まれていく。

31 人の男と一人の女が漂着した無人島での日本人の共同生活、ひと組の中年夫婦とフリータの若者たち、そして途中で現れる中国人集団という設定で、小さな島の中で起こる事件と人々の葛藤、原始生活と絶望の中で噴出する人間の本性、危ういバランスの喪失と異なった形での回復、女と男の複雑で非情な物語。

こういった設定の中で、現代日本に対する醒めた観察と痛切な皮肉が随所にみられ、また描かれる欲望丸出しの人間の愚かしさという本質に迫る著者の構想力と豊かな想像力とすぐれた筆力に感嘆しながら最後まで一気に読み終えた。

役割分担と能力と興味による神官や職人など職業成立の事情と過程、失敗を重ね犠牲者を何人も出しながら希少価値のある女性を共有する方法の開発、ジューク、ブクロ、チョウフ、そしてカスカベなど旧知の名前をつけることによるアイデンティティの防衛、一人の克明な日記という記録から始まる島の歴史の誕生、食べ物に対する異常なほど詳細な記憶と発狂寸前にまで高まる食欲のすさまじさ、あからまさになる男たちの性欲と戦いと女の変貌、生命力豊かな中国人と文化度の高い日本人の危機対処の弱さの露呈が示す微妙な国際関係、王朝の成立の秘密と後継者の役割認識と歴史の継承の原型、。。。。。

主役の40代の清子は、絶望的な原始生活を女という武器を携えて状況を有利に導きながら利己的に、そしてしたたかに生き抜いていく。思いがけなく訪れる妊娠という厳粛な事実との遭遇では、誰の子かわからない状況を逆手にとって最後までサバイバ

ルしていく姿はあさましくかつ感動的でさえある。

「東京島」は、人間が集まって形成している社会というものの本質を見せつけられる優れた小説である。

1951年生まれの著者は、10年前の1998年に「OUT」で日本推理作家協会賞を受けてブレイクスルーする。以後、「グロテスク」、「残虐記」、「魂萌え」などの傑作を書く。話題になった「魂萌え」は数年前に読んで達者な作家だと感じたことがあるが、今回は二冊目だ。この作家のいくつかの代表作は読んでおきたい。

望月実 「問題は『数字センス』で8割解決する」(技術評論社)

会計の本は読んでいないが、NPO法人知的生産の技術研究会の会合で最近会うようになった30代半ばの若い公認会計士の望月実さんから著書をいただいたので読んでみた。

「問題は『数字センス』で8割解決する」(技術評論社)という本で、オビには「数字のプロ・公認会計士ならではの、数字を味方にして問題を解決する力が誰でも身につく」、「数字から問題を発見し、数字をベースに解決策を考え、数字を使って相手の納得を勝ち取る」、「読む、考える、伝える」3つの力で数字を仲良くなるのがキャリアアップの近道！」とある。

著者のスタンスは会計を学ぶというより、問題解決のために道具としての数字を学ぼうということだ。

第1章は、数字を「読む」力をつける。第2章は、数字で「考える」力をつける、第3章は、数字で「伝える」力をつけるという三部構成だになっている。

「社会人に求められるのは『現実世界の問題を解く力』です。」「問題を見つけるために大切なのは、現実を正しく見るということです。とはいえ、現実世界は複雑な要素によって構成されているため、なかなか本当の姿は見えてきません。そこで、数字を使って違う角度から見ると今まで気づかなかったことが見えてきます。」というのが著者の主張である。

具体例をもとにやさしく流れるように解説していくので読みやすく、短い時間で読み終えることができた。フロー、テストマーケティング、そしてスケジューリングやプレゼンのコツなどがなどがわかりやすく書いてある。こういう書き方なら若いビジネスマンも抵抗なくこういった世界に入っていくことができると思った。最近、若い会計士たちの書く本がよく売れているらしいが、彼らは同じように説明力に優れているのだろうと推察する。

この本のユニークさは、「読む」「考える」「伝える」というように構成したことだ。知的生産や仕事については「読み、考え、書く」という流れや「理解、企画、伝達」という流れがあると思うが、これを著者は「数字」という武器で解いていこうとしている。仕事という問題解決の山を数字というルートから登ろうするのが著者の志である。

確かに「数字」には現実の姿を一気に理解させる力がある。30歳を過ぎたころ会社全体の中で問題部門と言われていた大きな組織に配属されたことがある。複雑怪奇で魔物のような組織の実態はなかなかつかめず、群盲象をなでる状況だった。そのときに「データに見る〇〇」という私家版のメディアを勝手に発行したことがある。仕事でまわってくる数字、組合の出す情宣物の中の数字、など日常目につく数字をベースに部門を見ていこうという考えだったが、常に新しい視点や切り口や、そして解決策を提示できたと思う。数字を用いて、現実を読み、問題解決策を考え、それを同僚に伝えて、全員で実行していく、こういうことだったから、著者のいう「数字センス」の意味はよく理解できる。

独自の視点を持ち、信じる武器を用いて「仕事」を論じるのがビジネス書であるといってもよいと思うが、現実世界を読み、それをもとに自ら考え、解決策を上手に伝えて、実行していく、そういう流れは同じだから、読者はそれぞれの著者の体系や世界から自分に役に立つヒントやコツを手にすることができる。そしてその中核は「考える」というところにある。

性能の高い武器を持ち、その武器で独自の考えを育み、ゆるぎない世界を持つことが一番大切なことだが、その上で自らの体系をさらに進化させるためにも「数字」に関心を持つことが必要である。

浅沼ヒロシ 「泣いて笑ってホッとして・・・」(メディア・ポート)

ビジネスマンが仕事をしながら一年間で何冊本を読めるだろうか。週2冊のペースで100冊読む人ならかなりの読書家といえるだろう。「泣いて笑ってホッとして」(メディア・ポート)の著者の浅沼ヒロシさんは、このペースで書評ブログを3年以上にわたって書き続けてきて、それが編集者の目にとまり一冊の本に結実した。

600字というコンパクトな内容の紹介、小さい文字、中くらいの文字、大きな文字という3種類の文字を用いてその本のキモとなる言葉を選ぶ手法、2行でその本の本質を表す歯切れの良い言葉、そして各章の命名「笑っちゃう!」「泣いちゃう・・・かも」「ホッとすなあ」「へえー、そうなんだあ」などもよく考え抜かれていて、楽しく優れた本に仕上がっている。

浅沼さんはブログという手段を手にして書評を続けていくことによって、高野登、林文子、北野幸伯、吉岡英幸、松山真之介、久米信行、などの著者と知り合っていく。表現は力だということがよくわかる。世界がひろがる面白さを浅沼さんは知った、後は一直線にこの「ブログ書評道」をまっしぐらに進んでいくことだろう。

「メール道」の久米信行、「早朝起業」の松山真之介、「リッツ・カールトンが大切にサービスを超える瞬間」の高野登、「音の雲」の富田勲、「父生術」の藤原和博、「どうもいたしません」の壇ふみ、「それでいいのか蕎麦打ち男」の残間理江子、「本がなくて生きてはいける」の岸本葉子、「生きる意味」の上田紀行、「白洲次郎 占領を背負っ

た男」の北康利、「無名」の沢木耕太郎、「かもめ食堂」の群ようこ、「踊る大捜査線に学ぶ組織論入門」の金井先生、など知り合いだったり、友人だったり、会っていたり、インターネットの世界で知り合っていたり、書評に取り上げてもらったり、食事をしたり、一緒に旅行したり、飲み仲間だったり、などの人がたくさんいた。

これもビジネスマンとしての仕事、NPO法人知的生産の技術研究会、著書の出版、ブログ、などがきっかけで知り合いになった人たちだ。ここでも何かを続けることによる世界の広がりや改めを感じることになった。

好きな本を読み、ブログに内容を紹介するという行為は誰でもできそうだが、3年という期間没頭し、継続し、面白さを目覚め、そしてそれが本に結実するという過程は、人間としての充実と外部からの評価が形になったという意味で素晴らしいことだ。

「3年」は長いようでもあり短い時間でもある。どのような分野でも10年という壁があり、卒業とか入門とかのレベルに達するといわれているが、まずは3年を身近な目標とするのがいい。

いずれブログで書評をやりたいものだ。

瀬戸内寂聴 「奇縁まんだら」(日本経済新聞出版社)

日本経済新聞に毎週連載していた「奇縁まんだら」という読み物がある。瀬戸内寂聴の筆になる著名作家たちとの交友録で、意外で面白い人間的なエピソードが込められており、読むのを楽しみにしている。この好評連載が一冊の本になった。2007年分だが、今年分は来年に後編として出版される。

21人の登場人物のうち一人を除いて全員が寂聴よりも年上でそれぞれが文壇の大家たちだ。1872年生まれの島崎藤村から1923年生まれの遠藤周作までである。順番に並べてみると、島崎藤村、正宗白鳥、川端康成、三島由紀夫、谷崎潤一郎、佐藤春夫、舟橋聖一、丹羽文雄、稲垣足穂、宇野千代、今東光、松本清張、河盛好蔵、里見弴、荒畑寒村、岡本太郎、壇一雄、平林たい子、平野謙、遠藤周作、水上勉。それぞれが一家をなす歴史的な人物といってもよい人たちだ。

この連載を引き受けるにあって寂聴は、文芸年鑑に載っている作家たちを調べ、口をきいたことがある人の数は400人に達したことを確認している。そのうちから40人強の人を選び一人につき二週にわたってその交友録を書いている。

1922年生まれだから今年で86歳の寂聴は、長かった茫々の歳月で愉しかったことは人との出逢いとおびたしい縁だったと述懐している。長く生きた余徳は、それらの人々の生の肉声を聞き、かざらない表情をじかに見たことだたつという。先にあげた作家たちにこの言葉を当てはめるとそれは愉しい人生だただろと深く納得する。

寂聴は、毎回それぞれの人物の業績、その人と自分との縁、創作の秘密、そして自分の人生行路を重ね合わせながらユーモアたっぷりに健筆をふるっている。また女流作家でもあり、美男の作家たちの容姿をややミーハー的に活写したり、女流作家につ

いても赤裸々にその行状を書くなど、またそれぞれの運命的な、あるいは濃密な男女関係をあたたかい目で観察していて、読んでいて豊かな気分させてくれる。たとえば「惚れ惚れするような美男ぶりであった。鼻筋が通って、、、白鶴のような、すがすがしい姿であった。そこだけ涼しい風が吹いているよに見えた」は島崎藤村の描写である。

「小説家というより、現役の女優のように見えた。、まわりには虹色のオーラが輝き、どの作家たちよりも美しく存在感があった」、豊かな恋愛体験の中でどなたが一番好きでしたかという問いに、「尾崎士郎！、二番目も、三番目も四番目も尾崎士郎！」と言ったのは、宇野千代だ。

これほどの人たちとの親交がなぜできたのだろうか。人懐っこい性格、機敏な駆動力、世話好き、そして本人の言うように美人でないことが警戒心を解き、幸いしたのだろう。また初対面の人には手相を観ることで一気に相手の懐に飛び込んでいくという若いころからの手練も中で明らかにしている。

寂聴は、娘時代に藤村を見て小説家を志し、28歳で小説家になることを決心し、35歳で最初の小さな賞をもらっている。それぞれの節目には必ず、この本であげた作家たちとの縁がある。

寂聴は、大作家たちとの交友、旅行などを楽しみながら、同業の先輩たちの創作の方法や秘密を鋭く観察している。松本清張の講演の見事さは口述筆記の訓練によるものだった。舟橋聖一は63歳で書いた「好きな女の胸飾り」以降、すべての作品は、口述筆記になった。岡本かの子の作品は、夫の一平や同居者の手が入っている。その子の岡本太郎は、書齋を獣のように歩き廻りながら言葉を発し、養女の敏子がペンで口述筆記し、できあがった作品は敏子の名文で整えられ、わかり易く、高尚になっていく。それは合作といってよかったと書いている。そして絵もこの敏子との合作だった様子がわかる。これは岡本家の芸術造りの方法だったという観察である。

51歳で出家のお願いに行ったときの今東光とのやりとりもすさまじい。「頭はどうする？」「剃ります」下半身はどうする？」「断ちます」それだけであった。

今東光からもらった寂聴という法名は「出離者は寂なるか梵音(ぼんのん)を聴く」という意味だそうだ。

寂聴の書くものは、常に人物がその対象になっているようだ。興味ある人物を調べ、取材し、それを評伝という客観的な形ではなく、作者の想像と創造が許される小説という形式に仕上げていく。これが瀬戸内寂聴の小説造りの方法だということもわかった。

自分を中心に縁のあった大きな人物たちが幾重にも取り囲んでいる姿が寂聴の頭の中にあり、それは「まんだら」であり、この本のタイトルとなった。この本を読み切ったあとに感じるのは「奇縁まんだら」というタイトルそのものの内容であるということだ。横尾忠則の人物絵も楽しめる。

人気連続テレビドラマ「家政婦は見た」に通じるところのある瀬戸内寂聴独特の表現が、興味をそそる面もある。連載中になんか読んでいたつもりではあったが、改めて一

冊の本として読み切るとそれぞれの仏たちが複雑に織りなす世界が総体として見えてくる。毎週の連載を楽しみながら、そして後編を読みたいと思う。

北康利 「同行二人 松下幸之助と歩む旅」 (PHP 研究所)

「経営の神様」と呼ばれ、日経新聞の私の履歴書の二度も登場した松下幸之助 (1894-1989 年) の評伝を、「白洲次郎」や「後藤新平」をテーマに優れた評伝をものした北康利さんが書いている。「同行二人 松下幸之助と歩む旅」(どうぎょうににん) という本である。先日、門真の松下幸之助記念館を訪問して改めてこの人物の偉大さを痛感したところだったので、読んでみた。幸之助の人生を一緒にたどることで、私たちは人生を歩いていく杖を手に入れることができる。

以下は、私が読みながらしるしをつけた、杖となるべき言葉である。

最後にかかげた「道」にも深い感銘を受けたので、すべてを描き抜いておく。

松下幸之助の成功の秘密は、「たゆまぬ向上心と謙虚さ」と筆者は述べている。これはある性格タイプの特徴である「向上心」を極めていったということと、そういうタイプが陥りがちな傲慢さから逃れて「謙虚さ」を身につけたのが成功の原因だと理解できる。人はそれぞれの性格に沿って生きていく。一群の人々にとってモデルとなるべき人物であることは間違いない。そして自分にあった道を歩み続けたということは万人が模範とすべき生き方である。

- ・ お客が帰る際には、相手の姿が見えなくなるまで見送る。そして見えなくなる寸前、もう一度心をこめて深々礼をするのである。
- ・ 彼は物事をいい方向に考えてそれを力に変える、いい意味での楽観主義者であった。
- ・ 彼は早熟の天才ではなく、努力で成長していく典型的な大器晩成型だったのだ。
- ・ 彼は運を信じて逆境でもくじけず、成功したときは「運が良かった」と謙虚に思い、失敗したときには、「努力が足りなかった」と反省した。
- ・ 彼の場合、スピーチもまた努力でうまくなっていったのである。
- ・ 「人に借りをつくってはいかん、『ギブ・アンド・テイク』ではなく、『ギブ・アンド・ギブ』でいかな」
- ・ 企業経営の命題のほとんどすべては松下幸之助という不世出の経営者によってすでに見いだされているのかもしれない。
- ・ 「5つや6つの手を打ったくらいで万策尽きたとは言うな」
- ・ いつも寝床にノートと鉛筆が置いてあり、いいアイデアが浮かぶと、せっせとそれを書き留めていたという。
- ・ 彼の言葉がほかの人の受け売りではなく、自らの経験を通し、自らの頭で考えて血肉としたものだからだろう。それは「学校の秀才」や「生来の天才」ごときのたどり

着ける境地ではない。

- ・ 彼はいつも、自分たちの仕事は「聖なる仕事」なのだと言い続けていた。
- ・ 「台風一過——大将に叱られると、いつもそんな清新な気持ちになった」
- ・ 「君の専攻してきたことを一言で説明したらどういうこと？」、「君は何がしたくて松下へ入ってくれたんや？」
- ・ 定価でなく、「正価」という言葉を使ったのは、「正当な値段だ」という思いを込めたことであった。
- ・ 「それは私や会社が決定すべきことではなく、社会に決めていただく「ことやと思います」
- ・ 「彼は限りなく優しく、限りなく厳しく、限りなく温かく、限りなく冷たかった」(水野博之)
- ・ たゆまぬ向上心と謙虚さこそが、後年「神様」と呼ばれるようになった秘密に違いない。
- ・ 「日に新た」
- ・ 幸之助が選考にあたって最も重要視したのが「運」と「愛嬌」であった

## 道

自分には自分に与えられた道がある。天与の尊い道がある。どんな道かは知らないが、ほかの人には歩めない。自分だけしか歩めない、二度と歩めぬかけがえのないこの道。広い時もある。せまい時もある。のぼりもあればくだりもある。坦々とした時があれば、かきわけかきわけ汗する時もある。

この道がはたしてよいのか悪いのか、思案にあまる時もある。なぐさめを求めたくなる時もある。しかし、所詮はこの道しかないのではないか。

あきらめると言うのではない。いま立っているこの道、いま歩んでいるこの道、ともかくもこの道を休まず歩むことである。自分だけしか歩めない大事な道ではないか。自分だけに与えられているかけがえのないこの道ではないか。

他人の道に心をうばわれ、思案にくれて立ちすくんでいても、道はすこしもひらけない。道をひらくためには、まず歩まねばならぬ。心を定め、懸命に歩まねばならぬ。

それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは必ず新たな道が開けてくる。深い喜びも生まれてくる。

## 楊逸・ヤンイー 「時が滲む朝」 (文藝春秋)

1989年に起こった中国で天安門事件は、民主化を求める学生や市民のデモ隊が武力弾圧された事件として、その戦車部隊の映像が強く記憶に残っている。

在日中国人・楊逸(ヤンイー)の「時が滲む朝」は、この天安門事件の前年の大学入試の場面から始まり、北京オリンピックの前夜である2001年の主人公たちの再会で終

わる。中国民主化勢力の群像の青春とその蹉跎の物語である。

主人公は、高校の同級生である浩遠と志強、美人活動家の英露、そして大学の若き教授・甘先生である。浩遠らは甘教授らの指導のもと、遠い北京のデモと呼応して民主化の動きの中に入っていく。しかし、天安門で中国指導部は武力による弾圧を行い、この映像が全世界に流れた。

貧しい農村の様子、大学の学生たちの動き、若い彼らの心をつかむ尾崎豊の歌と姿勢への共感、など青中国の春群像の成長や葛藤が描かれる。浩遠と志強は市民との口論から始まった乱戦で、傷害罪と器物損壊罪で三ヶ月の拘留となり、大学からは退学処分となった。

その後、浩遠は日本へ、志強は中国に残り、甘先生はアメリカへ亡命する。

それから10年ほどたって、彼らは日本で再会する。志強は小さなデザイン企業を率いるデザイナーとしての来日である。浩遠は日本で働きながら中国民主化運動に長くかかわっている。久しぶりに会った甘先生はフランスで研究員をしながら革命の夢を追っている。英露はフランス人との結婚、離婚を経て、色褪せた感じで今は甘先生の妻となっていた。

甘先生は、そこで意外な決意を口にする。「辺鄙な田舎にでも行って、小学校の先生になる覚悟だ」。妻が亡くなったときの子供からの手紙を見せる意。「、妻も息子も顧みることが出来ない、そんな人が国を愛せるのだろうか」という手紙だった。

浩遠は息子の民生から「ふるさとして何」と聞かれ、「ふるさとはね、自分の生まれたとこと、そして死ぬところですよ。お父さんやお母さんや兄弟のいる、温かい家ですよ」と答える。それに対し、息子は「じゃ、たっくんのふるさは日本だね」と応じる。浩遠は息子の顔を見つめ、微笑むしかなかった。

1957年の「反右派運動」に巻き込まれ北京大学から西北の農村に下放され苦労を重ねた父、地元の名門大学に入りながら退学処分にあい異国で働く自分、そして民主化運動をからとった民生(たみお)という名前を持つ息子の困難を予想させる未来を暗示しているようだ。

この作品は第139回芥川賞を受けた。日本語を母国語としない人としては初めての受賞である。「抑抑揚揚」というような言葉遣い、「而立の年」をいきなり使うなどいくつか日本人の使わない表現はみられるが、淡々とした筆遣いで、ここ20世紀末まで中国の様子や中国人の心の動きがよくわかる小説となっている。

今世紀に入ってから中国の経済的躍進はこの本のなかでは描かれていない。浩遠は2008年の北京オリンピック招致の反対運動をしているのだったが、今まさに開催されているオリンピックをみてどのような心の動きになるだろうか。

中国は北京オリンピック、そして2年後の上海万国博覧会を経て、どのような姿になっていくのだろうか。実に興味深い。

この小説は、私たちが大学時代に読んだ柴田翔の「されど我らが日々」や村上春樹

の作品などに近い感覚を受けた。

井上荒野 「切羽へ」(新潮社)

何気ない退屈な日常の中に潜む危険な兆候の拡大と消滅、破滅と継続の狭い谷間、を描いた作品。

今年の直木賞を受賞した井上荒野の「切羽」を読んだ。切羽(きりは)とはトンネルを掘っていく一番先のことで、トンネルが繋がってしまえば、切羽はなくなってしまう。しかし掘り続けている間は、いつも一番先は切羽である。「切羽(せっぱ)つまる」という言葉は、その先端が進んでいかない状態を指しているのだろう。

九州弁が飛び交うある南の小さな島で夫とともに暮らす主人公は、島で育ち東京に出るが、同じく島の出身である夫と一緒に結婚して戻ってきて、今は養護教諭として小学校で働いている。同僚の女性月江、近所の老婆しずかさん、そして本土から赴任してきた若い男性教諭石和、小さな島の中でそれぞれが切羽を生きている。夫と主人公の日常も安定しているようで、ちょっとしたことでいつでも壊れる可能性を孕んでいるから、この夫婦も切羽を何とか進んでいるのだ。夫のすべとてを知っているが、でもこの人は誰だろうと思う瞬間がある。

際どい不倫を続けていて派手な性格の月江は平和にみえる妻の座にいる主人公に「あなたって、妖怪みたいね」という。「そうだ、自分も妖怪なのかもしれない」と主人公はあるとき思うのかもしれない。

石和も主人公の気持ちを不安定にさせるミシルシだ。ミシルシは、この島で正しく生きているという神託みたいなものと表現されている。ひとつの行動、ひとつの言葉、ひとつの表情、それによって心を騒がせられる。しかし、それは「正しく」生きていることの証明に過ぎないということだろう。

この何もない島には何でもある、と主人公が感じるのも、うなずける気がする。私たちは社会や人間関係の中で暮らしており、それぞれが互いに影響を受け合いながら、感情の小さなさざ波を立て続けている。

この小説は、読んでいるときはその意味はあまりわからなかったが、読み終えて時間を置いてみると自分の日常の中にも切羽を感じてしまう。

あやうい切羽の先も、最終章で、夫婦の子供が生まれるという新たな展開の中に溶けてなくなってしまう。最後の「植えそこないの球根がひとつあったとよ」と主人公が夫に答える場面でこの小説は終わっているのは示唆的である。球根は植えなかったし、育たなかったのだ。そしてまた主人公が新たな形の切羽を生きていくことになることを予感させる。

読み終えたのは少し前だが、すぐにはこの小説の印象や感想は書けなかった。時間が経つにつれてゆっくりと静かに小さな共感が心に中に広がってきた。寝起きに頭の中に書き出しの文章が浮かんだので、ようやく書くことにした。

人生は切羽の連続である。

三好徹「文壇ゴルフ覚え書き」(集英社)

風呂の中で本を読むことを日課としている。

ゆったりした気分であるから、難しい理論的な本はふさわしくない。雑誌を読むことも多いが、少し軽めの本を手にして入ることも多い。直木賞受賞者の三好徹の「文壇ゴルフ覚え書き」(集英社)を読んでみた。この作家の小説は読んだことがないが、余技であるゴルフのエッセイから読むことになった。

三好が40代半ばから始めたように、小説家が主役の文壇でゴルフをやる人がゴルフを始める年齢は割と高い。ちなみに丹羽学校と呼ばれた文壇ゴルフ学校の校長の丹羽文雄は50歳から始めている。(そして81歳でエイジシューターとなった)それは文壇に確たる地位を確立する年齢が高いことに起因している。最初から小説を書いて食っている人は少なく、何らかの職業を持ちながら二足のわらじを履いている人が多く、筆一本で立てるようになったときは年齢が高くなっているのだ。三好は新聞記者あがりである。

ちなみに文壇ゴルフの入会資格は、技術拙劣、品性高潔。石原慎太郎がそれを聞いて、「それじゃ、僕は資格がないな」といって入らなかったそうだ。どちらの資格にひっかかったか、二通りの説がある。

座ってものを書く職業には、ゴルフは気分転換と体力維持にはもってこいだというのだが、「文は人なり、というが、ゴルフもそうなのである」と三好は言い、そのゴルフの中で人物を観察したり、友人ができたり、人生の教訓を得たりする。それを軽妙なタッチで描いていて楽しめる作品で、一回の入浴で読み切ってしまった。

三好徹は1931年生まれだから77歳。この世代が付き合ってきた世代は、球を打っている写真付きで出ている名前を挙げてみると、古山高麗雄、半村良、生島治郎、丹羽文雄、小林秀雄、川口松太郎、柴田錬三郎、井上靖、中野好夫、源氏鶏太、永井龍男、水上勉、澤久雄、生島治郎、富島建夫、秋山庄太郎、横山隆一、藤子不二雄A、城山三郎、佐野洋、渡辺淳一、五木寛之、伊集院静、、、。

著者によるとマージャンは、しつこい人間が必ずいて終わりの時間が決まらないから、ゴルフの方がいいという。ゴルフは必ず夕方になれば終わる。「つきはジャン卓を囲む者たちの間を往ったり来たりするが、運が往ったり来たりすることはない」とも言っている。

日経新聞で好評連載中の瀬戸内寂聴の「奇縁まんだら」と同じ匂いがする。これは「文壇ゴルフまんだら」である。また、死んだ年齢で人間を分けていく山田風太郎の「人間臨終図鑑」にも通ずるところがある。もつという、司馬遷の「史記」の列伝も同様のラインだろう。やはり人間を扱った作品が面白い。

澤野久雄が朱子の「偶成」をもじった漢詩をゴルフの会で披露したことが紹介されていた。

少年老い易く、ゴルフ(学)成り難し  
一寸の帕特(光陰)軽んずべからず

この見事な作品は、第三、第四までであるのだが、忘れてしまった著者は、転結まで戯作している。

壯年老イ易ク術成り難シ  
一寸ノ短打軽ンズ可カラズ  
未ダ覚めず長打(ドラゴン)一位ノ夢  
舎(ハウス)前ノ芝葉己ニ秋景

さすが、である。

成毛真「本は10冊同時に読め！」(三笠書房)

「本は10冊同時に読め！」(成毛真)という知的生きかた文庫を一冊買い、喫茶でコーヒーを飲みながら読了する。極端な言い方が売れている原因だろうか。約5万冊の蔵書を持つ著者は、松岡正剛、森山和道、福田和也の書評を参考にして本を選んだらいいとアドバイス、またコツコツ貯金などせずに本に費やせという主張などをしている。

内田樹・名越康文「14歳の子を持つ親たちへ」(新潮新書)

橋本治「小林秀雄の恵み」(新潮社)

橋本治(1948年生まれ)という作家の本は読んだことがなかった。東大駒場祭での「とめてくれるな、おっかさん 背中の中のいちようが泣いている 男東大どこへ行く」のポスターや小説「桃尻娘」など、異色の活動をしている人といういことくらいは知らなかった。

今回、「小林秀雄の恵み」(新潮社)という、小林秀雄(1902-1983年)を俎上に上げた本格評論を読んで今までの印象を一変した。小林秀雄といえば私たちの世代のだけれどもが知っている文芸評論の神様で、入学試験問題はこの人の難解な文章を題材に出されることが多く、畏敬の対象であった。小林秀雄の冴えた筆にかかるとどのような権威も丸裸にされてしまうという恐怖に近い感覚を持った同世代の知識人は多かっただろう。

橋本治は、小林秀雄の凄味と切り開いた地平を高く評価した上で、小林の秀雄の文章が難解なのはつじつまが合っていないからであるという申し立てを慎重に、しかし大胆に行っている。この本は常に異議を申し立てる側であった神・小林秀雄に対して、真正面から、かつ丁寧に異議を唱える志の高い一書である。

多くの書評がそうであるように、評論という営為は、対象を語りながら実は自らを語る

ということを目的としている、と言ってよいだろう。小林秀雄の多くの優れた仕事にもそういった面があり、私たちは彼が取り上げた偉大な人物を語る本人の考えを堪能してきた。兼好、西行、宣長という日本史上の偉大な先達の姿を料理する冴えた腕と技に惚れぼれとした人が多い時代とは何だったのか、これが橋本治の問いである。そして橋本治もまた小林秀雄をそうであったように、戦後世代としての自己を開陳していく。

「本居宣長」という書物は小林秀雄が63歳から書き始めて、単行本になったのが75歳のときであり、小林秀雄のライフワークとして見事な完成を見せ、輝ける名声をさらに高めた名著である、ということになっている。それは誰も疑わなかった。しかし橋本治は、この書は本居宣長を「学問する人」という片面しか見ていないと述べている。「源氏物語」の世界を憧憬しそれを生んだ土壌のルーツを求め「古事記」にすすむという道をたどる宣長の本質、つまり本(モト)は「和歌を詠む人」であり、学問は末(スエ)で従たる位置を占めている。だから誠実な小林秀雄は本居宣長を全的に認識できずに難渋しており、それが名著と言われている「本居宣長」を難解な作品にしている。宣長の二つの墓を証拠にもして「和歌の宣長」を橋本治は実証している。つまり橋本治は小林秀雄は本居宣長という人物を見誤ったと断定しているのだ。

連歌、俳句、謡曲、浄瑠璃、小歌、童謡、音曲の類の本(モト)である和歌を宣長は最上位においていた。それは日本文化の本来のあり方に自分(宣長)はのっとうっているという自負があるということである。和歌のテーマは日本人が持ってきた変わらぬ不動のテーマである。和歌のテーマは「物のあはれ」を詠むことであり、それは「人の情(ココロ)の、事にふれて感(ウゴ)く」ということに尽きる。論理の人である小林秀雄は、「全的な認識」という言葉を持ち出して複雑にしてしまう。橋本治は、「物のあはれ」を小林秀雄は頭でわかろうとしたため、本当はわかっていたのではないかという疑問を発している。

学問する人である小林秀雄は、自らの生涯の価値を決定づける作品である「本居宣長」を63歳から書き始める。兼好にもベルグソンにも物足りない。長い年月をかけて探し出したのは、本居宣長という大きな対象だった。この宣長を十全に書くことによって小林秀雄は本当の小林秀雄をになれるはずだった。宣長と小林秀雄は一致もあったが、ズレも大きい。自身の遺書である「本居宣長」に書かれた本居宣長は、宣長の一面である「学問の人」小林秀雄そのものとなった。

日本という国は、常に外国から異様な情熱で学んできた。古くは中国、近代に入って欧州、現代はアメリカがその畏敬の対象であった。宣長が生きた江戸時代もそうであったし、明治以降特にその傾向が顕著に出ている。しかし日本の国柄を極めるという一方の営為がなければ、精神的崩壊が待っている。それを本居宣長は、神話として日本人が歯牙にかけなかった「古事記」に求めた。そしてその答えは確実にあった。宣長はそのような歴史と土壌の中で生まれ死んでいくことを理解したのである。宣長の仮想敵は、「漢意」(カラゴコロ)だった。この敵を相手にする中で本来の「日本」を掘り出

していく。これが儒教や仏教を排撃し、反体制の尊王攘夷思想を生んで行く。

小林秀雄は日本の近代の入口を求めて、近世を旅する。それは武者達が闊歩する戦国時代から始まるのだが、その風潮は「下剋上」という言葉で表わされる。大槻文彦の「大言海」には、「此語、でもくらしいトモ解スベシ」とある。とすれば民主主義を標榜する近代は、実は近世から始まるともいえるのである。近世思想のトップランナーと小林が位置づける中江藤樹は、庶民が「学問する権利」を発見する。それは、熊沢蕃山、契沖、伊藤仁斎、荻生徂徠、そして本居宣長に受け継がれていく。私学の中江藤樹に対して江戸時代の官学には林羅山がいる。国学という民間学に対し、体制を護る官学とは朱子学、儒教である。橋本治は、世の中から崇められる神様・小林秀雄は私学に興味を持ったが、その本質は官学であると言っている。小林秀雄は林羅山であるという衝撃を橋本治は用意する。立ち位置と言説の分裂がおこっているというのだ。

小林秀雄という山は大きな存在感に満ちている。一応は文芸評論家という肩書で紹介されているが、その仕事をなぞってみるととてもそのような表現で説明できる人物ではない。文芸にとどまらず、「モオツアルト」などの音楽、「ゴッホの手紙」などの絵画、などあらゆるジャンルで一流の活動をしている。音楽絵画、文学を同列に置いたマルチメディア評論家ということになる。「平家物語」の「宇治川先陣」の流麗な文章を小林秀雄は「大音楽」と言っている。文章から音楽が聞こえるというのである。「無常ということ」はこれまた有名な本でよく読まれたのだが、戦争状態は無常であり、常なるものは歴史であり、その遺産としての古典であり、古典を読もうというように解釈できると橋本治はいう。戦争時の小林秀雄の講演では、戦争のばかばかしさを前提にした論陣を張っており反戦的ととられてもおかしくない主張をしているが、危険人物とはみなされていない。誰からも理解されないために安全であるという奇妙な役どころを上手に演じている。

近世という時代は非合理的な神を存在させながら、一方を合理性で支配するという時代だった。神は神として置いといて、しかしそれとは関係なく実生活をまわしていく、そういう時代だった。それは日本思想のゴールであり、本質的な態度だった。自分は兼好法師ではないことに気がついた小林秀雄は、自身をむき出しにして己を求める僧侶・西行に行く。仏教は門口のみ用意しあとは自由という宗教であり、仏はただ伴走するのみであり、ゴールへ導いてはくれない。神が空白として存在していた日本人は、「桜」を代入した。桜は、神であると同時に自分自身でもある。だから西行はその空白を自分でうめ続けた自助努力と自己達成の人であって、近代人でもあるということになる。芭蕉は自分を問題にしないで、俳句の中で、水の音、最上川、夏草、を神にしたてあげる。その強さは日本人にとっては当たり前のことだったのである。

「しき嶋の やまとごころを 人とはば 朝日ににほふ 山ざくら花」という本居宣長の歌は、私の本質は桜であるという意味でありそれ以上ではない。二つの墓のうち私的な墓にはなにも書くなと命じた宣長は、生業であつた医者でもなき、ただ本居宣長で

あるだけでいい、それ以外の何者でも自分はないということを示している。森鷗外の墓にも「森林太郎墓」とだけある。また、原敬も「原敬墓」である。国学者でも文学者でも政治家でもなく、自分自身であるということなのが古道なのだろうか。

「本ヲオイテ、末ヲモトメンヤ」という宣長は、当然のことながら漢意に汚染された日本書紀ではなく、「古事記」へ向う。しかし、小林秀雄は、「古事記伝」を書いた本居宣長に関心があって、「古事記」そのものには関心がない。小林秀雄は思想よりも、人に関心がある。自分に重ね合わせて生き方を考えているのだろう。

この本の中で橋本治は、しだいに小林秀雄の正体を丁寧に薄皮を剥ぐように見せていく。その手腕はなみたいていの腕ではない。小林秀雄本人が小林秀雄を容赦なく批評しているという感覚を持った。ある時代を風靡した小林秀雄という神は、時代を通り抜けるトンネルのような役割を持っていたと橋本はいう。トンネルを抜ければ掘った人は忘れられる。そういう存在である。

この書を書き終えた時点で、橋本治は中江藤樹以降の系譜を学ぼうとするが、それをやってはいない。私は橋本治のこの考えに深く共感する。そして本居宣長という存在に大きな関心を持った。

橋本治にとって小林秀雄が恵みであったように、橋本治も私の「恵み」であり、私のトンネルであった。

(ここまで一気に書きなぐってしまったが、この感想はもっと整理してきちんと書きあげたい、そういう名著だと思う)

2009 年

小中陽太郎「市民たちの青春 小田実と歩いた世界」(講談社)

小田実という巨人と同伴者として時代を疾走した著者との交流を描いた鎮魂歌。一気に読んで心を打たれました。下手な論評をすることは一切やめて、著者の言葉を追うだけにしたいと思います。

「本書は、、、小田と自らの 45 年にわたる日々を、デモ、脱走兵援助、ベトナム訪問、女性、文学をめぐる、小田の類まれな指導力と人間性を赤裸々に描いた記録である。」

「ベ平連の理念と小田の人間性を知ってもらいたく、ぼくの唯一の取柄——自由を旗印に、この記録に挑む。」

この本の中に出てくる小田実と小中陽太郎をめぐる人々の名前を書きだしてみます。この名前を眺めるだけであの時代の息吹が聞こえてくるようです。「ベ平連」の時代は途方もないエネルギーに満ちていた、市民たちの青春だったのです。

川本三郎・鶴見俊輔・吉川勇一・加藤周一・大江健三郎・香山健一・久野収・開高

健・本多勝一・オノヨーコ・ジョンレノン・坂本一亀・岡部雅郎・野坂昭如・永六輔・中村八大・中谷昇・萬之助・池田一郎(隆慶一郎)・木下恵介・山田太一・森有正・児島襄・竹中労・児玉隆也・佐久間稔・鈴木武樹・鶴見和子・高島通敏・いいだもも・武藤一羊等・吉本龍明・桑原武夫・坂本義和・中曽根康弘・宮沢喜一・宇都宮徳馬・飛鳥田一雄・上田耕一郎・無着成恭・ばばこういち・岡本太郎・福富節男・和田春樹・栗原幸夫・日高六郎・チョムスキー・大森実・田英夫・サルトル・ポーボワール・横尾忠則・岸恵子・高橋和己・柴田翔・丸谷才一・安岡章太郎・辻元清美・古藤晃・渡辺喜美・中川昭一・金大中・秋田明大・小澤遼子・金芝河・中野孝次・宮本顕治・土井たか子・有田芳生・山口鶴男・鎌田慧・吉岡努・小熊英二、、、、、、。

以下、小中の小田の人物評。二つ年下の小中は巡りあった小田実という巨人と一つの時代を一緒に確かに生きたということでしょう。

- ・ この男には世界大の題材を掴み取るエネルギーとマイノリティにこだわる人生観の両面があった。
- ・ 彼のエネルギーの源泉は牛のような反芻にあった。そして夜更けまで論じつくすのである。
- ・ こういう論客、一言居士が小田に心服したからには、小田にはある大きな磁力があったのだろう。
- ・ 小田は、こういうとき臆病なまでに慎重である。
- ・ あの小さな矩形の中に首尾よく着陸できるのだろうか。小田といrてばできるだろう。ぼくはこわくない、となりに世界一の大旅行家がいるのだから。
- ・ ぼくも兵役拒否者になたとあけでも、革命家になったわけでもない。ただ、宗教のように小田についていっただけだった。
- ・ 小田はたぐいまれな知識人で、議論家である。英語を駆使し、古典ギリシャ語を読み、万卷の書を読破する。それでいて、地べたのオモニヤアボジと膝を交えて、手をたたき、鼓腹撃壤、長い手を頭の上にかざして舞い踊る。
- ・ 小田の中には知識人と放浪者の二つのDNAがとうとうと流れ、彼の血管の中で矛盾なく溶け合っている。
- ・ それにしても、彼の女性に対する暴君ぶりは相当なものだった。
- ・ 小田とぼくの関係は、光源氏と従者の藤原惟光のようなものだ。
- ・ というより小田自身が大編集者で、書き下ろし、連載、口述、共著と使い分け、大出版社を手玉にとり、若い編集者を育てた。
- ・ いつも締め切りに追われていたが、書きだすと着想は滾滾と泉のように湧いてくるようだった。
- ・ そういう加害者性を認めたらうえで、それをバネにして新しい立場を作り出そうとする積極的な「自己肯定」が小田の特徴だった。

- ・ だから小田は頑張る人というよりあきらめる人だった。
- ・ 小田は、人の悪口を言わない。人が言っても気にしない。彼は何よりも、決して人の批判や悪口を言わなかった。

2007年2月に最後に大勢で食事をしたときの小中の感慨。

「二人だけでいたかった。ぼくは小田を取り戻したかったのだ、とやっとわかった。女性たちがそう思っていたように。」

この本は、人間・小田実の魅力と、小田が生きた時代を、小中陽太郎らしい自由な筆致で十分に描き切った傑作であると思います。

北康利「九鬼と天心」(PHP)

「九鬼と天心」(PHP)は、評伝作家として精力的に執筆を続ける北康利の最新作である。

この作家の本は、山本七平賞を受賞したデビュー作「白州次郎 占領を背負った男」以来、「福沢諭吉」や「松下幸之助」などの評伝も読んできた。

九鬼隆一は1850年生まれで、福沢諭吉の慶応に入学し、その翌年に文部省に入り栄進し、文部行政に絶大な影響を与えて、日本の古美術調査保存や美術教育に力を注ぎ、男爵に列せられた。

岡倉天心は1962年生まれで、フェノロサの影響で日本美術に傾倒し、文部省で九鬼のもとで美術行政に関わり、東京美術学校の設立、日本美術院の創設などを行い、横山大観などの優れた日本画家の一群を育てた。

この本は、日本の美の伝統を守ったその盟友二人の愛憎の物語である。

時代を担う人材の登竜門であった慶応に学んだ九鬼は、不世出の教育者であった福沢諭吉が唯一生涯許さなかった弟子でもあった。文部行政に深く関わる中から、当時の日本は上からの改革でなくては列強に飲み込まれてしまうという危機感が、恩師を裏切る形になってしまう。「文部省は竹橋にあり、文部卿は三田にあり」と言われた福沢が「日本人は欧米に遅れている」と説き急速な近代化を実現しようとしたのに対し、九鬼は「文部省の九鬼か、九鬼の文部省か」と言われたほどの実力者になり、「従来の日本にも素晴らしいところはあう」と主張し、日本に誇りを取り戻そうと考えた。そして私学の弾圧に乗り出し官学を重視する路線をとる。慶応にとって九鬼はユダであった。九鬼は総理大臣にも文部大臣にもならなかったが、世評は高かった。「東京日日新聞」(1887年8月2日)は各界の有力者ランキングを発表している。それによると、教育家では3位、美術奨励家では2位、物産奨励家では5位に入っている。

岡倉天心は九鬼より12歳年下の英才で文部省で上司である九鬼に私淑し、九鬼の考え方を美術の世界に鮮やかに展開していく。後年「九鬼のある所必ず天心あり、

天心ある所必ず九鬼あり」と言われるほどの同志となっていく。天心の書齋で「第一四十歳にて九鬼内閣の文部大臣となる 第二 五十にして貨殖に志す 第三 五十にして寂す」という人生計画らしきメモを見た人がいる。天心の志を知るメ資料でもあるが、一方で天心の九鬼に対する傾倒ぶりがうかがわれる。「日本美術は中国の模倣ではない」と強く思った天心は日本美術の再興に生涯をかけていく。東京美術学校の校長を追われた天心は、辞職後わずか 3 ヶ月で日本美術院を創設し、日本美術の滔々とした豊かな流れをつくりだしていく。

九鬼と天心の民族主義的思想が、当時の欧米化という圧倒的な流れの中で、日本の文化と誇りをかろうじて守ったということもいえるのだ。ここは今日も私たちが背負っている課題でもある。

この二人は、時代を読む洞察力、目だとうとする性癖、そして好色であったことなど、共通点が多い。漁色家であった九鬼と自分の欲望を抑えることができなかつた天心は、似たもの同士だった。それが九鬼の妻と天心との不倫騒動に発展していくとは皮肉なものである。

九鬼の息子であった周造は、実は天心の子ではないかと疑われたが、後に哲学者となって「粹の構造」という名著を書く。しかしこの周造も哲学者でありながら、「ドン・ジュアンの血の幾しづく身のうちに 流るることを恥かしとせず」という歌を詠んでいる。

やはり堂々たる漁色家であった。血は争えないものである。

また、九鬼と天心の二人の性格はよく似ている。時代に対する感覚が鋭いこと、果敢であること、人に影響を与える教育者的資質に富んでいること、表の顔と裏の顔があることなどである。どちらも成功することに生きがいを感じる人、動機づける人、である。

この本は「明治のドン・ジュアン」という副題(ドン・ジュアンは、ドン・ファンのこと)を持っているが、その部分は描き切れていないように感じる。北康利の書物には時折、対象とした人物に対する感想や溜息が書かれていて、本音が垣間見えることがあるが、幾分モラリスト的雰囲気があるようで、好色の部分には全般に評価が辛い。それが筆致にあらわれている。小説家ではないし、男を書くことがテーマなので女や恋愛を描くことは苦手だと思うが、どうだろう。

北は、最近まで証券会社勤務だったが、専門の会計分野の専門職大学院で客員教授を務めながら、本格的に評伝を書くことを決心したようである。「白州次郎」を書いたときには、故郷・兵庫県三田(さんだ)の郷土史家という肩書だった。白州次郎も、今回の九鬼隆一もそういう郷土史研究の中から浮かび上がったテーマであろう。

著者にとって郷土史は自分自身を深堀することでもあるから、調べ、書く必然があり、それが出来映えにつながっているようである。

北康利は、郷土史という汲めども尽きぬ泉を掘り当てたようである。その独自の泉を大事にして、近代日本の人物を書くことを通じて、日本の姿を描いてもらいたい。

橋本治、内田樹-「橋本治と内田樹」(筑摩書房)

「橋本治と内田樹」(筑摩書房)という対談本を読んだ。

内田樹(ブログの訪問数は一日6千から7千)という論客が聞き手となって、橋本治という得体のしれない大きな作家が自分を語るという趣向で、実に面白く読めた。橋本治の本は、神様・小林秀雄の間違いを指摘するという、恐れ多い仕事となった出色の小林秀雄論を読み、その力に驚いた記憶があるが、他の有名な作品は手にしていない。林まり子が、橋本治と同時に生きていることを幸せに思うというようなことを何かに書いていたが、この対談本を読むと、そうかもしれないと感じてしまう。

本屋で、橋本治本人が「代表作に近い」という「窯変源氏物語」を買ってきて、読むことにした。この本は全14巻の大作だが、昨年源氏物語千年紀ということで、田辺聖子や寂聴の源氏物語を見たがあまり食欲がわかかなかった。この本についての本人の解説を聴いて、挑戦することにした。今回は全巻通読ができそうな予感がする。

この対談本は、同世代の二人の特異な書き手の考えていることや手の内がわかるのだが、橋本治の逆説的な、本質的な、独学的な言葉群に魅力があって、最後まで楽しくうなずきながら読み終えることができた。内田樹は相の手と相手の言葉を敷衍するちよつとした解説がうまいので、橋本治の話がうまく回転してく。

橋本治という作家のことを論ずるにはまだ早いので、今日はこの作家の「知的生産の技術」に関係するかもしれない部分をピックアップしてみた。

- ・ 「頭が丈夫」
- ・ 「思考体力」
- ・ 技術って、「だいたいできているから、もうちょっとちゃんとできる」って形で進歩するんだと思う、、、。「だいたい」からジリジリジリっと完成度を高めていく、、、。
- ・ オリジナルに勉強する、高を括るっていう、優越感もたないとだめですよ。それがないと、「えーっ」て人の後についていって平均点のノート取るだけになっちゃう。
- ・ 一個やったらほかにやる必要ないぐらい「作品として立っている」っていうことになど、気がすまないんですよ。
- ・ 滝沢馬琴と葛飾北斎と鶴屋南北は、デビューが五十過ぎなんですよ、、、。で、五十から七十五までがピークなんですよ。
- ・ だから自分の社会的な壁を高くしちゃえば、変な人間関係に煩わされずにすむから、それでわりとパブリックなことばかり考えるようになってしまったっていうのはある。
- ・ 日本の歴史という床下で配線がこんがらがっちゃっているから、その配線をちゃんと繋ぎなおさないと、現在がちゃんと機能しないみたいなことがあるから。
- ・ タイトルのストックは結構あります。
- ・ 俺はなんか単体じゃないんです。すごく複数なんです。

- ・ 地べたを這いまわるような時間を費やしていくと、体の中に経験値が積もって、ある時突然、パッと見えるようになるみたいなものがある。
- ・ 十代の時に、面倒くさい本を読まなかったことで、俺は、すごく得をしたと思いますね。知らないから、成熟したいまの頭で、先入観なしで読めるんですよ。
- ・ 一廉の者(ひとかどのもの)
- ・ 最大の破壊は建設なりt思っていますから。
- ・ 名優がやれば、どんな話でも芸談になるんですよ。
- ・ 小説というのは、、苦にならないような説明のテクニックを持ってしまった人が勝ちなんだと思ったんです。
- ・ 「文章をぎゅっとわしづかみするという方法は一つあるんだなあ」と思って、、、日本の文章の基本って漢文じゃないですか、、、正式になればなるほど、ぎゅっとわしづかみになって、俗にするのなだったら、もうちょつと開くというようにして、その伸縮自在さが日本語の文章なんです。
- ・ 「である」は私にとって漢文。
- ・ 歯車が回り、ピストンが動いているみたいな。明治の文章ってそんな感じがするんですよ。
- ・ 私は批評はいらないんです。ちゃんと紹介してくれれば、、、紹介文でさえ、感想文になってしまっているということが最大の問題だと思う。
- ・ 理想としては、山崎豊子が書くような題材を山田風太郎のような視点で筒井康隆のように書く(笑)。
- ・ 「窯変源氏物語」に関しては言葉のスペクタクルをやりたいかったんです。
- ・ 文芸評論をやる前に、皆、小説をちゃんと書いてみな、すごいことがいっぱいわかるから、

#### 市村清「市村清講演集」(三愛新書)

仙台で富田さんから「市村清講演集」という新書(三愛新書)をもらった。没後 40 年を記念して三愛会が出した本で、2008 年の 12 月 16 日の刊行となっている。非売品。

市村清は、リコーの創業者で、松下幸之助や本田宗一郎と同世代の伝説上の経営者である。三愛石油、明治記念館、ハミルトンリコー時計なども経営したり、大河内正敏博士が率いる理化学研究所でも仕事をしたりしている。富田さんからは時々、「リコー時計」という会社の名前を聞いているが、その会社のことがよくわかった。富田さんは市村清に一度会ったことがあるそうだ。

この本の中に野田一夫先生の名前が二度でてくる。市村清は 1900 年生まれだから野田先生より 27 歳上だが、野田先生は市村学校の生徒だったとある。この講演をしていたころは、市村が 60 歳ころで、野田先生は 30 代半ばという計算になる。この学校には、五島昇、盛田昭夫ら若手経営者や大宅壮一、邱永漢、今東光、升田幸三等が入

っていた。

市村が理研コンツェルンの中でただ一社だけ譲り受けた理研光学という会社が発展して、リコーという名前になった。これで会社の名前の由来がわかった。ビジネスマンだったころ、リコーの営業マンに日参されて、いい営業マンだなあと感心したことを思い出した。あれは市村イズムだったのだ。宮城リコーの社長をながく務めた富田さんにも、そういう雰囲気は残っている。

本を読んだが、いかにも創業者らしい言葉が並んでいる。経営の基本は「人」であると強く意識しているとの印象を持った。

この講演集の中から言葉を拾う。

- ・ 欧米式の経営学などは習ってきて参考にはなるかもしれないが、もっと実際的に日本独特に研究していったらどうか、。。
- ・ いろいろ書きだして見て、組み立てたり、バラしたりしえみるおです。そうしなすと、かくならなければならない、かくなるべきだという結論が生まれてくるわけです。
- ・ 私が一番苦心しているおは人事管理です、、、。
- ・ (商品の)欠点のあるところをわれわれの販売技術とか熱意とか努力で補い、そういった気迫なくして営業は成り立ちません。
- ・ 地位は適材適所
- ・ 「人」という問題が徹底的に中心となる
- ・ 食欲、性欲、自己拡張慾
- ・ 人を愛し、国を愛し、勤めを愛する
- ・ 経営学は外国の直輸入の経営学では駄目ではないかと思っております。やっぱり日本には日本の風土に合った経営学があるのではないのでしょうか。私のこうしたいろいろなことを取り入れて、野田一夫君がそれを体系化しようとしてやってくれています。
- ・ 知っているということは存外、判断力とは別物ではないか、、、。
- ・ 人と同じでは人以上にはなれません。

青木新門「納棺夫日記」(文春文庫)

オスカーを受賞した「おくりびと」の原作となった「納棺夫日記」(文春文庫)を感動を持って読み終わった。死という現実を真正面から見続けた人が到達した境地がここにある。青木さんは菩薩になったのではないだろうか。

- ・ 死体に抱きつくようにしないと、腰紐が通せない。
- ・ 私の全存在がありのまま認められたように思えた。そう思うとうれしくなった。この仕事をこのまま続けていけそうな気がした。
- ・ 友人たちが遠ざかっていったことが、寂しかった。
- ・ 服装を整え、礼儀礼節にも心がけ、自信をもって堂々と真摯な態度で納棺をする

ように努めた。納棺夫に徹したのである。すると途端に周囲の見方が変わってきた。

- ・ 仕事柄、火葬場の人や葬儀屋や僧侶たちと会っているうちに、彼らに致命的な問題があることに気がついた。死というものと常に向かい合っているうちに、死から目をそらして仕事をしているのである。
- ・ 己の携わっている仕事の本質から目をそらして、その仕事が成ったり、人から信頼される職業となるはずがない。
- ・ 「穢らわしい、近づかないで！」とヒステリックに妻は拒否した。
- ・ 西洋の思想では、生か死であって、「生死」というとらえ方はない。
- ・ 雪でもなく、雨でもない、手に取れば水となってしまふみぞれ。
- ・ 鼻毛を洗い、鼻毛をきれいに取り除いたら、案の定臭いがしなくなった。
- ・ 蛆も生命なのだ。そう思うと蛆たちが光って見えた。
- ・ 葬という象形文字は、草と草との間に死がある合字、死という文字もばらばらになった骨と人をさかさにした形との合字である、
- ・ 最近とみにぶよぶよとした死体が多くなってきた。
- ・ そんな農村での老人の死体は、遺骸という言葉がぴったりで、なんとなく蟬の抜け殻のような乾いたイメージがあった。
- ・ 毎日毎日、死者ばかり見ていると、死者は静かで美しく見えてくる。それに反して、死を恐れ、恐る恐る覗き込む生者たちの醜悪さばかりが気になるようになってきた。
- ・ 死者と毎日接しているうちに、死者の顔のほとんどが安らかな顔をしているのに気づいた。
- ・ にもかかわらず、死者の顔はみんな同じように安らかな相をしている。死んだままの状態の時などは、ほとんど眼は半眼の状態で、よくできた仏像とそっくりである。
- ・ 特に宮沢賢治作品の素晴らしさは、賢治の視線が微生物の世界を追っていたかとおもうと、次の瞬間には太陽系、銀河系、全宇宙へと移動し、瞬時にしてその視線が素粒子の世界へと移っていて、しかもその眼は極小から極大まで自在に動くズームレンズのような機能を持っているといった具合である。それはあたかも「般若心経」の観自在菩薩のような自在の眼で世界を認識しようとしていたかのようだ。視点の移動があつて、思いやりが生まれる。
- ・ 元はといえば「我々はどこから来て、我々は何で、我々はどこへ行くのか」があいまいであることから来ているのである。
- ・ 死に近づいて、死を真正面から見つめていると、あらゆるものが光って見えてくるようになるのだろうか。
- ・ 「仏は不可思議光如来なり、如来は光なり」(親らん)
- ・ あらゆる宗教の教祖に共通することは、その生涯のある時点において、「ひかり」との出合いがあることである。「われは世の光なり」と言ったキリストも、天理教の中山ミキや大本教の出口なおなども、すべての教祖は「初めに光ありき」から出発し

た体現者であった。

- 宙に浮いた第三の視点からは、「さんたんたるわが身」も見え、「きれいな青空」も見えるのである。そこから「さんたんたる景色(現世)を横目で見ながら、すきとおる空(浄土)へと直行するわけで、死はどこにもない。
- 親らんの阿弥陀信仰は、どのような者でも「無碍なる不可思議な光」に必ず出合えるという絶対の確信からきている。
- 釈迦のように、光に包まれて肉体のとりわれを離れた心が、なお生を保つ肉体によって維持されながら四十五も持続できたのは、人類の奇跡としか言いようがない。
- 親らんも道元も、そして良寛も、偉大な良き人は、みんな詩人でもあった。
- あの「光」に出会うと、生への執着が希薄になり、同時に死への恐怖も薄らぎ、安らかな清らかな気持ちとなり、すべてを許す気持ちとなり、思いやりの気持ちがいっぱいとなって、あらゆるものへの感謝への気持ちがあふれでる状態となる。こうした状態になった人のことを、仏教では菩薩という。
- 宗教がどれくらい科学の立証に耐えるかによって、今後の宗教が歴史に残るかどうかが決まるかもしれない。
- 今日のあらゆる分野で最も必要なことは、現場の知ではないだろうか。
- 要するに、菩薩に近い人が側にいれば一番いいのである。人は、自分と同じ体験をし、自分より少し前へ進んだ人が最も頼りとなる。
- 私は、湯棺・納棺をしていた頃、死者と私だけがばかりと光に包まれているような奇妙な経験をしたことがある。

宮本雅史 「歪んだ正義---特捜警察の語られざる真相」(情報センター出版局)

また、本日、宮本雅史「歪んだ正義---特捜警察の語られざる真相」(情報センター出版局)を読み終わった。佐川急便事件、ロッキード事件、造船疑獄指揮権発動事件を題材に検察の動きと裁判を丹念に追った作品。著者は産経新聞記者時代に、検察庁、警視庁を長年担当した人物である。

竹下登ほめ殺し事件、仙台市石井市長のゼネコン汚職事件、本間俊太郎宮城県知事汚職事件、金丸信5億円献金事件、鈴木宗男贈収賄事件、田中角栄総理への5億円献金のロッキード事件、佐藤栄作に対する造船疑獄指揮権発動事件などの様子がよくわかる問題提起の書。

村山治 「市場検察」(文藝春秋)

朝日新聞記者村山治の書いた「市場検察」を読んだ。

80年代に日米構造協議にかかわった検事たちは、2000年代に次々と検事総長となって検察を変えた。

登場人物と事件は以下の通り。

中村喜四郎、金融破たん処理、石油商泉井、KSD事件、参院のドン村上正邦、日歯連事件、野中広務、KSD事件、ホリエモン、村上ファンド、、、、。

検察の使命は、国家＝官僚システムに介入して特定の利益のために政策を歪めようとする政治権力の排除が大きなテーマだった。政界がターゲットだった。そしてグローバル化の波の中で市場の求めるルールとのギャップに取り組んでいくなかで、司法制度改革や市場経済に対するチェックとバランスの再構築という重大な課題について官僚である検事に委ねていいかという疑問にこたえようとした書である。

結論は、検察には国民の絶対的な信頼があり、制度面でも検察側に圧倒的に有利にできていた。特捜警察が政治家を逮捕すると、実質でr機にその時点で社会的制裁を受ける、それは裁判制度とは別の制裁システムとして働いてきた。国民は自民党一党支配すなわち実質的な官僚支配を容認し、その構造を破壊しかねない自民党議員の官僚へのちょかきをチェックする役目を果たしてきた。

検察官僚が取り組んできた司法制度改革は、官僚機構を温存しつつ、近代化、合理化しつつ、徐々に国民を統治の主役に変えていくスタイルになった。

しかし、検察へのチェック体制は機能してきたとは言い難い。自らがチェックされないという構造自体が検察・法務の「市場検察」化における最大の矛盾となる。

以上が主旨である。

検察も官僚機構の一部であるということだろう。

ところで、司法制度改革も検察官僚の主導で行われてきた。「法の支配」に貫かれた事後チェック・事後救済型、つまり「市場型社会」に日本が変わるために、司法の仕組みを変えるという問題意識で始まっている。2001年12月に司法制度改革推進本部（総理が本部長）を設置し、裁判員制度、法テラス、法科大学院を3本柱に進めてきた。事後チェック・事後救済型になると、持ち込まれた紛争を引き受けるシステムも容量もなく、社会が機能不全になるか闇の世界がの役割が大きくなるから、インフラ整備としての司法制度改革が必要ということになった。

筆者は、01年のKSD事件、04年の日歯連事件の政界捜査との取引で司法制度改革が成立したのではないかとの疑念も持っている。

本当のところはわからないが、よく目を凝らしていないといけないということはわかった。

村上龍「無趣味のすすめ」（幻冬舎）

息抜きもあって日曜日は、書店で村上龍の「無趣味のすすめ」（幻冬舎）を買って、風呂の中で一気に読み終わった。

この作家とは30代の半ば頃に仕事上の関係で付き合っていたが、同世代であることもあり個人的にもその人がらに好意を持っていた。最初に会ったとき、「海の向こうで戦争が始まる」という本を読んでいる話をしたら、「あれを読んでいるのは通なんですよ」

と喜んでもらったことがあり仲良くなった。一緒に酒を飲んだ仲間たちは、流行作家の彼と付き合っているのもあって、誰も本を読んでいなかった。

「5分後の世界」、「愛と幻想のファシズム」、「半島を出よ」など、話題作が出ると必ず読んできた。取り上げる題材の面白さ、物語の構成や細部の描写、問題の設定など、すぐれた作品を一定の速度で出し続けていて、ファンとして存在感が大きくなっていくのを私も楽しんできた。

無趣味のすすめ」とは、そのタイトル通りの「仕事のすすめ」のことだったのだが、このエッセイを読むと共感、同感することが多いことに気づく。

「ワークライフバランス」の項など、「仕事というのは、生活の一部であって、、、」「仕事と家庭、という区分だったらまだわかる」、などは、このブログに昨年6月4日に書いた下記の下記の「ワークライフバランス」という言葉の不思議と同じ趣旨である。この言葉に私と同じ違和感を覚えた人に初めて会った。

「ワークライフバランス」という言葉を数年前からよく耳にするようになった。

この言葉、どこかおかしくないだろうか。「ワークライフバランスは「仕事と生活の調和」などと訳されている。「と」で前後をつないでいるということは、その前後は並列の関係であるはずだ。「男性と女性」「ボールペンと鉛筆」「机と椅子」「時計と帽子」。いずれも「と」の前後は並列の関係だ。

ところが「三色ボールペンとボールペン」となるとどうだろうか。違和感を抱かないだろうか。あるいは「時計と腕時計」や「帽子と野球帽」はどうだろうか。「机の上に置いてある三色ボールペンとボールペンを持ってきてください」と言われたら、誰も戸惑うのではないだろうか。「時計と腕時計」も「帽子と野球帽」も「三色ボールペンとボールペン」も、いずれも並列の関係ではない。腕時計は時計の一種だし、野球帽は帽子、三色ボールペンはボールペンの一種だ。

「ワークライフバランス」にも、これらと同じ間違いがあると思う。ワークとは「仕事」のことである。ライフは「人生」とか「生命」「生活」「暮らし」といった意味だ。考えてみればすぐにわかるが、仕事(ワーク)は人生(ライフ)の一部である。生活ないしは暮らしの一部でもある。ということは、ワークとライフが並列の関係であるはずがない。ライフの中にワークがあるのだ。だからワークとライフのバランスをとろうというのはおかしい考え方ということになる。

ライフの中にキャリアがある。そのキャリアの中に仕事(ワーク)がある。私の考えでは、キャリアには、仕事のほかに学習と経験がある。ライフには、キャリアのほかに、家族や趣味などがある。すなわちライフ(人生、生活)とは、仕事(ワーク)を中心としたキャリアや、家族、趣味などの総体なのだ。このように考えてみると、ライフデザインが最も重要であることに気づく。ライフデザインの中核はキャリアデザインで、そのキャリアデザイ

ンの中核が仕事(ワーク)ということになる。アメリカで生まれ、日本でも官庁や日本経団連が主導する「ワークライフバランス」には疑問符をつけざるを得ない。

安易に、そして無批判に外国の言葉を輸入する前に、一呼吸置いて自分の頭で考えたいものである。

「最高傑作と「作品群」」では、まず多作であることが前提で、しかも「体系的・重層的」な作品群を持つことが必須だということ、その中で最高傑作が生まれるという。それは、「怒涛の仕事量」をこなすなかで、傑作が生まれ、その中から生涯の代表作が生まれるということとも通じる。体系的・重層的、そして立体的に、膨大な仕事を積み上げていきたいものである。

「仕事は何としてもやり遂げ、成功させなければならないものだ」

「情報や知識や何らかの人的魅力など、その人に何らかの有用性がなければ相手にしてもらえない。まずは自分を磨くことから始めなければならない」

「アイデアは「組み合わせ」であって、発見などではない。」「アイデアを生む発想力というのは、偏在する膨大な記憶を徹底的に「検索」し、適したものを表面に浮かび上がらせる力ではないかと思う。」

こういうところは、ビジネスマン時代の経験を若いビジネスマンに向けて書いている私と同じ感覚だ。

グローバリズムに適応するときにもっとも重要なのは、コミュニケーションだということ、  
「友人とは密に、敵とはもっと密に、と彼(父親)に教わった」という珠玉の言葉も紹介している(映画「ゴッドファーザーPART2」)におけるマイケル・コルレオーネの台詞)。

小説を書く、という仕事も他の仕事と変わらない。この作家の場合、問題の発見・発掘、情報の収集、企画、から実際の日常の行動、そして問題の解決に至るまでの道筋は、ビジネスマンと同じだということがよくわかる。

このエッセイは、いわゆる小説家の人生論というものではなく、作家という職業を持つ現役の仕事師としての感慨が素直に述べられているので、安心してすんなり読み通すことができる。多くのビジネスマンの読者を獲得するだろう。

森田元 「戦略キャンプ」(ダイヤモンド社)

3月にダイヤモンド社から出た「「戦略キャンプ」-2泊3日で最強の戦略と実行チームをつくる」を読んだ。

IBMビジネスコンサルティングサービスの戦略コンサルティンググループが、この会社独自の文化の中で育った考え方と、このグループのコンサルティングの現場から得た知見が盛り込まれている良書である。

「戦略キャンプ」とは、変革にかかわるキーパソン全員がオフサイトで合宿を行い、徹

底的に議論し、腑に落ちる合意に至ることによって、困難な課題も解決に導くことと定義されている。

会社の基本戦略が実行されないのは、ホンネで議論していないから戦略の決定時点ですでに問題を内包している、つまり腑に落ちる合意をしていないことが問題だと指摘している。だから、よく練られた合宿というステージを用いることによって、論理的にも感情的にも全員が納得できる合意を図ることができるかと主張している。そのための知恵と実際的なノウハウを提示している。

この本では、リアルタイムに議事録ができあがる会議用の専用ソフト、合宿場所の選定、正しい宴会のやり方、などの洗練されたノウハウの説明もあり、すぐに実行してみたいくなる仕掛けを持っている。

主張の大ぶりの骨格を一定のリズムでわかりやすく説明できているので、説得力がある良い本に仕上がっている。

著者らの企業における実際の経験や、クライアント企業のコンサル体験を踏まえた内容となっており、共感する読者も多いと思う。

第一部で披露されている考え方では、「感情と論理の相互作用が困難な合意を可能にする」「リアルタイム議事録が議論の質と効率を高める」「ギリギリで成立する合意がやり遂げる力を生む」「合宿経営への道」などが整理されて述べられている。

第二部は、戦略キャンプの進め方が臨場感をもって理解できるようにストーリーしたてで書かれている。主人公は、事務局に指名された部長クラスで、課題は二つの経営の重要課題である。経営改革の現場に一度でも立ったことのある人は、身につまされるだろう。

第三部の「戦略キャンプ実践マニュアル」は、座長の決め方、日数、場所、メンバーの選定、席次、自己紹介、休憩、リアルタイム議事録、宴会の実践マニュアル、合宿のその後、など実践的な課題とそれを克服するノウハウとドゥハウが紹介されていて、役に立つ。

この本を読みながら、40代半ばまで勤務していた大企業で、経営革新プロジェクトに心血を注いでいたことを思い出していた。この主人公の立場は私の企業での体験と重なるところが多かった。多くの企業で改革を担当する人は、同じような課題と障害を持っているので、深い共感を呼ぶだろう。

そして、私の一連の著作との関連で内容を読んだ。

この本のテーマは私の著作の問題意識と重なる部分が多い。それは組織や関係者間の「合意」をいかにしてとるかということであり、私はそれを「社会的合意形」という言葉で述べてきた。

2005年に書いた「合意術―深堀型問題解決のすすめ」(日経新聞社)や、2009年に出した「タテの会議 ヨコの会議」(ダイヤモンド社)が、私なりの答であるし、広くいえば「図解コミュニケーション」という考え方とその技術も、明らかに「合意」に関係してい

る。「合意術」は「納得づくで仕事をうまく進める法」であるし、「会議術」では、理解と伝達を目的とするタテの会議と企画・構想を目的とするヨコの会議を紹介している。

- ・ 関係者の実行意欲がわからない合意を悪い合意と名づけ、具体的な行動に結びつく合意を「よい合意」と呼び、そのための考え方と方法を述べた。
- ・ 合意は、定性情報・図解思考・顧客視点をを用いることによって成立する。
- ・ 評価より評判、説得より納得、理論より方法、構造より関係、、、といった一連の考え方。

ビジネスは、煎じつめれば、「コミュニケーションと合意」がテーマであり、その大きな山に様々なアプローチ方法があるということだ。

この「戦略キャンプ」という本は、改めてそういうことを想起させてくれた。組織やプロジェクトの責任者は、この本を読むことによって、ノウハウだけでなく、前向きなエネルギーをもらえるだろう。

梅田望夫 「シリコンバレーから将棋を観る―羽生善治と現代」(中央公論社)

充電中の梅田望夫さんが、「シリコンバレーから将棋を観る―羽生善治と現代」(中央公論社)という本を書いた。

2008年は将棋という趣味に没頭できた最高の一年だったと述懐しているように、この本は結果的に羽生善治を代表とする日本の若い棋士たちの頭の中を探検し、優しく鋭いまなざしでその世界を描いた好著となった。

未来をイメージし、そこに向けての第一歩を踏み出している「ビジョナリー」たちの言葉に耳を傾け、未来の姿を考える、それが梅田の仕事であるが、今まではIT時代の最先端を走る人たちを追いかけてきた。今回は、日本の伝統文化の中に生き、もっとも日本人らしい生き方をしている棋士という若き人々の物語である。

将棋界最高のビジョナリー・羽生は、「知のオープン化」と「勝つこと」というインターネット時代の思想を体現している。自らの頭脳ををオープンにさらけだし、その上でライバルたちと一緒に手を携えて高い嶺に登ろうとしている。それは、自らの「創造力に自信を持つリーダーの姿である。

将棋の世界は、羽生善治を先頭として、佐藤康光、深浦康市、渡辺明ら羽生の好敵手たちとの共同作業によって新しい地平を切り拓きつつある。彼らは敵というより、同志だった。

梅田は、偶然と必然に導かれながら、タイトル戦をじかに観察する機会を与えられる。

奥の深い将棋の世界にとりつかれている度合いが並外れていて、それが天才の中から抜きん出るといことである。勝者も敗者もない、科学者が真理を追求する姿があった。シリコンバレーの技術者集団に似ている、、、などさまざまな観察が述べてあり、読者として十分に楽しめるのだが、棋士たちの素顔を描いた記述が印象に残った。

「とにかくまず、おそろしく頭がいい。地頭の良さが抜群で、頭の回転が速く、記憶力もいいから、話が面白い。自信に満ちている。会話の中で、相手の真意を察する能力にも、びっくりするほど長けている。だから会話がスムーズで心地よい。そして組織人とはまったく違う。そして技術者、芸術家、学者とも違う、不思議で素敵な日本文化を身体にまとっている。ときおり無頼の匂いがする。宵越しの金は持たぬという職人氣質も見える。しかし礼儀正しく、若くても老成した雰囲気がある。物事に対してすごくまじめで、何事も個がすべてだという感覚が当然のごとく人格にしみこんでいて、自分で物事をさっと決めてその責任を引き受ける潔さが、何気ない言葉の端々からうかがえる。時間的な制約にとらわれない生活をしているせいか、酒飲みが多く、遊ぶことにも貪欲だ。凝り性なのだろう。趣味や遊びに対しても、持ち前の記憶力で細部にこだわる風がある。そして、将棋や将棋界を愛する人たちを大切にしている。気持を彼らは心から持ち、将棋を通して人々と深くつながっていくことができる。」

ビジョナリー・羽生との対談では、こころを許した友人同士の節度ある交流の中で、本質に迫る議論が展開される。

「将棋って、最初から最後までずっと流れ続けていくものですよ。」「ねじり」「曖昧模糊さ、いい加減さを前に、どれだけ普通でいられるか」「可能性を極力残しつつ、残しつつ進めていくのが大事な要素となる、というのが、私の経験則ですね」「どこかやっぱり、他力本願的なところがあるんですよ」「一人で完成させるのではなく、制約のある中でベストを尽くして他者に委ねる、そういうものだと思いますね」「ある種、学術的な感じもするときがあるんです。棋士の人たち、ゲノムなんかの解析をやっているんじゃないか、と思うときもあります」

羽生はリラックスして、梅田の質問に喚起されて、引き出されている感じがする。対談相手しだいで語る内容が深まる、あるいは普段考えていないような世界を自分の言葉で語ることもある。対談も実は将棋の対局に似ている。だから、羽生も相手との対話の中で、楽しみながら創造の世界に入っているのだろう。

梅田の書いた佐藤と羽生の竜王戦のリアルタイム観戦記には、実に7600万のアクセスがあった。この観戦記について羽生は、梅田さんも対局してたという表現を使っていたが、その通りだろう。この趣味の世界を相手にするときも流儀を変えず、全力で散りくんだことがわかる。本来「充電」とはこういう形なのだろう。

- ・ 私のPCには、将棋年鑑のデータが一万 4567 局入っている。
- ・ 対局場で観戦しながら思い起こすかもしれない素材をすべて、ウェブ上の私のプライベート空間に、事前にぎっしりと敷き詰めておくことだった。
- ・ 私は、対局の一か月前から、二人の対局者の過去の著作、「将棋世界」過去十数年分のバックナンバーの中で二人が語っていた言葉、現代将棋をめぐるさまざまな言説などから、これぞ「肝」だと感じた箇所だけすべて抜き書きし、ウェブ上のプライベート空間に筆者し、観戦記執筆時点でアクセス可能な脳の外部記憶装置を

準備した。それが私の用意した「構え」であった。

- ・ 今回の私の挑戦は、インターネットの特性そのものとも言うべき「リアルタイム性と分量無制限」という二つの優位にこだわって、その優位をどこまで活かしたものが書けるのかを試してみよう、という実験でもあった。
- ・ ちなみに私は、将棋の本や雑誌を読んで感動した部分があると必ず筆写して、ネットの「あちら側」に置いてある。だから必要なときにすぐ引用できる。それがパリからであっても。）
- ・ 僕は毎朝だいたい午前4時くらいに起きて、まず昨日一日のうちに世界で何が起きたかを勉強するわけですよ。
- ・ 本業のほうは、将棋のおかげでいい仕事できています。他にはたとえば、絵を見ることもよく似ています。

私たちの知らない世界がある。その世界をさらに豊かにするためには、なかなか垣間見ることができない閉じられた世界を内部からこじ開けようとする人と、その世界を外部から覗き込もうとする人が必要だ。内部の人は羽生で、外部の人が梅田である。

内部の第一人者と外部の優れた観察者が出会ったという偶然には、必然を感じる。こういう出会いによって、将棋界はもちろんのこと、日本人の精神世界も広がり深さを獲得するだろう。日本にはこういう伝統文化が数多くある。そういう資源の掘り起こしが、大切な時代になった。

私自身には「リアルタイム」と「対話」というキーワードも頭に残った。

瀬戸内寂聴 「奇縁まんだら・続」 (日本経済新聞出版社)

昨年出た「奇縁まんだら」は、島崎藤村から始まる 21 人の作家・芸術家との交友録で、偉大な作家たちの私生活や本音、男女関係などが、寂聴の軽妙なタッチで描かれており十分に堪能した。

「続」は、2008 年の 1 月 12 日から 12 月 28 日にわたって連載されたエッセイをまおとめあもので、円地文子、萩原葉子、島尾敏雄の 3 人の分は、あらたに書き下ろしたものだそうだ。そういえば、他の人の文章はほとんど記憶にあったが、この 3 人の文章は初めて読んだ。

前作は、島崎藤村、川端康成、三島由起夫、谷崎潤一郎、宇野千代、松本清張、遠藤周作、と絢爛豪華だったが、今回は時代が少し下がっていて、そういう意味では馴染みがある作家たちが並んでいる。寂聴より年上の人が多いが、年下もいる。そして全員がすでに鬼籍に入っている。その人たちを米寿を迎えた寂聴が愛情を持って描いて赤裸々に描いている。

菊田一夫(65歳)、開高健(58歳)、城夏子(92歳)、柴田練三郎(61歳)、草野心平(85歳)、湯浅芳子(93歳)、円地文子(81歳)、久保田万太郎(73歳)木山しょう平(64

歳)、江国滋(62歳)、黒岩重吾(79歳)、有吉佐和子(53歳)、武田泰淳(64歳)、高見順(58歳)、藤原義江(51歳)、福田恒存(82歳)、中上健次(46歳)、淡谷のり子(92歳)、野間宏(75歳)、フランソアーズ・サガン(69歳)、森茉莉(84歳)、萩原葉子(84歳)、永井龍男(86歳)、鈴木真砂女(96歳)、大庭みな子(76歳)、島尾敏雄(69歳)、井上光晴(66歳)、小田仁三郎(68歳)

各人の紹介では、必ず生年と没年と、享年が書かれている。また本文でも寂聴との上下の年齢差が記してあり、寂聴の立ち位置がわかる。

また、それぞれの前作で異常な人気を博した横尾忠則の肖像画に加え、墓の写真と霊園の名前と場所が記されているなど、編集の統一がとれている。

森茉莉は森鷗外の長女であり、萩原葉子は萩原朔太郎の長女。そして小田二三郎は、寂聴の同棲の相手である。

湯浅芳子はレズビアン先の先駆者。

この本は人物論の一種であるが、書き出しもうまい。

「正月になると思いだす人がいる。菊田一夫さんである。」

「開高健さんは、親しくなった頃からすでに肥っていた。」

「城夏子――何だか宝塚のスターのようなロマンチックで、オトメチックな名を覚えたのは早かった。」

「柴田錬三郎さんは誰もフルネームで呼ぶ人はいなかった。「シシバレン」で天下に通っていた。」

「江国さんは、、、。ほとんど笑顔など見せないなので、老成した感じがした。」

(江国先生とは、私のビジネスマン時代に何度かお会いしている。ある雰囲気の良い料理屋で見事な手品を見せてもらったことを思い出した)

「黒岩さんはハンサムだった。」

「島尾敏雄さんはハンサムだった。」

「一度何した女とは別れたあとも、旅の度土産物を届けることにしている」のは、菊田一夫。

「残寒やこの俺がこの俺が癌」「おい癌め 酌み交わさうぜ秋の酒」と詠んだのは、江国滋。

「ゆく春や身に幸せの割烹着」「萤火や女の道をふみはづし」と詠んだのは、鈴木真砂女。

「私と瀬戸内さんは男の趣味が同じなのね。、、」続いてCの話をして、Cに目下一番興味があると言った。その時、私はCとはそういう関係だたtので、思いがけない不快さを感じた。と寂聴に書かせた大庭みな子。

「あんたのようなわがままな人と長くつきあえる人間はおれくらいのもんだ」と威張ったが、私の側にも言わせてもえらえば、同じ言葉になる。と寂聴に書かせた井上光晴。

寂聴自身のこともいろいろとわかる。

- ・ 4歳の子供を夫の許において家を出た。
- ・ 出家した翌よく年、クモ膜下出血で、左半身が麻痺して、言葉がロレったことがあった。

88年の歳月を必死に生きて、小説を書いて、多くの作家たちと交流した寂聴の自伝でもあり、文壇史でもある正と続のこの本は、人物論としても、文壇外史としても、一級のエンターテインメント性を備えている。多作な寂聴ではあるが、これは代表作として後世にも読まれ続ける息の長い本となるだろう。

西川祐子 「日記をつづるとのこと 国民教育装置とその逸脱」(吉川弘文館)

ブログの連続記入の記録の目標が目前に迫ってきたので、「日記」に改めて関心がわく。始めた当初からの目標とは、ヤンキースの松井秀喜選手の連続試合出場記録の1768である。

というわけで、西川祐子の労作「日記をつづるとのこと 国民教育装置とその逸脱」(吉川弘文館)を読んだ。和紙に墨と筆でつづる日記が主流の時代と、電子媒体の日記であるウェブ日記、ブログ、SNSが普及する時代の間にはさまれた日記帳の時代を対象とした研究書である。

「日記とは何か」、「近代移行期の日記」、「日記帳という商品」、「家計簿と主婦日記の創出」、「内面の日記の創出」、「戦争日記の世界」、「日記による戦後再編成」、「未知の編成を生きる—教育装置か、その逸脱か」と章が続くこの本は、日記の通読という「つづけ読み」と同時代のさまざまな日記の併読「ならべ読み」を用いて過去の膨大な生の日記を読むという作業から生まれた作品である。

樋口一葉の「一葉日記」、日記という商品を考案した博文館のマーケット開拓、羽仁もと子の発明した家計簿と主婦日記との関係、旧制高等学校の教養主義と精神主義から起こった内面を記す日記文化、戦争日記、戦後の廃墟の中で個人と集団を再編成するために日記帳が力を発揮したこと、そして日記をつづる習慣が個人の生活時間の管理意識を高め集団の規律を身につけることにつながったこと、などが長い年月を費やして収集した豊富な事例とともに紹介されている。

内容については後に記す予定だが、この本の中で紹介されている「日本日記クラブ」のいう「日記人」に相当する現代のブロガーにも、参考になる一書である。

その延長線上に、「人間・野上弥生子「野上弥生子日記」から」(中村智子・思想の科学社)を読んでいる。実に面白い。

次は、「徳富蘇峰 終戦後日記」(講談社)に手をつけるつもり。

山本冬彦 「週末はギャラリーめぐり」(ちくま新書)

「週末はギャラリーめぐり」(ちくま新書)を読んだ。サラリーマン人生をこなしながら、

30 年間にわって毎週末の画廊めぐりとアート蒐集を趣味として続け、1300 点のアートを持つにいたった山本冬彦さんが、60 歳の還暦を迎えるにあたっての記念として書いた本である。

30 代、40 代、50 代という長い年月を、脇目もふらず一つのことに没頭した人生の達人の書だ。毎週土曜日には、雨の日も風の日も朝 10 時から夕方までの画廊巡りを続けたその蓄積が、控えめながらこの書全体にわたって滲み出ている。サラリーマンの常道であるゴルフ、酒、タバコ、カラオケ、マージャン、競馬など一切やらず、車も持たずに一点集中して絵画の蒐集にあたってきたという。著者は人生の達人といってよい。

「観るアート」から「買うアート」へ。美術品購入の基礎知識、美術品の価格、展示・保存。画廊巡りの楽しみ方。サラリーマンコレクターとしての人生、個人美術館への道。芸術家をとりまく厳しい現状と支援の方法。そういった知識と作法が具体的にやさしく書かれており、素人にはなかなかうかがい知れないこの世界へ誘ってくれる。この本を読むと、私たちと同時代を生きる作家たちへの支援という著者の高い志に感銘を受ける。

絵画の世界についての数字を少し拾ってみよう。

- ・ 六本木と上野の主な美術館入場者数は 2007 年で 940 万人。日本の展覧会動員数は 2004 年から 5 年連続世界一。
- ・ 世界の美術品マーケットは、2007 年で 350 億ドル(4兆 1223 億円)
- ・ 日本のオークション市場は、2007 年で 245 億円。うち現代アートは 34 億円。
- ・ 美術品購入の入り口である版画は、1 万円から 3 万円でそれなりの作品を買うことができる。
- ・ 一号とはだいたい葉書一枚の大きさ
- ・ ギャラリーツアーの参加者の 7-8 割は女性、しかも働く女性が主流。海外旅行やブランドを卒業し、新たなジャンルになってきている。

著者はアートソムリエとして、画廊界にはアートを一般に普及する活動を勧めている。それは、個人向けの講座、シンポジウム、講演会、ギャラリーツアーの主催などの啓蒙活動だ。そして個人向けには、心ある個人の「個人メセナ」を期待している。

おすすめのアートに関するテレビ番組

- ・ NHK 日曜美術館(教育テレビ・日曜日 9 時-10 時)・迷宮美術館(BShi・月曜日 22 時-22 時 45 分)・美の壺(教育・金曜日 22 時-22 時 25 分)
- ・ テレビ東京 美の巨人たち(土曜日 22 時-22 時 30 分)・開運!なんでも鑑定団(火曜日 20 時 54 分-21 時 54 分)

画廊めぐりに役立つサイト

- ・ 芸力 <http://geiriki.com> 全国のギャラリーの展覧会情報が地域別に、そしてタイ

ムリーに見ることができる。

安価なアート作品をボーナス毎に一点ずつ買っていくと5年で10点となり、自宅が個人美術館になるそうだ。そしてコレクションという行為は実は編集であり、創造的な行為であるとのことであり、独自の目が重要である。そういったコレクターの目は、その作品を買うか買わないかという真剣勝負で磨かれていく。だから画廊巡りでは、どれを家に持ち帰ろうかという気持ちで見ることが大切だそうだ。

最後に著者が注目している同時代の現代アート作家たちの個人名とその活躍を整理している。村上隆以外には名前を知らなかったが、日本の財産ともいべき才能たちが多くいる。

サラリーマンコレクターとして30年という年月を過ごしてきた著者には、本物を見分ける目と作家たちを見まもる暖かい心が備わっている。そのことが一貫したスタイルで書き綴ることができるというレベルの高い文章を読む中でわかる。

私自身ここ5年ほど続けて300館に到達しつつある「人物記念館の旅」の参考になることも多かった。

美術界はここに楽しむ側に立つ一人の貴重な解説者を得たようである。

またこの本は、サラリーマンの生き方の一つの優れたモデルを提示したという意味で、この著者を発掘した企画の勝利でもある。

語り森繁久彌・文久世光彦 「大遺言書」シリーズ（新潮社）

不思議な書である。

森繁久彌が「語り」、久世光彦が「文」を書いたという形の本である。インタビューでもなければ、共著でもない。確かに久世光彦の文章なのだが、この二人の位置関係は、表紙や奥付で久世光彦の名前がほんの少しだけ下がっているところに現れているとも見える。この微妙な配慮がいい。

「大遺言書」「今さらながら 大遺言書」「さらば 大遺言書」という連作をここ二日間で読み切った。

「週刊新潮」で2002年5月2日・9日号から始まった「大遺言書」の連載は、2006年3月まで続いた。卒寿を越えた森繁と、二まわりほど若い久世のどちらかが亡くなるまで続けるという約束だったが、2006年3月2日の久世光彦の逝去によりこの人気連載も終了している。そして、その森繁久彌も、今年2009年11月10日に96歳で大往生を遂げる。

森繁の自宅に久世が伺い、健啖家の森繁の相手を務めながら、森繁久彌という大いなる人物の回想を聞き出している。そしてその時の様子や感じたこと、思い出したこと、そして森繁久彌という人物の陰影などが生涯の師匠と仰ぐ久世光彦の名文で記さ

れていく。久世の慨嘆、感銘、感想、感慨などもいい。これは、晩年の生き様を描いた書でもあり、人生の書でもある。読者は、森繁久彌という国民的俳優の目を通して、歴史と人間を深く味わうことができる。

毎週原稿用紙 7.5 枚を 4 年近く書き続けたことになるが、互いの生涯を賭けた対話であったという印象を持った。書いた久世にとっても、書かれた森繁にとっても至福の時間だったと思う。

森繁久彌という俳優は、俳優としての実力は群を抜いているが、その土台は豊かな教養に裏打ちされていると思わずにはいられない。鋭い批評眼、本質をとらえる矢のような言葉などを読むと、優れた文化人であったという思いを強くする。

若い頃の森繁久彌は、やや軽い顔をしているが、だんだん顔が良くなって、晩年になるほど「いい顔」になっている。俳優という職業に命を懸けて少しづつ内容が磨かれていったということなのだろうか。

- ・ このごろの文芸作品にリズムと品格がないのは、作家に漢学あるいは漢詩の素養がないからだと言っている森繁さんは言う。
- ・ 長生きするということは、人と一人また一人と、別れてゆくことです。、、、この年になると、悲しいというのと違う。—辛い
- ・ 私にしてみれば、どの人も夭折です。
- ・ いつだって、人の世の主役は人間ではなく、歳月です。
- ・ 人と人との間は、どんな親しい仲でも、薄氷を踏んでいるようなものです。
- ・ (今日もインタビューは歌で終わる。)
- ・ 女優の華と人生とは、反比例の関係にあるんでしょうかねえ。因果なことです。
- ・ 役者というものは、長火鉢一つで、人生をすべて表現しなければならないと言っても、言い過ぎではありません。
- ・ 映画や芝居を見て学ぶということは、まあ、ありません。実際の人生の方が、はるかに可らしいし、切ない。
- ・ 味に贅沢なこの国に生まれて幸福でした、。
- ・ 勝(新太郎)は私との二時間ばかりの放談の場を、一つの「芸」の場にしようとしているんです。あのときの「殺気」を思い出すと、今でも鳥肌が立ちます。
- ・ 芝居の仕事は、私の「真剣な遊び」です。
- ・ 懸命に働きはしましたが、やっぱり運です。
- ・ 正直言うと、私は自分の映画のほとんどを、恥ずかしいから見ていないのです。
- ・ (森繁さんは夜が更けて眠たくなるころになると、天眼鏡で「広辞苑」を眺めているのだというのだ。)
- ・ 三割隠すところにこそ、「芝居」の真実はあるのです。
- ・ 私は「小学唱歌」は、西欧の国で言えば「賛美歌」だと思います。
- ・ 「小学唱歌」や「文部省唱歌」には、いまとやかく言われている「歴史観」や「国家

観」や「国の心」とかいうものが、全て柔らかで優しい形で含まれています。

向田邦子、松山英太郎、樹木希林など森繁久彌が愛した才能などの話も興味深い。

神田敏晶 「Twitter 革命」(ソフトバンク新書)

「Twitter」に関する新書を二冊読んだ。Twitter の世界に数ヶ月浸ってみた段階で、この潮流について改めて整理してみたい。著者の神田さんは 40 代後半、津田さんは 30 代半ば、という年代。両方とも面白く刺激的だった。もっと本を読んでみようか。もっと没頭しようか。

- ・ 一人一人が自分を中心とした社会を持ってリアルという世界観だ。
- ・ ツイッターは単につぶやくというよりは、もっと多くの人達に何かを伝えているものなんだということがわかっていただけだと思う。
- ・ 情報をゆるやかに共有するもの
- ・ 「世界中がツイッターでつながれば、世界の鼓動を感じることができる」
- ・ 一つのツイートをきっかけに、タイムラインは拡大し、少しずつ違う味わいに変わっていく。
- ・ ツイッターを始めてから、大事なニュースを取りこぼすことがほとんどなくなったような気がする。
- ・ ツイッターがブログと異なる最大の理由は、「基本的に自分のタイムラインを眺めている」という点にある。
- ・ ブログを書くのにネタ 2 割、自分の分析コメントが 8 割と仮定すると、ツイッターはネタ 9 割、自分の分析コメントが 1 割くらいに感じられる。
- ・ 酒井法子の一手一投足をしつこく報じ続けるマスメディアの「公共性」など、もはや誰も信じない。
- ・ そう遠くないうちに、企業のサポート窓口は電話でなくツイッターが標準となる。
- ・ フォローが増える過程で、自分のタイムラインが変化していく様子を観察しよう。
- ・ タイムラインの底に埋没してRTの寿命が尽きるのがだいたい 24 時間後だ。
- ・ インフルエンサー
- ・ ツイッターは最高の市民サービスになる可能性がある。
- ・ ハガキの代わりにメールを、ポスターの代わりにウェブサイトを、政見放送にユーチューブを、そして選挙区回りの代わりにツイッターを！

津田大介 「Twitter 社会論」(洋泉社)

- ・ Twitter でイベントなどを生中継することを「Tsuda る」と呼ぶらしい。
- ・ 下手なハウツー・ビジネス本などwp読むよりも、自分が興味あるイベントのツイッタ

一中継をやってみた方が、、、

- ・ リアルタイム性と伝播力に優れるツイッターのようなツールが「報道」にもっとも適している。
- ・ 「監視」するのにうってつけなのだ。
- ・ それぞれのユーザーが得意分野で「監視作業」を行い、ちょっとでもおかしい気配を感じたらツイッターで騒いで影響力の大きい人物やメディア、ジャーナリストにコンタクトし、彼らにその問題を深く「掘ってもらおう」というやり方が、、、
- ・ メディアなどを通じて世間に問題が顕在化したときに、専門家によるアイレクトな反応をチェックできる。
- ・ 情報を囲い込むことでメディアが成立したジダは終わりを告げた。
- ・ 「評判が評判を呼ぶ」という特性を持つソーシャル・メディア、、
- ・ 緊急災害時におけるツイッター活用
- ・ 日本はツイッターどころか社員にブログを禁じている会社も少なくない。
- ・ 企業内部でツイッターを活用
- ・ 「会社内でもっとも「人間力」が高いユーザーをツイッター担当者にしろ」
- ・ ツイッターの本質は、、、「神経系」であるという。
- ・ ツイッターの独自性が理解できるのは、知り合い以外も含めて100人以上フォローするあたりからだ。、、そしてタイムラインの景色が変わるのが、フォロー数300-500を超えるあたりだ。

著者と勝間和代さんとの対談での勝間さんの発言

- ・ つぶやきって、短歌みたいなもの
- ・ ツイッターの外でコンテンツを持っていないと。
- ・ 「140字でフォロワー制」という仕組みが非常にバランスがいいんですよ。
- ・ タイムラインには触発されますね。結局、人から直接聞いた情報が一番質がいいんですよ。
- ・ 2ちゃんねるやミクシーよりは心地いいですよ。透明性は高い気はします。
- ・ 30代後半の男性が中心になってしまう。

内田樹「日本辺境論」(新潮新書)

カバーの袖に「読み出したら止まらない、日本論の金字塔、ここに誕生。」とある。読み終わって、そのとおりだと納得した。内田樹の「日本辺境論」(新潮新書)である。

中国、ヨーロッパ、アメリカなど常にどこかに世界の中心を定めて、自らを辺境人として位置づけ、独特の「学び」を続けてきた日本人の長い歴史がある。その学びを忘れて世界を語ったのが日露戦争から太平洋戦争までの時代であり、それが日本の暗黒の時代だった。「辺境人」であることの特質をわきまえてとことんやっつけよう、というの

がこの本の主旨である。

- ・ 「私達はたえず外を向いてきよろきよろして新しいものを外なる世界に求めながら、そういうきよろきよろしている自分自身は一向に変わらない。」(丸山真男)
- ・ 「何となく何者かに押されつつ、ずるずると国を挙げて戦争の渦中に突入したというこの驚くべき事態は何を意味するか。」(丸山)
- ・ 人種や信教や言語や文化を超えるような汎通性を持つような「大きな物語」を語る段になるとぱたりと思考停止に陥る。
- ・ 「世界標準に準拠してふるまうことはできるが、世界標準を新たに設定することはできない。それが境界の限界です。
- ・ 指南力のあるメッセージを発信するというのは、「そんなことを言うのは今のところ私の他に誰もいないけれど、私はそう思う」という態度のことです。
- ・ どうして「そういう判断に立ち至ったのか、自説を形成するに至った自己史的経緯を語れる人とだけしか私たちはネゴシエーションできません。
- ・ 弟子はどんな師に就いても、そこから学びを起動させることができる。
- ・ さまざまな人間的資質の開発プログラムを本邦では「道」として体系化している。
- ・ 「学ぶ」力こそは日本最大の国力でした、、、。ですから、「学ぶ」力を失った日本人には未来がないと私は思います。現代日本の国民的危機は「学ぶ」力の喪失、つまり境界の伝統の喪失なのだと私は考えています。
- ・ 日本的コミュニケーションの特徴は、メッセージのコンテンツの当否よりも、発信者受信者のどちらが「上位者」かの決定をあらゆる場合に優先させる点にあります。
- ・ 表音文字は図像で、表音文字は音声です。私たちは図像と音声の二つを並行処理しながら言語活動を行っている。でもこれはきわめて例外的な言語状況なのです。
- ・ 日本人の脳は文字を視覚的に入力しながら、漢字を図像対応部位で、かなを音声対応部位でそれぞれ処理している。記号入力を二箇所に分けて並行処理している。
- ・ 従属的・模倣的な「外向きの自己」と、、、卓説性を顕彰しようとする傲岸な「内向きの自己」に人格分裂するというかたちで日本人は集団的に狂ったというのが岸田秀の診断でした。
- ・ 列島の「東夷」という地政学的な位置と、それが採用した脳内の二箇所を並行使用するハイブリッド言語によって、「外」と「内」の対立と架橋は私たちの文化の深層構造を久しく形成していたというアイデアです。

寺島実郎 「世界を知る力」 (PHP新書)

「世界を知る力」(PHP新書)を何度も読んだ。

寺島実郎の世界を垣間見ることができる快著である。今までの寺島の本は一行一

行にかかっている時間と労力に読む人は押しつぶされそうになっていたように思うが、そういった知識の大海の中から浮き出た氷山の一角のような本に仕上がっている。語り口がやさしく、読みやすい。新書のベストセラーにはやくもランク入りしてようだが、この本によってより多くの人々が寺島実郎の主張と考え方、バックボーンを理解するようになるだろう。この本で影響力は一段と増してくることになると思う。以下、この本の中の重要な部分を抜き書きしておく。

今朝はシンガポールから帰国した寺島さんから電話をもらった。「大中華圏の南端に位置して中国の成長力をASEANにつなぐ基点となると同時に、インドそしてオーストラリアの成長力をもASEANにつなぐ基点になりつつある」と述べているシンガポールに数日滞在していたのである。このシンガポールは、「ユニオンジャックの矢」の一角を占めており、今後の世界の動向のキーの一つだ。日々、世界を知る力が積み上がっている。

- ・ 大空から鳥が世界を見晴らすように、宇宙船から地球を望むように、世界の広がり認識することが必要である。その一方で、虫が地面を這うように、自らの足を使って生身で現代社会を生きる人間の表情に触れること——人間社会の深みを知ろうとする営為も求められる。おそらく、「世界を知る」こととは、そういった試みの集積にはほかならない。
- ・ 「おや？」と思う事実をめぐる時、固定観念に縛れるのではなく、虚心坦懐に心を開き、時空を超えて視界を広げれば、必ずや「世界」は違って見えてくるはずなのである。
- ・ 現代世界で生じるさまざまな問題に対処する場合にも、空海のように、「全体知」を希求するなかで問題の本質的解決に向かわなければならない、と自分を戒めるのである。
- ・ 「裏日本」「表日本」感覚に象徴されるように、いつの間にか「アメリカを通してしか世界を見ない」というものの見方や考え方を身につけてしまったことを自覚するところからしか、「世界を知る力」の涵養は望めない。
- ・ 地政学的なものの見方というのも絶えず重要ではある、、、しかし表面的な現象に惑わされず、地下水脈のように世界に張りめぐらされたネットワークに着目することこそ、(表面的に)激動する現代世界をとらえるうえで、最も重要だと考えている。
- ・ 大中華圏という言葉は、、、実際に、中国、台湾、香港、シンガポールの産業的連携が深まることによって、大中華圏がひとつの産業的実体となりつつあることを示す言葉なのである。
- ・ 「ユニオンジャックの矢」は、英国にとっては国づくりの根幹をなす戦略なのである。つまり、ドバイ、バンガロール、シンガポール、シドニーと世界の成長センターをつなぐネットワークの基点となることで、英国にヒト・カネ・情報が集まる仕組みをつくり

だす。この直線は、そのまま英国の「生命線」なのだ。

- ・ 世界に散在するユダヤ人の間には、何が脈打っているのだろうか。、、わたしは、それを流浪の民ゆえに獲得した(せざるを得なかった)「ユダヤ的思想」に求めたい。、、、ユダヤ的思想の基軸は二つである。「国際主義」(という視点)と「高付加価値主義」(という戦略)だ。
- ・ ネットワーク型の視界を持つということは、一見バラバラに見える断片的な現象・情報に対して「相関の知」を働かせることである。
- ・ 20 世紀のアメリカは「自動車」と「石油」を相関させることで、「アメリカの世紀」を創造したともいえる。
- ・ オバマ政権の「グリーン・ニューディール」政策が、、。鍵を握るのは技術の相関である。EV(電気自動車)。RE(再生可能エネルギー)、IT(情報技術)がうまく相関・相乗すれば、うねりのような産業技術文明のパラダイム転換がもたらされるかもしれない。
- ・ いま世界は、超大国が支配した冷戦時代を終え、バラバラに分散された小さな部分が、ネットワーク化され相関することで、全体として大きな統合された力を発揮するような時代へと向かいつつある。
- ・ いま日本はようやく、「改革幻想」から解き放たれようとしている。、、、決別した「新・自由主義」の先にどういふ花を咲かせるべきかについては、まだ責任ある回答が見えていない。
- ・ アメリカにとってアジア太平洋のゲームは、同盟国日本を基軸とした時代から、日本も中国もという相対的なゲームへと本質的な変化を遂げた。
- ・ こういった国境を超えるネットワークが、うねりのような相関のなかで、世界を突き動かしていくのが 21 世紀の構図ではないだろうか。、、重曹的に「世界を知る力」が日本人すべてに求められている。
- ・ ネットワークを形成できる国や地域だけが力を発揮できる時代へと、現実に向かいつつある。
- ・ 分散型ネットワークの時代に照準を合わせ、空虚なマネーゲーム的熱狂から距離をとり、技術を育て、事業を育てる——「育てる資本主義」の道を堂々と進むこと、そこに日本の歩むべき道があると思う。
- ・ 日本の国際基盤である対米外交原則をあらためて明確にすることが欠かせないと考える、何よりも日米安保同盟のあり方を根本的に見直し、アメリカと「大人の関係」を構築していくことが重要だ。-、、健全な常識にかえることである。そもそも、独立国に外国の軍隊が駐留し続けていることが、いかに不自然な自体であるか。、、外国基地の縮小と地位協定改定を実現すること、それが一歩である。
- ・ もう一点重要なことがある。それは、「アメリカ」をアジアから孤立させない」ということだ。

- ・ 中国に対しても明確な外交原則を確立することが求められている。それは、中国が国際社会の責任の関与者としての役割を果たすよう積極的に働きかけるということである。
- ・ 日米中のトライアングルをより正三角形に近づけるような外交戦略を、日本はいまこそ採用すべきなのである。
- ・ 「友愛」を現実のものとする政治的な行動・ロゴス・政策による肉付けが必要である。その作業を積み重ねることが、すなわち、戦後外交の一大転換につながるとわたしは考えている。
- ・ 相互の利益につながる共同のプロジェクトを積み上げ、その実現過程で信頼関係を段階的に確かなものにしなければならないのである。
- ・ 「東アジア共同体構想」は、、、いまは限りなく空念仏に近いが、その理念を中心にして共通の利益を実現する「段階的接近法」が正当だと思うからである。
- ・ 「世界を知る」こととは、断片的だった知識が、さまざまな相関を見いだすことによってスパークして結びつき、全体的な知性へと変化していく過程を指すのではないだろうか。
- ・ 「世界を知る力」を養うためには、大空から世界を見渡す「鳥の目」と、しっかりと地面を見つめる「虫の目」の両方が必要だと考えている。その「虫の目」を鍛えるのは、なんといってもフィールドワークである、。
- ・ こうした体験の背後にある構造変化が見えてきて、統計を調べてみようと思うのである。身体性を有した体験がすごく大事である。統計の数字を見ているだけではわからない、世界の変化が見てとれるからだ。定期的に出かけているところなら、なおよい。一種の定点観測になって、細かな変化が目につくようになる。
- ・ 生身の身体性を有した体験は、ネットを通じてディスプレイに表示される情報とは比較にならないほどの強い印象を、わたしたちの脳に刻み込む。それが、文献では得られない強い問題意識を醸成させる。ただし、それを熟成させていくには、文献の力が必要だ。深い知恵は、フィールドワークと文献の相関のなかでしか生まれないのである。
- ・ 「、、、賛成はできなくても、あなたのものの見方、誠実に物事を組み立てて考えてみようという見方には大いに評価する、という姿勢が外交においても、国際社会を個人賭して生き抜く上でも大切だ」と。こういう姿勢を、外交の世界では「agree to disagree」の関係と呼ぶ。、、、-「賛成はできなくても、相手の主張の論点は理解した」という姿勢をもつことが肝要だ。
- ・ 外を知れば内がわかる。内がわかれば外とつながる回路ができるのだ。
- ・ 以来、わたしの脳裏には、情報は教養を高めるための手段ではない、問題を解決するためにいろいろな角度から集めるものでありということが、強く刻まれるようになる。断片的な情報を「全体知」へと高める動因は、問題解決に向けた強い意志で

ある。

- ・ 世界の不条理に目を向け、それを解説するのではなく、行動することで問題の解決にいたろうとする。そういう情念をもって世界に向き合うのでなければ、世界を知っても何の意味もないのである。
- ・ 「問題は何であり、自分は社会において何をなすべきか」という意識が、わたしを突き動かしてきたように思う。
- ・ わたしの生活を振り返るならば、航空機のなかで、そして列車のなかで、考え込みながら生きてきたようなものである。この移動空間は、ひとりの時間が確保できる場でもあり、沈黙、沈思黙考、後にしてきた場所で目撃し、確認してきたことを整理することのできる貴重な機会である。
- ・ この本は、若いゼミの学生か現場を支えるサラリーマン、時代を鋭い感性で見つめる知的女性に語りかける意識でつくられたものであり、これを手にした諸君が何かひらめいてくれれば、望外の喜びである。
- ・ わたしは「マージナルマン」という言葉を心に抱いてきた。マージナルマンとは境界人という意味で、複数の系の境界に立つ生き方という意味である。ひとつの足を帰属する企業・組織に置き、そこでの役割を心を込めて果たしつつ、一方で組織に埋没することなく、もうひとつの足を社会に置き、世界のあり方や社会のなかでの自分の役割を見つめるという生き方、それをマージナルマンという。
- ・ 自分の時間を確保する努力をし、会社の外の研究会に参加したり、フィールドワークをする試みを続け、それを毎夜机に向かい整理して作品のみにしてきた。
- ・ 自らのテーマをもち、自らのライフスタイルを貫く意志をもちながら、帰属組織に腰を据えて参画する、これがマージナルマンの生き方なのである。
- ・ 産学官の境界を見つめることによって、それぞれの相関のなかで時代が鮮明に見えるということもある。わたしの心のなかでは、産学官のシナジーのなかでひとつの仕事をしているという実感がある。世界を知り、課題に挑戦するという仕事である。
- ・ 時代は断片的な分断された知性ではなく、ますます総合化・体系化された知性を必要とする。そうした方向で、わたしの周りに、現場を支える若い知性を育てること、そこに大いなる意欲をかきたてられる